会報
特攻
平成23年8月

第88号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒105-0014 東京都港区芝2-5-19TAビル
電　話 03（5730）1016
ＦＡＸ 03（5730）1017
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

靖國神社みたままつり

7月13日、この日は新暦のお盆の入りである。迎え火といって、盂蘭盆の行事の一つとして、昔は7月13日の夜、先祖の精霊を迎えるために、家の門前で麻幹（麻の皮を剥ぎ取った茎）を焚いたものである。いつの頃からか麻幹焚きが盆提灯に変わったが、今でもその日は夕刻、提灯を持って先祖のお墓に詣り、提灯で足元を照らしながら先祖の霊を家まで導いて行く迎え火の行事が私の周りの家でも行われている。

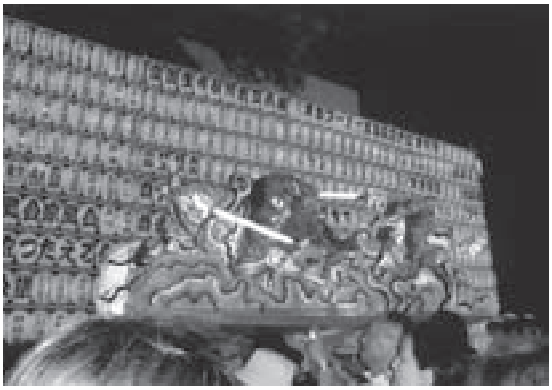
今日から靖國神社「みたままつり」が始まる。その前夜祭の日である。例年のとおり、早目にお墓参りを済ませて、靖國神社に向かう。今年は早々と梅雨も明けて（東京は7月9日）、連

目次

靖國神社みたままつり …………… 1
理事長就任のご挨拶 …………… 3
殉國沖縄學徒顯彰六拾六年祭 … 6
沖縄慰霊の日の現地の新聞を見て … 10
摩文仁の丘・清掃奉仕活動で受け継がれる慰霊の心 ……… 11
平成23年度豫科練雄飛会慰霊祭 … 14
平成23年「枕崎」「鹿屋」慰霊の旅 …… 15
平成23年度第52回出水市特攻碑慰霊祭 … 18
「よろずよに！」第40回萬世特攻慰霊祭に参列して … 19
川棚町「特攻殉国の碑」慰霊祭に参列して ………… 21
第57回知覧特攻基地戦没者慰霊祭 … 22
第57回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して ………… 24
千葉縣護國神社奉納「特攻勇士之像」除幕式 ………… 27
「翔天の詩」を巡って ………… 32
「塞翁が馬」のわが青春 ………… 33
第44回豫科練戦没者慰霊祭 …… 36
特集・特攻インタビュー（第5回）陸軍水上特攻　皆本義博氏 …… 38
劇団夜想会公演「俺は、君のためにこそ死ににいく」の公演を終えて ……… 57
知覧・特攻の母鳥濱トメの演劇「俺は、君のためにこそ死ににいく」を観劇して ………… 59
「戦史検定」を受けてみませんか 61
新刊図書紹介 ……… 62
お知らせ ………… 62
事務局からの報告等 ………… 63
暑中お見舞い等 ………… 64

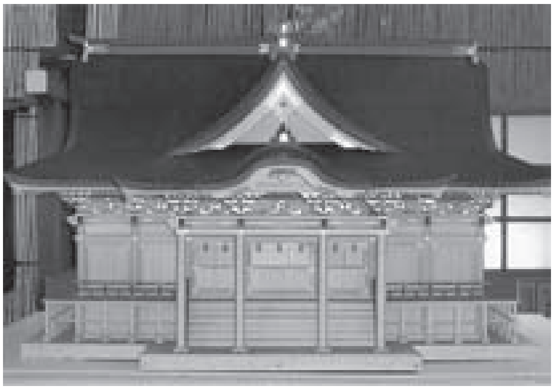
日の猛暑続きである。
3月11日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原発の大事故の影響を受けて一時は自粛かとも思われたが、こういう時にこそ、英霊の志を偲び、英霊の御加護を求めて、国民の心を一つにすべく、この祭礼を盛んに行うべきとの天の声を受けたか、祭礼はいつものとおり盛大に始まった。

大鳥居から第二鳥居前にある下乗札までの外苑参道両則には、沢山の屋台店が連なり、焼き鳥、焼きそば、焼きとうもろこしなどの香ばしい匂いが漂っている。17時前後には、既に若者を中心に、学校や勤め帰りの参詣人で


青森・ねぶた

賑わっていた。大村益次郎銅像の周りには、民謡や盆踊りの舞台が作られ、浴衣姿やはっぴ姿の人々も見受けられる。

やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞（ぼんぼり）が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかな雰囲気を醸し出し、大勢の参詣者で賑う靖國神社の「みたままつり」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13日～16日に、神社の正式行事として斎行されてから


熊本・山鹿燈篭

今年で満64年、65回目を迎えた。

この「みたままつり」の由来や意義については、東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖国神社と日本人』（平成10年8月・PHP新書）や靖國神社社報「やすくに」第６２４号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、この「みたま祭」の由来と意義に関して、次のような興味ある記述があるので、前回に引き続き再度紹介させていただく。

先ず、この「みたま祭」で慰霊されるのは、靖國神社の御祭神だけではなく、空襲等による一般戦没者も含まれ

東京・江戸風鈴

るということである。

終戦直後の昭和20年9月、靖國神社を所管する陸軍省は「軍の解散前に、支那事変・大東亜戦争の為に死没した軍人・軍属等２１３万余柱の英霊」の「大合祀祭」実施を提唱する際、「敵の戦闘行動に因り死没したる者は、軍人・軍属に限定することなく全般的に合祀せらる、」ことを要望した。それに対して宮内省は、「柱数・氏名不明の一般戦災者」を本殿に合祀することは適当でないが、そのような人々の「慰霊祭を（別所）実施せらる、場合は・・行幸（親拝）を御願ひする」ことも可能と回答している。その結果、昭和20年11月20日、昭和天皇の行幸・御親拝を仰いで臨時大招魂祭が斎行された、ということである。ところが、その後間もない12月15日に、占領軍総司令部は「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」という、いわゆる「神道指令」を通達し、政教分離の名の下に、特に靖國神社を攻撃目標として、精神面からこれをなきものにしようとした。しかし、国民の間には祖国のために身命を捧げた戦没者の慰霊・鎮魂のことがまず第一に心にかかり、昭和21年7月、長野県遺族会の有志80余名が自発的に上京し、靖國神社境内の相

理事長就任のご挨拶

理事長　杉山　蕃

この度、７月１日付けをもちまして、理事長に就任いたしました杉山です。非才の身にとりまして、大変重い役職ではありますが、微力を尽くして任に当たりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

本顕彰会は、終戦後、陸海軍の主要な地位にあった方々の、特別攻撃隊戦没者に対する慰霊顕彰の想い、そしてこれを凝縮した形での観音像の創作に始まり、同像の世田谷山観音寺への奉遷、奉賛活動、竹田恒徳初代会長の下での特攻隊慰霊顕彰会として発足、発展、第二代瀬島龍三会長時代に財団法人として認可（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会）、そして本年初頭、法人制度の改革により、第三代山本卓眞会長の下、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会として再発足した長い歴史を持っております。戦後、反戦・左翼的症候群とも言える逆風が吹き荒れる中、慰霊事業は、遺族・戦友等心ある人々により立派に申し継がれ、この方々の英霊に対する誠意は、見事に結晶し、高く評価されるべきものであります。しかし反面、軍人の方々の、戦争責任を自らのものとして受忍し、言い訳をせず、世情の非難に耐えて国家再生に道を拓いてきた潔さもあり、本来国民的活動であるべき特攻隊戦没者への慰霊活動は、遺族・旧軍関係者という狭い社会に留まって来たのも事実であります。終戦より66年余、最も若い将校であった山本会長も既に85歳、年齢的限界は止むを得ないところと拝察申し上げるところであります。すなわち、旧軍関係者の方々が、逆風の中、立派に果たされてきたこの事業は、後に続く我々の世代が継承し、むしろ国民的広がりを得て、我が国が繁栄すればするほど、英霊の方々が望んでおられた社会に生きる者として、尊い犠牲に想いを致し、感謝の念を噛み締めなければなりません。

私事になりますが、戦争末期に小学校一年生でありました私は、低空を舐めるように西航する20機、30機の戦闘機編隊の勇姿を覚えております。そして大人達の「まだまだ（戦闘機が）あるなあー」と感嘆する声、「みんな特攻で、突っ込みに行くんだ」と密かに語り合う声、既に特攻隊の何たるかを、子供ながらに知っていた私は、手を握り締め、「僕も大きくなって必ず続くぞ」と呟いた戦時下の少年らしい思い出を持っております。以来馬齢を重ねて参りましたが、事に付け、若くして散華された英霊の心情に思いを致し、自戒奮励の糧として参りました。

社稷軟弱にして、政治家不信の漂う容易ならぬ事態のこの頃、若い命を国の将来に託して散った方々の偉大な価値を今一度思い起こして、ともすれば怠惰・利益・享楽に堕しがちな人の弱さを叱る「天の声」としなければなりません。かく言う意味からも我々が継承すべき活動は、これからの我が国にとって極めて重要な事と信ずるものであります。皆様方のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

平成23年7月1日
公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

撲場で、民謡と盆踊りの奉納大会が賑やかに催された。これに啓示されて、翌22年7月からは、神社の正式行事として斎行されるようになった、とのことである。そして、その発案に関し、民族学者の柳田國男翁（当時古稀）の関与が挙げられている。

柳田翁は、東京大空襲の直後から、日本の敗戦を見越して書き上げたとされるその著『先祖の話』の中で、日本人の「生死を超越した殉国の至情には・・これを年久しく培ひ育て、来た社会性、わけても常民の常識と名づくべきものが、隠れて大きな働きをしている」と指摘し、「国の為に戦って死んだ若人だけは、何としてもこれを仏徒の謂ふ、無縁ぼとけの列に疎外して置くわけには行くまいと思ふ。・・喜んで（英霊を）守らうとする（国民の）義務は、記念（憶）を永く保つこと、さうしてその志を継ぐこと、及び後々の祭を懇ろにすること」だと提唱している。柳田翁は、兵庫県神崎の松岡家に生まれたが、長野県飯田の柳田家へ養子に入り、東京を中心に活躍していた。とりわけ長野の民族行事にも通暁し、民俗学を通じて県民に与えた影響力は強かったと思われる。翁が長野県遺族会の誰かに戦没者の慰霊のための盆踊りを靖國神社に奉納するように勧

山本卓眞名誉会長献燈

左　島津肇子様・右　北白川祥子様各献燈（懸け雪洞）

めたか、少なくとも相談を受けていた可能性がかなり高い、と所教授は指摘しておられる。「みたま祭」は「我が国古来の習俗」でもあるのである。

更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった。

○献燈（懸け雪洞）

・元皇族・皇太后女官長北白川祥子様

せゝらぎに　心あらひつ　御供せし
　緑はふかき那須の高原

・元皇族・崇敬者総代　島津　肇子様

　靖國神社の歌　鎮魂頌より

あはれ　そこよしや　あはれ　はれ
　さやけさや　神生れたまえり

江戸芸かっぽれ

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早くからの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の延長戦上にあるものと言えよう。

右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む）に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下に合わせて「全国民が一斉に黙祷するよう勧奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われている。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬（ひもろぎ）の一種（榊や御柱の類）にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式が」が、これからも共に永く続けられるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

○鎮霊社例祭（諸霊祭）

靖國神社の拝殿から本殿へ向かう左側の回廊の中程に出入り口の扉があってその外側の旧招魂斎庭に二つの小社がある。向かって右の小社を「元宮」といい、左の小社は「鎮霊社」という。この二社とも大樹の下にひっそりと建っており、よく似た造りの小社であるが、「元宮」は瓦葺きで、「鎮霊社」は銅板葺きである。この旧招魂斎庭に入るには、通常、拝殿の左、回廊に連なる玉垣の奥の門からであるが、門扉

向かって右・元宮

向かって左・鎮霊社

が開けられているのは午前9時から午後4時までである。

「元宮」は文久2（1862）年、津和野藩士出身で、平田篤胤派の国学者として尊攘志士と共に王政復古に活躍した福羽美静（ふくばびせい）（1831年～1907年、維新後、藩主亀井茲監が神祇官副知事に就任すると、福羽も神祇関係の要職を歴任、1869年明治天皇の侍講となる）が中心となり、初めて徳川齊昭卿ら維新の志士46人の霊を慰めるため、京都の邸内に密かに祠堂を建てて祀った。奠都に伴い東京に移されたが、招魂社の先駆けとも言うべき由緒ある祠堂で、昭和6年、福羽家より神社に奉納され、「元宮」と称して今日に至っているが、例祭日は4月1日である。

一方、左の小社「鎮霊社」は、「明治維新以来の戦争・事変に起因して死没し、靖国神社に合祀されぬ人々の霊を慰める為、昭和四十年七月に建立し萬邦諸国の戦没者も共に鎮齋」されており、例祭日は7月13日である。この「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭和21年1月から昭和53年3月死去までの32年間）筑波藤麿氏が、前年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を訪問して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死没者を始め、前記のように明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみならず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するため、建立されたのが、この「鎮霊社」であり、靖國神社では「元宮」と共に毎日、神官による祭祀が行われており、その例祭が、趣旨を同じくする「みたままつり」の前夜祭の後の宵祭りとして毎年7月13日の午後8時過ぎに行われている。

それより先、靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することになった、とのことであり、「鎮霊社」建立以後は、前記のように同社例祭として齋行されている。

筆者は、本年初めて「鎮霊社例祭」に参列する機会を与えられた。それは、陸士59期の先輩宇井豊氏（医者として宇井クリニックを開業しておられ、日本会議の北川崎支部長でもあられる）が主宰しておられる「英霊の志を継承する会」の一員としてである。

大樹の下、昼なお暗い霊域には、二張りの小さな白天幕が社前に張られ、御社には二つの燈明が幽かに揺らいでいるのみで、辺りは暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の気に満ちている。参列者は京極高晴宮司以下遺族代表と宇井先生他招待者の計12名のみである。やがて前記の回廊の扉が開き、白装束の神官6名が社前に着座し、篳篥（ひちりき）の音と共に神儀は始まった。修祓の儀、降神の儀、献饌の儀、祝詞奏上の儀、宮司以下各代表の玉串奉奠に合わせてそれぞれ拝礼、次いで撤饌の儀、昇神の儀、再び篳篥の音をもって神事は無事終了して神官退下となったが、誠に幽玄の境地に、神霊と共に過ごした一時であった。

（飯田正能記）

殉國沖縄學徒顯彰六拾六年祭

平成23年6月23日（木）16時から、靖國神社において「殉國沖縄學徒顯彰六拾六年祭」が厳粛に斎行された。

本顯彰祭は長年、元国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖縄學徒顯彰會」の主催によって斎行されてきたが、その会務を取り仕切って来られた金城先生御夫妻が共に体調を崩され、事務を継続することができなくなったため、その斎行が危ぶまれていたが、先生の御意志を受け継ぐ若い学生達の熱意と努力によって、昨年ようやく斎行に漕ぎ着けることができ、今年はまた、全日本学生文化会議の支援を得て、学生実行委員会（委員長國學院大学四年上野竜太朗君）が主催して斎行することとなった。

6月23日は、沖縄「慰霊の日」である。沖縄戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁（まぶに）の丘の平和祈念公園内にある国立沖縄戦没者墓苑では、沖縄県の主催による「沖縄全戦没者追悼式」が、菅直人首相、仲井真弘多（なかいまひろかず）知事のほか、衆参両議院議長、遺族ら約5000人が参列して盛大に執り行われた。

仲井真知事は、平和宣言の中で「沖縄県民は依然として過重な基地負担を強いられており、基地から派生する事件や事故、騒音に悩まされています。‥基地負担の大幅な軽減と、危険な普天間飛行場を一日も早く県外に移設すること、そして日米地位協定を抜本的に見直すこと、このことを日米両政府に強く訴えてまいります」と述べ、菅首相もまた、追悼式の挨拶で、沖縄の「‥米軍基地の負担軽減に努力します」とか、沖縄振興の基盤となる沖縄振興特別措置法の新たな制定に関し、県の要望に応え、「地元の声に耳を傾けながら、これを実現していきます」などと強調し、県民の歓心を買う発言をしたが、日米両政府（日米安全保障協議委員会・2プラス2）は僅か2日前の6月21日に、米軍普天間飛行場の移設に関し、県内辺野古へのV字形滑走路建設の具体的工法などについて正式合意したばかりであり、また、2014年（平成26年）までの移設完了目標は正式に断念したところである。菅首相の言葉に、沖縄県民の不信感は一層強まったに違いない。しかも、両者とも尖閣諸島を巡る中国の不法な領海侵犯、謂れなき領有権の主張等々に対し一言も触れることなく、国防上沖縄の占める重要性、日米安保の緊要性に言及することもなかった。更には国防や災害救助の第一線で日夜懸命に努力している自衛隊員や海上保安官等に対する感謝の言葉もなかった。

平和祈念公園内の「平和の礎（いしじ）」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに205柱が追加されて総数24万1132柱となった。この数は、沖縄本島とその周辺における陸海軍の戦死者及び沖縄作戦中の特攻戦死者、沖縄県の職員や一般住民の戦没者のほか、南洋群島等で戦没した沖縄県出身者も含めた全戦没者数ということであるが、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例が殆どである。

今日、沖縄戦は、多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあって、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

更にまた、今年は、沖縄の祖国復帰（昭和47年5月15日）から39年目に当たり、去る5月15日、「沖縄県祖国復帰三十九周年記念大会『今明かされる祖国復帰の真実』」（主催・同実行委員会）が沖縄・嘉手納町の「かでな文化センター」で開催され、県民等850名が参加し、後掲の「大会決議文」が参加者の総意で採択された。

驚くべきことに、沖縄県民にとっての悲願でもあった祖国日本への復帰を祝うべき5月15日が、その復帰直前から沖縄に大挙押し寄せた左翼の宣伝活動により、これまで長い間、米軍基地を押し付けられた「屈辱の日」として位置付けられ、反米、反自衛隊、反基地闘争の象徴的記念日となって39年、今年初めて本来の姿である、沖縄の祖国復帰を祝う県民大会を開催することができたとのことである。

戦後66年を経た今日なお現地沖縄の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各従軍学徒の碑でも行われているが、中央における沖縄戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顯彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することもない。

沖縄戦は、正に軍官民一体の総力戦

であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となって軍事訓練につき、20年3月には沖縄師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1880余名が「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして「学徒斬込隊」が志願編成され、50余名が一体となって敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。

女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高等女学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳高等女学校の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約540余名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴ったが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあった第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあった。その他戦死した女学生の数は動員数の45%240数名に及び、男子部の44%830余名と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖縄殉国学徒の慰霊顕彰祭を斎行して今年第55回目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に昨年、今年と、冒頭に述べた事情もあり、参列者が減少した。それでも今年は約60名の参列者があり、そのうち、約半数の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、齋主祝詞奏上、御遺文奉読、御遺詠奉誦と進み、祭文奏上となったが、この度は、國學院大学文学部二年生相馬雄輔（そうまゆうすけ）君が祭文を奏上し「・・・一億同胞の身代わりとなられましたこの方々の必死の戦いは沖縄だけではなく、今日の日本をも守られておられることを思わずにはおれません。この沖縄の壮絶な戦いの本当の姿と戦いの意義を語り継ぎ、その御霊には、祖国防衛の御英霊として、永久に感謝の誠を捧げねばならないものと存じます。

翻って現在、沖縄に再び侵略の魔の手が迫っております。昨年の9月7日には我が国の領土である尖閣諸島において、中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突する事件が発生しました。その後、中国政府は尖閣諸島の領有権を声高に主張し、あたかも日中間で領土問題を抱えているかのように国際社会に喧伝し、現実に国土が侵されてしまう危機が今もなお続いている現状であります。我々学生はこの現状に鑑み、学生として尖閣諸島ないしは沖縄を護り抜く機運を大学内で高めるために、全国で「尖閣を守ろう!学生ホーラム」を東京・愛知・福岡・沖縄の各大学で開催したのであります。特に沖縄では30数名の学生が集まり、現地の学生と活発に意見を交わし合いました。フォーラムを終えて我々は、本土と沖縄の絆をより一層深め、尖閣諸島、沖縄を護り抜く覚悟をより強くしたのであります。

現在の日本は、尊い犠牲の上で成り立っています。そのように思うからこそ、御英霊が自らの身を挺して護られた我が国の領土を他国に明け渡すことは絶対にあってはなりません。御英霊の敢闘の精神を現代に蘇らせ、沖縄を他国に侵されぬよう奔走してまいりますことをここにお誓い申し上げます。・・・」と力強く決意を述べた。

次いで、参列者から奉呈された献歌奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうちに、参列者全員、御本殿に昇殿し、玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。

御遺詠

○小渡壮一命　球（たま）九七〇〇部隊勤皇隊本部首里にて戦死　当時十六歳

身はたとひこの沖縄に果てるとも
七度生まれて敵亡ぼさん

○安谷屋盛治命（あだにやもりはる）　球（たま）九七〇〇部隊野戦重砲隊真壁にて戦死　当時十六歳

大君の御旗の下に死してこそ
　人と生まれしかひはありけり
君のため何かをしまむ若桜
　散って甲斐ある命なりせば

終わって、参集殿控えの間で、元拓殖大学総長の小田村四郎先生及び学生実行委員会委員長の上野竜太朗君からそれぞれ御挨拶があり、今後の活動と来年度の再会を約して解散した。

（飯田正能記）

○沖縄県祖国復帰三十九周年記念大会

大会決議文

本日沖縄県は祖国復帰より三十九周年を迎えました。祖国復帰を果たす為に当時日米交渉を進められた政府並びに民間有志の方々の並々ならぬご尽力に対して改めて感謝申し上げる次第です。そして、そうした交渉活動と連携して沖縄の民間有志が立ち上がり、県下の各種の業界、各種の団体による献身的な活動が続けられ、「沖縄返還協定批准貫徹県民大会」が実施されたことにより、政府の決断に決定的な影響を与えた事は特筆すべき事です。しかるに、残念ながらこの慶祝すべき記念日がイデオロギーに偏向した人達によって米軍基地を押し付けられた「屈辱の日」として歪められ、反基地運動に利用される日になっている事は慚愧に耐えません。

一方、昨年九月の尖閣諸島沖での中国漁船衝突事件は、中国が尖閣諸島を奪い取るために意図的に仕組まれた事件であったことが推認されています。近年、東シナ海、沖縄近海において、中国海軍、海洋調査船、漁業監視船、漁船団によるあからさまな領海侵犯が増え続けています。そうした中で宮古・八重山の漁民の方々は豊かな漁場を奪われ大変厳しい状況に追い込まれています。更に、最近の中国の国内で行われている反日デモには「琉球回収・沖縄解放」の横幕が掲げられ、「琉球人民は日本からの独立を望んでいる」と大きなデマを流し、尖閣諸島だけではなく沖縄全体を支配下に置くことを狙っています。

祖国と郷土を愛する私共県民は、五月十五日の復帰記念日に「誇り」を持ち、祝賀するとともに、尖閣諸島の主権と郷土沖縄を中国の侵略行為から守り抜く決意を表明する日にしたいと思います。

図らずも来年は復帰四十周年という記念すべき年に、天皇・皇后両陛下の行幸啓を賜り、豊かな海づくり大会が糸満市で開催されることが決まりました。祖国復帰四十周年を前に、私共は今一度、祖国復帰の歴史を繙き、その歴史的意義を再認識し、県民挙げて心より祖国復帰記念日を奉祝致したく思います。

私共は、本日より決意を新たに、今日抱えている様々な沖縄の課題を県民が一体となって克服し、復帰四十周年より新時代へ向けて「誇りある日本」「誇りある郷土沖縄」を築いて参りたいと存じます。多くの心ある県民並びに全国の皆様方のご支援ご協力に心より感謝申し上げ、以下三点について決議致します。

一、五月十五日は、沖縄県が祖国日本に復帰した日として深くその意義をかみ締め行政と県民が一体となって奉祝の啓発活動を実施するよう働き掛ける

一、来年開催予定の祖国復帰四十周年記念大会を祖国一体の沖縄に誇りをもって参加できる県民総参加の行事として実施されるよう行政と県民が一丸となって推進する

一、来年秋、豊かな海づくり大会のご臨席でご来県頂く、天皇・皇后両陛下の奉迎事業を行政と県民が一体となって推進する

平成二十三年五月十五日

沖縄県祖国復帰三十九周年記念大会

編注

①**「沖縄県民斯ク戦ヘリ」**これはかの沖縄戦の末期、海軍沖縄根拠地隊司令官であった大田實海軍少将が海軍次官宛に送信した訣別電文の一節である。これによって、沖縄戦では、軍官民が一体となって祖国防衛のため、如何に奮戦努力したかが窺える。

「機密第〇六二〇一六番電六分ノ一、二、三、四、五、六発沖縄根拠地隊司令官
宛海軍次官

左ノ電ヲ次官ニ御通報方取計ヲ得度

沖縄県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ報告セラルベキモ県ニハ既ニ通信力ナク三十二軍司令部又通信ノ余力ナシト認メラルルニ付本職県知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ忍ビズ之ニ代ツテ緊急御通知申上グ

沖縄島ニ敵攻略ヲ開始以来陸海軍方面戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆ド顧ミルニ暇ナカリキ

然レドモ本職ノ知レル範囲ニ於テハ県民ハ青壮年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ残ル老若婦女子ノミガ相次グ砲爆撃ニ家屋ト家財ノ全部ヲ焼却セラレ僅ニ身ヲ以テ軍ノ作戦ニ差支ナキ場合ノ小防空壕ニ避難尚砲爆撃ノ下□□風雨ニ曝サレツツモ乏シキ生活ニ甘ジアリタリ

（中　略）

看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ衛生兵既ニ出発シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ□□真面目ニシテ一時ノ感情ニ駆ラレタルモノトハ思ワレズ　更ニ軍ニ於テ

作戦ノ大転換アルヤ夜ノ中ニ遥ニ遠隔地方ノ住居地区ヲ指定セラレ輸送力皆無ノ者黙々トシテ雨中ヲ移動スルアリ

（中　略）

糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ　**沖縄県民斯ク戦ヘリ　県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ**　」

大田海軍少将（戦死後中将）は海軍兵学校から選ばれて陸軍歩兵学校へ派遣された。海軍陸戦隊の第一人者で、昭和20年1月、沖縄方面根拠地隊司令官に任命された。同年4月から米軍の沖縄本島上陸が開始されるや、牛島第32軍司令官と共に軍民一体となって80余日にわたり日夜陣頭指揮を執り続けた。6月6日夜、沖縄県民の献身的な作戦協力について海軍次官宛に電文を発信、末尾は掲示のように「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と結ばれている。大田少将指揮の海軍陸戦部隊は、6月13、14日に敵陣へ突撃を敢行、少将も6月13日に小祿地区の司令部壕内で自決した。

②　第三十二軍司令官牛島満中将（戦死後大将）の訣別電報

「球参電第六二五号（六月十八日一八二〇発電）

大命ヲ奉ジ挙軍醜敵撃滅ノ一念ニ徹シ勇戦敢闘茲ニ三箇月全軍将兵鬼神ノ奮励努力ニ拘ラズ陸海空ヲ圧スル敵ノ物量制シ難ク戦局正ニ最後ノ関頭ニ直面セリ　麾下部隊本島進駐以来現地同胞ノ献身的協力ノ下ニ鋭意作戦準備ニ邁進シ来リ敵ヲ邀フルニ方ッテハ帝国陸海軍航空部隊ト相呼応シ将兵等シク皇土沖縄防衛ノ完璧ヲ期セシモ　満不敏不徳ノ致ストコロ事志違ヒ今ヤ沖縄本島ヲ敵手ニ任セントシ負荷ノ責任ヲ継続スル能ハズ　上　陛下ニ対シ奉リ下国民ニ対シ真ニ申訳ナシ茲ニ残存手兵ヲ率イ最後ノ一戦ヲ展開シ一死ヲ以テ御詫ビ申上グル次第ナルモ唯々重任ヲ果シ得ザリシヲ思ヒ長恨千載ニ尽クルナシ

最後ノ決闘ニ当リ既ニ散華セル麾下数万ノ英霊ト共ニ皇室ノ弥栄ト皇国ノ必勝トヲ衷心ヨリ祈念シツツ全員或ハ護国ノ鬼ト化シテ敵ノ我ガ本土来冦ヲ破摧シ或ハ神風トナリテ天翔ケリ必勝戦ニ馳参ズルノ所存ナリ　戦雲碧々タル洋上尚小官統率下ノ離島各隊アリ何卒宜敷ク御指導賜リ度切ニ御願ヒ申上グ

茲ニ平素ノ御懇情、御指導並ニ絶大ナル作戦協力ニ任ゼラレシ各上司並ニ各兵団ニ対シ深甚ナル謝意ヲ表シ遥ニ微衷ヲ披瀝シ以テ訣別ノ辞トス

矢弾尽キ天地染メテ散ルトテモ
　魂還リ魂還リ皇国護ラン
秋ヲモ待タデ枯レ行ク島ノ青草ハ
　帰ル御国ノ春ヲ念ジツツ　」

沖縄学徒隊の編成

女子学徒（合計　五四三名）

学校名（配属人数）	部隊名	配属部隊
沖縄師範学校女子部（一二〇）	ひめゆり学徒隊	沖縄陸軍病院
県立第一高等女学校（二〇〇）	ひめゆり学徒隊	沖縄陸軍病院
県立第二高等女学校（　六五）	白梅学徒隊	第24師団第一野戦病院
県立第三高等女学校（　一〇）	名護蘭学徒隊	沖縄陸軍病院（分院）
県立首里高等女学校（　八三）	瑞泉学徒隊	第62師団野戦病院
私立積徳高等女学校（　二五）	積徳学徒隊	第24師団第二野戦病院
私立昭和高等女学校（　四〇）	梯梧学徒隊	第62師団野戦病院

男子学徒（合計　一八八五名）

学校名（配属人数）	配属部隊
沖縄師範学校（三八五）	第32軍司令部（勤皇隊本部）
	同（千早隊）
	同（斬込隊）
	同（特殊中隊）
	第二野戦築城隊
県立第一中学校（三九八）	第五砲兵司令部（勤皇隊本部）
	同（司令部勤務）
	独立測地第一中隊
	野戦重砲兵第一聯隊
	独立重砲兵第百大隊
	独立工兵第66大隊
	電信第36聯隊
県立第二中学校（一四〇）	独立混成第44旅団第二歩兵隊
	第62師団通信隊

学校名（配属人数）	配属部隊
県立第三中学校（三六三）	独立混成第44旅団第二歩兵隊
	同（通信隊）
	第三遊撃隊
那覇市立商業学校（　八二）	独立混成第44旅団通信班
	独立歩兵第22大隊
県立水産学校（　四九）	通信第36聯隊
	第四遊撃隊
県立農林学校（一七〇）	第44飛行場大隊
県立工業学校（　七八）	第五砲兵司令部（通信）
	沖縄憲兵隊
県立八重山中学校（　一二〇）	独立混成第45旅団司令部

（注）以上のほかに私立開南中学校の生徒が個々に戦闘に参加している。

沖縄慰霊の日の現地の新聞を見て

田中　賢一

前の大戦で沖縄の我が軍の組織的戦闘が終焉した6月23日には、摩文仁の平和公園で毎年、沖縄戦全戦没者の追悼式が行われている。私は、本土のテレビでは断片的にしか報じられないので、空挺同志会沖縄支部に頼んで、翌日の現地の新聞を送ってもらった。それを見た所見を述べよう。参加者5千人の前で、主催者の知事は、平和宣言と称して次のとおり述べている。

「沖縄戦の終結から66年目、史上稀に見る熾烈な地上戦により、20万人余りの尊い生命を失ったばかりでなく、貴重な文化遺産や美しい自然をも、沖縄は失ったのです。過酷なあの体験の中から、私達は二度と戦争の悲劇を繰り返さないことと、そしてまた、平和こそ何物にも代え難いものであることを深く学びました。この教訓を土台として、沖縄県民は復興と発展の道を歩んできたのであります。

しかし、その一方で、県民は依然として、過重な基地負担を強いられており、基地から派生する事件や事故、騒音に悩まされています。安全安心な国民生活は、未だに実現しておりません。基地負担の大幅な削減と、危険な普天間飛行場を一日も早く県外に移設すること、そして日米地位協定を抜本的に見直すこと、このことを日米両政府に強く訴えてまいります。」

(この後、東日本大震災について自分等の気持ちを述べているが省略)

摩文仁（まぶに）の丘の戦没者刻銘碑
(平和の礎（いしじ）)

慰霊対象の人数―知事は20万人余りの尊い生命を失ったと言っている。戦火で一般の県民が何人犠牲になったか、私の手元に資料がないので分からないが、学徒隊として従軍した生徒は男女合わせて981名、対馬丸が撃沈されて死んだ学童は577名、地上戦闘で戦死した陸海軍の将兵は約9万名、それ以外は、本土及び台湾から出撃した陸海軍の航空、空挺、海上、海中の特攻隊員となるが、それらを集計して20万という数を出したのか。それならば内訳を知りたいものである。

如何にして平和を求めるか―知事は私達は二度と戦争の悲劇を繰り返さないこと、そしてまた、平和こそ何者にも代え難いものであることを深く学びました、と言っている。当然のことではあるが、何も沖縄が戦争を引き起こしたわけではないし、これからも沖縄は勿論、日本国が戦争を仕掛けることなど考えられない。仮に戦争が起きたとすれば、それは外国から仕掛けられたものである。沖縄本島とそこから南に多くの島を持っている沖縄県として、戦争を仕掛けられる相手は何国なのか、そうはさせない抑止力は何か、表現に工夫を要するが、その辺まで言ってもらいたかった。

駐留米軍について―基地負担の大幅な削減と、危険な普天間飛行場を1日も早く県外に移設することを求めると言っているが、知事は本当にそう思っているのか、沖縄県の一部である尖閣諸島が中国に奪われず現在の状態にあるのは米軍就中海兵隊が沖縄に在るからだということを知事は篤と承知しているはずである。私はそう信じたい。

余談になるが、中国人には国境という観念がない。東夷西戎南蛮北狄と称し、元、清以外の漢民族の王朝の国は、外部の異民族を征服し、占領した範囲が自国領であって、その地域は時代によって異なる。現在南支那海にある西沙、南沙両諸島を中国は力ずくで取ろうとしている。ベトナムやフィリピンより中国の方が軍事力は遥かに大だ。昔からの考えでこれらの島は当然我が領土だと思っている。これに対し米国は中国に自制を求めているが、中国は受け入れない。かつて米国はフィリピンに空軍を駐留させていたが今はない。我が国も他山の石とすべきである。

沖縄の現地の新聞に話を戻そう。死に体の菅首相も参加して慰霊の辞は述べたが、普天間基地の県外移設は大変難しいと答えた。国土防衛という殊勝な考えに基づくものではなく、受入先を探すことが出来ないからだろう。――新聞とは関係ないが、66年前の本日未明、牛島軍司令官と長参謀長は西郷南洲の城山の故事などを語り、死をみること帰するが如く、淡々たる態度で参謀等と別れを告げ、4時30分古武士の作法に従い従容として自決した。

牛島中将の辞世の歌

矢弾尽き天地染めて散るとても
　魂還り魂還り皇国護らん
秋をも待たで枯れゆく島の青草は
　皇国の春に甦らなむ

摩文仁の丘・清掃奉仕活動で受け継がれる慰霊の心

評議員　倉形　桃代

6月23日、どこまでも続く青い空・青い海を見渡す摩文仁の丘で、今年も沖縄全戦没者追悼式が挙行された。「慰霊の日」を翌週に控えた6月17日、私は小雨降る肌寒い東京から真夏の太陽が輝く沖縄へ飛んだ。

翌18日に行われる陸海空自衛隊、自衛隊協力団体の有志が共同で実施している平和祈念公園の清掃奉仕活動を是非取材したいと思ったからである。

毎年追悼式を前に、公園を管理している財団法人沖縄県平和祈念財団が、会場となる広大な敷地内、周辺地域の清掃ボランティアを募っている。自衛隊は、昭和48年から今年まで38年間、毎年清掃奉仕活動に参加している。

当日の朝、ジリジリと照りつける太陽の下、集合場所である式典広場には色とりどりの幟が立ち並び、所属団体ごとに沢山の参加者が集まった。家族連れの方も多かった。前の週に発生した台風で、公園内の木が50本もなぎ倒されたそうだ。枝が折れ、塩害で多くの葉が落ちたと財団の方から伺った。

清掃奉仕活動は、毎年陸上自衛隊那覇駐屯地曹友会（会長・高良幸則准尉）が中心となって行っている。今年も陸海空自衛隊員・家族・協力団体の有志、総勢約一千名が清掃奉仕活動に参加した。担当エリアは、摩文仁の丘の南にある46都道府県や各団体が建立した慰霊碑・慰霊塔が並ぶ霊域である。石碑の陰や草叢の中には、毒蛇ハブが潜んでいることがあるそうで、清掃エリア中央付近には救護所が設けられ、万が一に備え救護員の方が待機されていた。熱中症対策として、数箇所に給水ポイントが設けられ、お互いに水分補給の声掛けをし合っていたのも、自衛隊さんらしい心配りだなぁと感心した。

式典広場で集合写真を撮った後に作業要領の指示があり、箒や熊手を手にした奉仕隊の方々は、三々五々に散開して清掃を行った。集められたゴミは、小型トラックで随時回収していく。箒で落ち葉を集める人、軍手をはめて枝葉を拾う人、各々のやり方で清掃作業は進められていく。子供たちが、お父さんやお母さんと一緒に、小さな手で落ち葉を集めている姿は、とても愛らしかった。

昨年から、高良会長のご発案で石碑の表面も水拭きをしようということになった。用意されたバケツやウエスを使って、黙々と滑らかな石碑を磨いている方がいた。そのお姿は、まるでそこに眠る魂と対話しているように見えた。2時間余りの作業で、墓苑内は綺麗に清められた。

清掃作業が終わった後、11時過ぎから墓苑のほぼ中央にある国立沖縄戦没者墓苑で納骨堂への献花式が行われた。この納骨堂には、約18万余の御遺骨が納められている。現地の方のお話によると、かつての摩文仁の丘は、焼け焦げた蘇鉄の根っこが残り、荒涼とした戦いの痕跡が見られたそうだが、緑の芝生や手入れの行き届いた木立に囲まれた現在の墓苑にその面影は見えない。

陸海空自衛隊、協力団体の代表が、順次花束を献花台にお供えした後、司会の号令で全員黙祷を捧げた。式の最後は、財団法人沖縄平和祈念財団の上原兼治事務局長が、清掃奉仕に対する労いと感謝の気持ちの籠もった挨拶をされ締めくくられた。お話の中に「災害派遣で大変な中、お疲れのところ、沢山の方々が清掃奉仕に参加して下さったことを、心から感謝致します」というお言葉が添えられていたことが印象的だった。清掃奉仕活動は、大きな怪我・事故もなく、無事に終わった。木陰になった地面に座って、皆で一緒に食べたお弁当は、とっても美味しかった。

摩文仁の丘から見渡した景色は、海も空も哀しい程美しい。照りつける真夏の太陽光に輝く瑠璃色の海は、海岸に幾つもの真っ白な波頭を寄せている。66年前に激戦地となり、多くの命が失われた沖縄。国防という任務を受け継いだ自衛隊の方々が、毎年墓苑の清掃奉仕で汗を流し、最後に花をお供えして戦没者に対する慰霊・哀悼の気持ちを捧げる。その姿は、ほとんど公に報じられることはなかったが、彼等は38年もの長きにわたり、粛々と奉仕活動を続けている。

平成17年からは、5月5日のこどもの日に因んで実施される同財団主催の平和祈念こいのぼり掲揚事業「各都道府県の慰霊塔にみんなでこいのぼりをあげよう」の支援にも当たっている。この事業では、各慰霊塔の敷地にあるポールや式典広場に杭を打ってロープを張り、こいのぼりを掲揚する準備のサポートをしている。ロープには、近隣の子供たちが手作りした小さなこいのぼりが飾られ、各慰霊塔には、午前11時の時報に合わせて、大きなこいのぼりが掲揚される。式典当日、4月29日には資料館の無料開放やスタンプ・ラリー等、親子で参加できるイベントも開かれる。かつて大東亜戦争の激戦

地であったという史実を風化させないために、墓苑を訪れる機会を作ろうという趣旨で始められた事業である。

私はこれらの奉仕活動に勤しむ皆様のお姿・先人を大切にする真心に『慰霊・顕彰』のあるべき姿・原点を見た気がした。その心意気をとても「美しい」と思った。

炎天下の中で、心を籠めて作業に当たられた隊員の皆様・ご家族・関係団体の皆様に、心からの敬意を捧げます。そして、この度の取材に、多大なるご支援を下さった高良会長はじめ陸上自衛隊那覇駐屯地曹友会の皆様、最前線で日々任務に邁進されている沖縄の自衛隊員の皆様に、この場を借りて心からの感謝とエールを送ります。

(写真提供／陸自那覇駐屯地曹友会)

＊　＊　＊

『那覇駐屯地曹友会高良会長・談』

摩文仁の丘の清掃活動は、昭和48年6月、隊員が自主的に始めたことがきっかけとなり、現在に至る。移駐当初の自衛隊員は、大変なご苦労をされたと聞くが、不発弾処理・離島からの急患輸送等による地域への貢献で信頼を獲得していった。先の東日本大震災の救援活動においては「あなた達がいて、本当に助かっている。有り難うございます」という言葉を多く掛けられた。

広報活動においても「様々な地域や学校行事に参加しながら地域に溶け込む努力をしてきた先輩方は、防衛基盤の育成に多大な貢献をされた。地元の自治会等で活動している自分も実感している。(曹友会は、会員相互の団結・連帯感を高め、地域社会に積極的に寄与し、陸曹の地位及び役割を向上させ、陸上自衛隊の精強化・魅力化への貢献を目的とする三等陸曹から准尉で構成される任意団体である)

「平和祈念公園」に集合した曹友会の清掃奉仕団

清掃作業に励む曹友会の奉仕団

摩文仁の丘の「国立沖縄戦没者墓苑」納骨堂

清掃作業を手伝う子供達

摩文仁の丘から見渡す海岸の景色

(財)沖縄平和祈念財団 上原兼治事務局長の挨拶

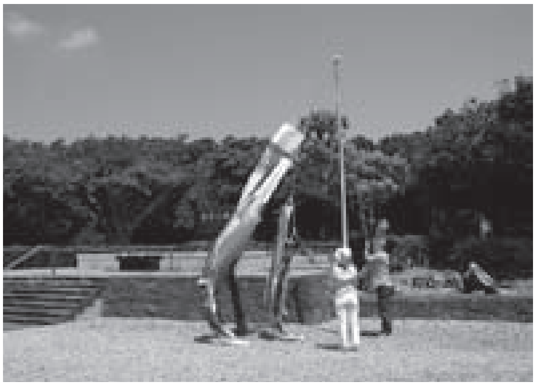
石碑の水拭き作業に励む親子

平和祈念こいのぼり掲揚

小型トラックでゴミの回収作業

掲揚されたこいのぼりの数々

回収されたゴミの山



「東京之塔」にもこいのぼり掲揚

奉仕作業団代表による納骨堂への献花

平成23年度豫科練雄飛会慰霊祭

評議員　小倉　利之

平成23年4月4日（月）、豫科練雄飛会（小林和夫会長）の平成23年度慰霊祭が靖國神社で執り行われました。

靖國神社境内の桜は、1週間前に開花宣言があって、午前中はまだ二分咲き程度であったものが、慰霊式典が終わって御霊に別れを告げる頃には、素晴らしい青空の下、四分咲きほどに咲き競っているように感じました。しかし、東日本大震災のため、花見の宴は自粛されており、境内は例年より淋しい状況でした。

この日は天候に恵まれてか、参列者の出足も順調で、集合時刻の11時30分には、ご遺族、ご来賓、豫科練出身者及び有志約250名が参集殿に集合して、担当者から式典についての説明を受けました。

その参集殿には、書道家松本梅渓氏の揮毫、彫刻家坂本静山氏の作になる「萬世欽仰」（ばんせいきんぎょう・末代に至るまで英霊の遺徳を敬い仰ぐの意）の額が掲げられており、改めて感銘を受けました。

慰霊祭は、拝殿において12時から斎行されましたが、国歌斉唱、修祓、祝詞奏上、祭文奏上（小林会長）、献歌（全員で「海行かば」を斉唱）の後、2班に分かれて本殿に昇殿参拝、「国の鎮め」の奏楽のうちに玉串奉奠、黙祷をもって式典を終わり、一同靖國会館前に集合して記念写真を撮りました。

その後靖國会館で、直会の招魂観桜祭が催行され、御霊と共にひと時を楽しく過ごすことができました。

ご遺族、ご来賓の紹介とご来賓の祝辞があって懇親の宴に移り、全員で軍歌「同期の桜」を斉唱しました。

本会には、豫科練1期生で、豫科練雄飛会相談役の伊藤進氏（96歳）も、ご夫妻で岩国から遠路、出席しておられました。

豫科練丙飛会会長の大原亮治氏（91歳）は、祝辞の中で、撃墜王と言われた戦闘機乗りの話と先輩を敬う素晴らしい精神を語られました。また、海原会名誉会長の前田武氏（90歳）は、豫科練3期生として活躍されたと伺っています。これら3名の方々は皆90歳以上ですが、皆様元気で、また来年もお会いしましょう、と話しておられました。

豫科練の教育法と時代がそうさせたのか、皆様元気で、精神的にも素晴らしいものを沢山持っておられ、戦後派の我々に多くの教訓を示していただけることに感謝せねばなりません。

「遺詠」

神風特別攻撃隊（菊水三号作戦）
第四神剣隊（大村空所属）
（第十八期乙種飛行豫科練習生）
（埼玉県出身　十八歳）
海軍二等飛行兵曹　長谷部寅祐

皇国の
試練に散らむ若桜
いくとせの春の
長き祈りて

（昭和20年4月16日、喜界島南東沖敵艦船群攻撃の艦爆機掩護のため、鹿屋基地を零戦で発進、敵機群と交戦、戦死）

豫科練雄飛会慰霊祭受付

靖國神社社碑と桜

参集殿内掲額「仰欽世萬」

平成23年「枕崎」「鹿屋」慰霊の旅

専務理事　藤田　幸生

4月6日（水）から9日（土）までの3泊4日で、枕崎、鹿屋の慰霊祭に参加してきました。今回の追悼式は、3月11日の東日本大震災で、東北地方は未曾有の地震、津波、更に原発事故の被害があり、国を挙げて、その対策に苦慮している中での追悼式でしたが、例年通り無事執り行われました。

今回の行動に当たっては、鹿児島県内の移動、案内は、鹿児島地方協力本部（本部長福永賢太郎1等海佐）及び海上自衛隊鹿屋航空基地（群指令池太郎海将補）によるご支援をいだきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

殉難鎮魂之碑

羽田から鹿児島までのフライトは、稀に見る好天気に恵まれました。飛び立ってすぐ、真っ白に雪に覆われた富士山が目に入りました。飛行機が西航するにつれ、南アルプス、北アルプスの白い嶺、更には、かすかに日本海まで見えるほどの好天気。伊勢湾、熊野、串本、名古屋、関ケ原、琵琶湖、京都、奈良、大阪と、まるで箱庭のように見渡せました。飛行高度は、いつもより少し高い1万4千メートルくらいで、景色は、過去の思い出を浮かび上がらせながらゆっくりと変わっていきます。紀伊水道を渡り、室戸岬に差し掛かると、もう土佐湾は一望の下、我が故郷の高知は、足摺岬まで見渡せました。豊後水道を渡るとすぐに霧島連峰が広がり、そこは新燃岳の噴火で灰色に変わっていました。2時間余り、窓越しに眺めていると首が痛くなりました。最高のフライトでした。

海自儀仗隊

この日は、枕崎まで進出し、市内のグリーンホテル福住（℡０９９３－７２－０２００）に泊まりました。ここは追悼式の際の定宿で、毎年、戦友や御遺族の皆さんが大勢泊まられます。今年もまた、顔見知りになった皆さんが泊まっていました。明るいうちから湾を眺めながら温泉につかり、夜は、枕崎平和祈念展望台奉賛会の総会、懇親会、「沖縄特攻を語る会」が行われました。それぞれに親しいグループでテーブルを囲み、年に1度の逢瀬を楽しんでおられました。出席自由の「沖縄特攻を語る会」には、遠くから子供と一緒に参加した方などもいて、数少ない生き残りの方から、様々なお話を聴き出していました。その熱心さが印象的でした。

4月7日は、66年前、戦艦「大和」が沈没した時間に合わせるように、14時から、枕崎市火の神公園内の平和祈念展望台において、「海上特攻第二艦隊戦没者追悼式」が、奉賛会（畠野宏之会長）の主催で行われました。今年は、創始者の顧問岩田三千年氏及び最高顧問の池田武邦氏が欠席されたのは残念でした。台上に登る坂道の両側には灯籠が並び、満開の桜とともに参拝者を迎えてくれました。今年も8基の灯籠が新しく奉納されたそうです。御遺族を始めとする奉賛会の皆様の手によって、整備が進んでいる様子が伺えました。

式典は、桜の咲く、暖かくて穏やかな日差しに恵まれ、自衛隊鹿児島地方協力本部、陸自国分音楽隊、海自鹿屋儀仗隊、飛行隊等の協力支援の下に行われました。目前の東シナ海から吹き上げてくる風にはためく軍艦旗の下、陸空呼応した立体感のある追悼式が、斉整と執り行われました。我が顕彰会からも、供花を捧げ、別掲の祭文を奏上しました。また、特に印象深かったのは、高校生と小学校の児童代表が、立派な追悼文を奏上したことです。感動的でした。高校生のそれを、最後に掲げます。

○平成23年枕崎平和祈念展望台「海上特攻第二艦隊戦没者追悼式」

祭　文

今年もまた、四月七日が廻ってまいりました。六十六年前の本日、皆様方は、この目前に広がる海で、我が国の生存と未来の繁栄を期して、帝国海軍聯合艦隊最後の戦いを戦われました。本日ここに、全国から関係者一同が集い、散華された皆様に心からの哀悼と感謝の誠を捧げます。

我が国は今、去る三月十一日に発生した東日本大震災という未曾有の災害に見舞われております。東北地方太平洋岸を中心に、地震と津波のため二万数千人の命が奪われ、国民の多くの財産が失われました。更に福島第一原子力発電所の事故という人類にとって重大な災害も発生しております。これら「平成の国難」とも言える事態に、世界各国注視の下、多くの国々からの救援も得、国民が一丸となってその解決と復興に取り組んでいるところであります。

皆様方は、大東亜戦争末期、極限の危機状況の中、愛する人と国のため、一命を賭して戦いに臨まれました。このことに思いを致すとき、私達は今、正に身をもって、皆様から多くのことを教わることができるように思われます。戦後私達は、疲弊した国の焼土の中から立ち上がり、民族の勤勉さと不屈不撓の精神をもって、世界史上前例のない程の目覚ましい復興を成し遂げてまいりました。しかしながらまた、その発展の中で、多くのものを失ってきたようにも思います。この豊かな風土に生きてきた私共の祖先が作り上げてきた、穏やかで他人への思い遣りに満ちた、和の精神が、戦後復興の中で見失われ、代わりに、物やお金に偏重し、公よりも自分、義務よりも権利を主張するような考え方に陥ってしまったのです。

しかしながら、今回の大震災によって起こった様々な事態に対する人々の行動から、その心の中には、まだまだ本来の「日本人の心」が、脈々と生きて伝わっていることが伺えました。これは理屈ではなく、実際の行動によって示されたことであり、このことは、世界の人々も感じているところでもあるようです。

目を転ずれば、皆様が眠るこの東シナ海においても、中国海軍の増強とその活動の活発化、韓国、北朝鮮、ロシアの動向も含め、我が国にとって不安定な事態が強まってきております。

私達は、我が国内外の国難とも言える現状に恐れることなく、自信を持って、全国民が一丸となって困難に取り組み、国の再度の復興を果たしていかなければなりません。生存と繁栄の努力と、この慰霊顕彰活動の継承をお誓いするものであります。

在天の御霊、どうか私達に復興への力をお貸し下さい。そして、この目前に広がる海の平穏をお守り下さい。

これからも、なお一層の御加護を賜りますよう心からお願い申し上げて、祭文奏上を終わります。

平成二十三年四月七日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
専務理事　藤田　幸生

○追悼文「今、思うこと」

私は小学生の時、「戦争」について習いました。「戦争」とは武力を行使して戦うことで、「戦争からは、悲しみ、憎しみ、犠牲といったことしか生まれません。」と先生は言いました。その当時は、あまり理解できなくて、ただ言葉を覚えていただけでした。

やがて中学、高校と進むにつれ、ニュースなどで「戦争」の恐ろしさや被害を知るようになりました。

そんな時、「亡国のイメージ」という小説を図書室で見つけました。あらすじは荒唐無稽なフィクションで、それなりに楽しんで読みました。その小説の中で、一人の若者が記した論文があります。小説のタイトルにもなったその論文が、私の心に残りましたので、その一部を紹介します。

『真の国力とは、国家資産や経済力、軍事力などではなく、その国が培ってきた普遍的な価値観、歴史、文化であるにもかかわらず、我々日本人は、「日本とは何か」「日本人として何を誇るのか」という自らの問いかけすら忘れ、唯一のイデオロギーであった「恥」という概念も捨て去り、世界に向けて主張できる価値観など、とうになくなってしまった。そして、それが国としての存在に関わる、根源的な問題であることに気付こうとすらしない。今、この国はすでに国家としての有様を完全に失ってしまっている。日本はもはや、「亡国」と化してしまったのだろうか・・・（中略）』

この文章を読んで、私はかつて、この日本という国が参加した「戦争」について考えました。そして、その頃の日本人は誇るべき価値観、歴史、文化を持っていて、それらを守るために戦ったのではないかと思いました。

第二艦隊に乗り組んでいた若者も、死にたくて死んでいった人はいないはずです。日本の未来のために命をかけた方々です。その人達は、今の日本を見てどう思うのでしょうか。その人達が命をかけて守りたかった国の形、国家の有り様が、はたしてあるでしょうか。

先月発生した、東日本大震災では、自衛隊員をはじめとした、命がけの救難活動が繰り広げられました。この国民のために命をかけるという、一種の価値観こそ、誇るべき日本人の心ではないかと思います。

「戦争」は決してよいことではありません。しかし、大切なものを守るためには、時には「盾」となる覚悟も必要なのではないかと思います。私達は、

国のために戦った方々に誇れる国、守るべき価値観のある国を築き上げていきたいのです。

平成二十三年四月七日

鹿児島県立鹿児島水産高校三年生

生徒代表　平瀬　幸彦(たつひこ)

この7日の夜は、鹿児島市の「サンロイヤルホテル」に泊まりました。この7日には、徳之島の伊仙町犬田布岬の慰霊塔前でも、同時刻に、戦艦大和を旗艦とする第二艦隊の追悼式が行われています。この慰霊塔修復事業に関わった人たちと、来年のことを語り合いつつこの夜を過ごしました。

翌8日は終日雨で、桜島も頭を雲に隠していました。鹿児島地方協力本部の方に案内されて、鹿児島県護国神社の野村浩平宮司をお訪ねし、同神社に参拝しました。ここには我が顕彰会から「あゝ特攻勇士之像」が奉納されております。ご挨拶懇談の中で、そのお礼も申し上げました。特攻勇士之像は、

特攻隊戦没者慰霊塔前式場

雨に煙る桜の花に囲まれて、静かに佇んでいました。お参りした後、暫くの間、像の前で瞑目しました。

参拝後の昼食には、奄美名物の「ケイハン」を頂き、鹿屋に送っていただきました。鹿児島港から垂水まで1時間足らずのフェリーの航海で大隅半島に上陸し、陸路鹿屋航空基地に到着、池　太郎第一航空群指令他の幹部を表敬訪問しました。旧海軍特攻基地を、そのまま今も海上自衛隊が使っています。公室には、平山郁夫画伯から寄贈された「夕映え櫻島」の絵が飾られています。その部屋で、地域における基地の現状や東日本大震災への災害派遣活動などについて説明を受けました。

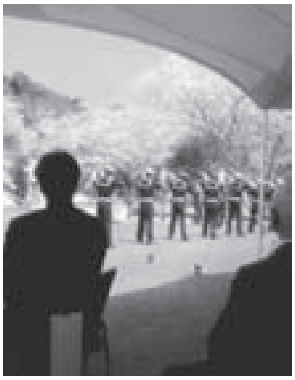
また、211教育航空隊では、新ヘリコプター搭乗員教育態勢に備えて、新しいヘリコプターTH135の実機、そのシミュレーターが導入されていました。丁寧なご案内を受け、よく理解できましたが、その技術進歩の大

P3C ３機編隊

きさに時の流れを感じました。特に、シミュレーターが、従来の六軸モーションで高価なものから、画像システムの進歩により、安価で効果的なものに変わっているのに驚きました。

資料館は、翌日案内されましたが、展示内容が、以前よりも更に充実進化されてきておりました。歴代の群司令の努力に感激しました。半日ぐらい時間を掛けて見学したいものです。

8日の夜は、鹿屋「さつき苑」泊。基地の各級指揮官の皆さんと、地元の素朴な料理店「しま」で会食をしました。地元で獲れた新鮮な魚介を、店主が心を込めて料理してくれました。楽しく充実した会話と共に、美味しく頂きました。地元の自衛隊協力者が釣ったという大きな鯛の馳走は、刺身や汁など圧巻でした。鹿屋ならではの酒の逸品と共に、後輩達のご配慮に感謝感激でした。



海自儀仗隊弔銃

鹿屋での追悼式は、翌9日(土)10時30分から、鹿屋市今坂町小塚丘公園内の「特攻隊戦没者慰霊塔」前広場において、鹿屋市主催により執り行われました。心配していた雨も上がり、晴天春風桜吹雪の中で、追悼式は、例年どおり斉整と執り行われました。

慰霊飛行は、P3C輸送機は3機編隊飛行でしたが、ヘリコプターは、東日本大震災の災害派遣により出動中のため、単機飛行でした。

13名の特攻隊員生存者による「同期の桜」の斉唱は、例年どおり行われ、そのお元気な姿に圧倒されましたが、人数が少し少なくなりました。これも大震災の影響かと思われました。

式典が終わる頃には少し風が出てきました。気候の変化で、この日まで咲き残っていた桜の花びらが風に舞い散り、文字どおりの花吹雪となって名残を惜しんでいるかのようでした。

追悼式終了後、会場のテントで、高知出身の御遺族、土田様と町田様とに初めて言葉を交わすことができました。

今回の鹿児島県慰霊訪問の旅は、東日本大震災の直後でありましたが、地元の皆様のお心と若い人達の気持ちに接する機会があり、嬉しい旅になりました。現地自衛隊のご支援の下、天候と桜の花に恵まれて、印象深く、英霊の皆様を身近に感じられる旅になりました。

平成23年度 第52回出水市特攻碑慰霊祭

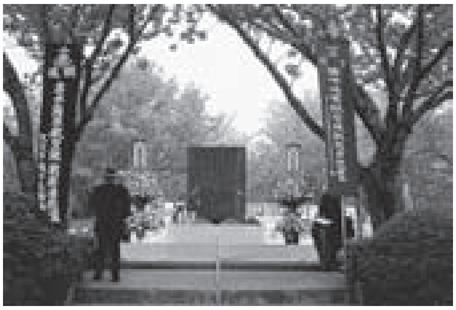
評議員　小倉　利之

平成23年4月16日（土）、第52回出水市特攻碑慰霊祭が、同碑顕彰会（会長渋谷俊彦出水市長）主催により、厳粛盛大に斎行されました。

八重桜が満開の出水市特攻碑公園の碑前において、全国各地から参集したご遺族及び元隊員の方々を始め、陸海空各自衛隊、地元各界有志等多数参列の下に、素晴らしい慰霊式典が執り行われました。

特攻碑公園は、出水海軍航空隊飛行場跡にありますが、同飛行場は、昭和13年頃から建設が始まり、昭和15年に完成して、飛行機が発着するようになりました。昭和16年4月1日には佐世保海軍航空隊出水分遣隊が置かれ、昭和18年4月1日に出水海軍航空隊として開隊されました。当初は、訓練航空隊でしたが、昭和19年から実戦部隊の基地となり、２６０名を超える多くの特攻隊員が南方の空に散ることとなりました。また、この基地を含めて周辺もアメリカ軍による激しい空襲を受けて、航空隊員や民間人に多くの死傷者が出ました。

この公園は、昭和43年に一部開設され、若き英霊を弔うために昭和35年建立された特攻碑が、基地跡と共に昭和54年に特攻碑保存会（当時）から市に寄付されて、現在の姿となっているとのことです。



「雲こそわが墓標之碑」前の祭壇

碑を取り巻く遺影の列

陸上自衛隊国分音楽隊

慰霊祭は、まず海上自衛隊鹿屋航空基地から飛来したＰ３－Ｃ機による上空3周回の慰霊飛行によって開始されました。

国旗及び軍艦旗掲揚が、陸上自衛隊国分駐屯地の儀仗隊と音楽隊、及び市消防団幹部により行われました。次いで竹添二雄顕彰会副会長は、開式の言葉の中で「3月11日に発生した東日本大震災が、正に国難とも言うべき事態に至り、多くの人命・財産を失い、被災者の悲惨な現状を思うとき、祭典実施の可否につき、憂慮すべき事態となりましたが、中止か縮小かの検討を進めるうちに、今こそ、先の大戦において、国家存亡の危機に際し、自らの身命を賭して戦い、散華された特攻勇士達の心情を思い、その顕彰と慰霊を行うことは、この非常事態に際してこそ大事であり、かつ、我々の責務である、国民が一体となって復興に取り組むための、一つの警鐘としても実施すべきであるとの結論に達しました」と述べられました。

次いで、戦没特攻勇士の御霊に対する黙祷の際に、元隊員により特攻突入時の無線送信の実況が流され、多くの参列者の涙を誘いました。

次いで、特攻碑顕彰会会長以下各代表者による献花が行われ、同会会長・出水市長渋谷俊彦氏、遺族代表日野原昌氏、元隊員代表猪飼国昭氏がそれぞれ「慰霊のことば」を捧げられたが、いずれも強く心を打つものがありました。「4月16日は、第七銀河隊が出水基地から特攻出撃した日であり、国家の運命を担って、南海の果てに散華された若き勇士達の尊い犠牲の上に築かれたものである。我々は御霊の御冥福をお祈りするとともに、これを顕彰し、再び戦争の惨禍を繰り返さないことを誓うものである」との趣旨を交々述べられた。

次いで、儀仗隊捧銃、千羽鶴奉納、参列者総員の献花、自衛隊音楽隊による記念演奏、参列者総員による「同期の桜」の斉唱、国旗・軍艦旗降下、閉式のことばがあって、慰霊祭は滞りなく終了した。

鹿児島には、特攻基地が多くあり、特に、知覧や鹿屋は有名で、慰霊祭や観光旅行で多くの人々が訪れるが、ここ出水基地でも素晴らしい慰霊祭が立派に実施されていることを皆様にお伝えいたしたく、筆を執った次第です。

「よろずよに！」第40回萬世特攻慰霊祭に参列して

専務理事　藤田　幸生

今年の萬世特攻慰霊祭は、回を重ねて第40回目である。４月24日（日）11時から、鹿児島県南さつま市（旧加世田市）の「万世特攻平和祈念館」前にある萬世特攻慰霊碑「よろず世に！」の前において、同慰霊碑奉賛会（会長川野信男氏）主催により、厳粛、盛大に執り行われた。

私にとって、この慰霊祭に参列するのは初めてであるが、かねてよりこの地を訪ねたいと念願していた。それはこの地が、私の若い頃、副官としてお仕えした鮫島統幕議長のご出身地でもあったからである。現在この地に基地はない。ただ、特攻慰霊碑と特攻平和祈念館があるだけである。

この日、鹿児島市から万世まで、福永鹿児島地方協力本部長（以下「地本長」と略す）の車に便乗させていただいた。加世田の町は、落ち着いた雰囲気の町並みであった。特攻平和祈念館の受付には、既に沢山の関係者が集まっていた。ご遺族や戦友らしいお年寄りから、そのお孫さんと思われる子供達や、陸、海、空現役自衛官の姿も見受けられた。地本の関係者のほか、海上自衛隊鹿屋基地から来訪した池太郎第一航空群司令の姿もあった。慰霊飛行も含めて、陸、海、空各自衛隊の参加は、東日本大震災の災害派遣で多忙な中のことでもあり、頭の下がる思いであった。参列の人々は、慰霊碑前に設けられた大テント内の椅子席に着席されたり、近くの特攻平和祈念館を見学したり、久し振りの再会を喜び合い、頬を紅潮させて話が弾んでいるグループもあり、早めの昼食のお接待を受ける人々などなど。地元の皆さんによるお握りやうどん、そばのお接待は、知覧の特攻慰霊祭と同じく、九州の慰霊祭らしい素朴で情の込もった、おもてなしであった。

ここで意外な人に会った。東京で十余年にわたり特攻演劇「流れる雲よ」（飛行機雲）を主宰している株式会社サンディの奈美木映里社長と俳優の東武志君である。取材活動のため来訪したとのことであった。我が特攻顕彰会も特別協力している演劇グループであり、今年の夏も演劇に加えて映画も上映する予定であり、更には今年12月に開催予定の「ドバイ国際映画祭」にも出品して、祖国の未来を信じ、祖国と愛する人々のために命を賭けた特攻隊員の方々のことを世界に訴えていくという、志のあるグループである。

万世は初めてなので、福永地本長と共に、特攻慰霊碑周辺などを案内していただいた。慰霊碑には、特攻隊員像と「よろずよに」と刻まれており、沢山の献花が供えられていた。そのそばの石碑には、海軍の部隊名も記されていた。ここ万世の基地からも陸軍のみならず海軍の特攻隊も出撃していかれたのであろう。すぐ側の特攻平和祈念館の１階には、近くの海岸で引き揚げられた複座の零式艦上戦闘機が展示されていた。また、その２階には、かの有名な子犬を抱いた少年飛行兵の特攻隊員と仲間達の写真が飾られていた。この基地でのことであったのだ、と改めて彼らがこの基地に着任して特攻出撃していくまでの間に、何を思い、何を考えていたのだろうかと、その明るくあどけない笑顔に対面して深く考えさせられた。

式典には、ご来賓、ご遺族、戦友、地元有志、世話人の方々等、約５００名の参列者があり、例年どおり、厳粛かつ盛大に行われた。この式典でも、若い人の「慰霊のことば」が捧げられたが、素直な気持ちが述べられていて、印象深く心に残った。

昼食に、地元の皆さんから出されたお接待の蕎麦の味は、故鮫島元統幕議長のことを思い出させてくれる、素朴な忘れられない味であった。

前夜の灯明祭で竹灯籠に献火される参列者

萬世特攻慰霊碑　第４０回　慰霊祭

2011年(平成23年)4月29日

平和な社会継承誓う

万世特攻慰霊祭 40回節目 500人参列

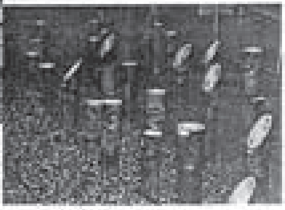
南さつま

奉賛会会長「追悼のことば」
川野　信男　会長

遺族代表　「慰霊のことば」
第74振武隊「竹内 貞一」弟 竹内　久安　様

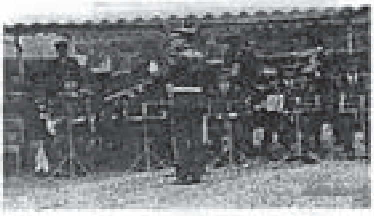
旧隊員代表「慰霊のことば」
飛行第66戦隊　苗村　七郎　様

―慰霊祭―
ご遺族の献花



灯　明　祭

平成２３年４月２３日



―慰霊祭―　　献　奏
第12普通科連隊国分自衛隊音楽隊

竹灯籠に献火される参列者

「灯明祭 慰霊のことば」
ご遺族　山本　昌雄　様

(地元の新聞記事より)

川棚町「特攻殉国の碑」慰霊祭に参列して

専務理事　藤田　幸生

平成23年5月9日（月）14時から、長崎県大村湾沿いにある川棚町の「特攻殉国の碑」前において、旧海軍「震洋」特攻隊殉国者の慰霊祭が、同碑保存会の主催で、厳粛、盛大に執り行われた。今年は第45回目となる。この慰霊祭に、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下「顕彰会」という）を代表して参列した。公益財団法人に認定されてから初めての、また、個人的にも初めての参列であった。

「特攻殉国の碑」前慰霊祭祭壇

当日は天候に恵まれ、新緑の香が皐月の風に乗って爽やかに漂い、薄日が射す穏やかな一日であった。碑の前に広がる海は、陽光を受けてきらきらと輝いていた。そこはかつて、隊員たちが猛訓練に励んだ海である。

碑前に張られたテントの下に並べられた椅子席には、ご遺族約40名、旧戦友約20名の方々が参列されていた。来賓として、海上自衛隊第22空群司令渡邊剛次郎海将補始め、佐世保地方総監代理の高塚管理部長、陸上自衛隊相ノ浦駐屯地司令代理の愛甲三等陸佐などの現役自衛官が、多数参列されていた。また、長崎県知事代理として越智良一殿、山口川棚町長、一ノ瀬波佐見町長、渡邉東彼杵町長、中島県議ほか県議、市議、町議の皆様、米永佐世保水交会会長、南須原佐世保海自OB海会長等のご来賓、地元の方々約１００名、保存会会員約30名、その他県内外からの参列者多数を加えて、合計約３００名の方々が参列されていた。

碑前テント内来賓席

慰霊祭は、例年通り、次の式次第に則って、斉整と進められた。

開会の辞
軍艦旗に敬礼
国歌斉唱
黙祷
慰霊の辞
慰霊電報・書翰奉呈
礼拝
献歌
「同期の桜」斉唱
閉会の辞・お礼
事務局連絡

印象深かったことは、地域のベテラン男性合唱団「オールドダックス」による素晴らしい献歌と参列者総員による川棚版歌詞の「同期の桜」の斉唱である。思わず声が詰まってしまった。また、西村事務局長による、事務局からの心の籠った「ご連絡」であった。

男性合唱団「オールドダックス」の献歌

今年の参列者は、関係者の言によると、必ずしも多くはなかったようであるが、それでも戦友などの老齢者に混じって、孫、曾孫に当たると思われる若い人、子供達の数が目立っていた。

慰霊祭の状況から感じたことは、この「震洋」に関する慰霊祭は、この大村湾に面した川棚の地が中心となり、その規模も大きい。その活動は、特攻殉国の碑保存会、特に事務局長の西村金造氏のご尽力が大きく、また、地元新谷郷（しんがえごう）の皆さんの絶大なるご支援によって支えられているということである。来年以降も、末永くこの慰霊祭が継続されていくであろうことが確信できた。

この慰霊祭には、関東地区から航空機利用により、日帰りで参列することも可能である。しかし、折角西海の地を訪れた機会に、長崎、平戸、有田、雲仙、天草など周辺の名所・旧跡への旅を楽しむことをお薦めしたい。

参列者の献花の列

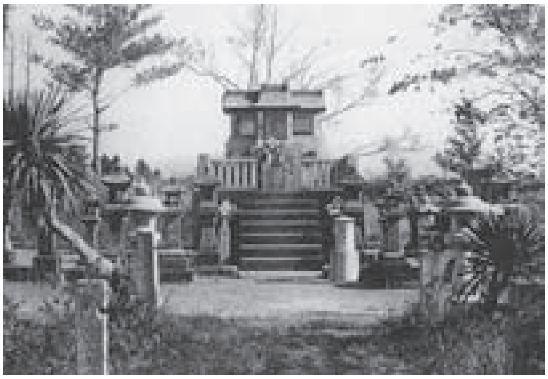
第57回 知覧特攻基地戦没者慰霊祭

評議員　飯田　正能

平成23年5月3日（火）13時より、鹿児島県南九州市知覧町、旧陸軍知覧特攻基地内にある「知覧特攻平和観音堂」前において、今年第57回目となる「知覧特攻基地戦没者慰霊祭」が、知覧特攻慰霊顕彰会（会長・霜出勘平南九州市長）の主催により盛大かつ厳粛に斎行された。

昭和30年9月28日、特攻の母と慕われた鳥濱トメさんらの悲願が実り、この地に瀟洒な観音堂を建立、世田谷山観音寺内特攻観音堂に祀られている観音像と同体の、奈良大和法隆寺夢殿の秘仏「夢違い観音像」を模した「特攻観音像」が安置され、同月30日、特攻勇士の御霊の慰霊顕彰祭が執り行われた。それから早くも56年の歳月が流れた。その間、昭和49年の新観音堂堂宇建設、更に平成16年の大改築、昭和50年の特攻遺品館建設、更に昭和60、61年「知覧特攻平和会館」への大規模改築、周辺一帯の公苑整備、千数十基に及ぶ石灯籠の建立（この地を始め、万世、都城、健軍、大刀洗等南九州の陸軍特攻基地及び台湾から沖縄特攻作戦に出撃して散華された1036柱の御霊に因み、同数の石灯籠を平和祈念通りに建立すべく、昭和62年から始められた建立寄進事業は、平成17年現在既にその数を達成し、なお寄進が続いている）、記念碑、記念像等の建立整備を経て、今や知覧は、特攻の町、特攻精神と世界平和の発信基地として、国内はもとより、世界にその名を知られるようになった。

しかし、この地の特攻隊員の慰霊顕彰事業は、鳥濱トメさんなくしては実現しなかったであろう。鳥濱トメさんこそは、大慈大悲の観音菩薩の御心を具現した、正に慈母観音とも崇められるべき母親である。戦中は若い特攻隊員達を我が子のように慈しみ、多くの苦難に耐えつつ、限りない愛情を降り注ぎ、戦後は、世間の風評を物ともせず、遠い異国の地に駐留する若い米兵達の心の支えともなって、ママと慕われた。一方、若い命を祖国のため、愛する家族らのために捧げて散った特攻隊員達の事は片時も忘れることなく、戦後の逆風に耐え、旧飛行場の片隅に立てた棒杭を慰霊碑と見立てて、毎日参拝供養したことから、この観音堂の建立は始まった。ここに、「特攻平和観音像」として祀られている「夢違い観音像」も、トメさんが世田谷山観音寺の太田睦賢初代住職から授受し、これを奉持して知覧に持ち帰って奉安したものであり、当初の観音堂の手水鉢や石灯籠もトメさんが寄進している。更に、その後の観音堂の清掃整備、慰霊顕彰事業の推進はもとより、特攻隊員一人ひとりの思い出を語り継ぎ、尊い殉国の精神を世に明らかにし、生涯をその祈りに捧げた。そして、トメさんの聖なる志は、長女美阿子さん、孫の鳥濱明久さん、二女礼子さん、孫の赤羽潤さんらによって立派に受け継がれている（鳥濱トメさんの生涯につい



昭和30年９月28日建立の初代「知覧特攻平和観音堂」

昭和49年に改築された二代目「知覧特攻平和観音堂」

平成16年第50回慰霊祭を記念して全面的に改築された現在の「知覧特攻平和観音堂」と観音像

ては、二女赤羽礼子・石井宏共著、草思社文庫『ホタル帰る―特攻隊員と母トメと娘礼子―』に詳しい)。だが、「特攻平和観音の由来」にしても、特攻遺品館ないし特攻平和会館の由来にしても、鳥濱トメさんのことや、トメさんの特攻隊員に寄せる哀惜の情、慰霊の真情に感動し、散華した特攻隊員の遺書・遺品集めや慰霊顕彰に執念を燃やした、生き残りの元特攻隊員板津忠正氏らのことは、公には記されていない。トメさん始めこれらの人々が行政や政治を動かし、関連施設の整備や行事は年々盛んとなり、今や知覧の観光事業の一つに取り込まれるような状況であるが、たとえ、観光旅行でこの地を訪れた人々でも、特攻平和会館に一歩足を踏み入れ、特攻隊員達の遺書や遺文、遺品、遺影に触れた途端、粛然と襟を正し、涙するであろう。特攻精神の何たるか、戦争の実態の何たるかを知らずとも、人間として耐えられない程の悲しみと散った命の厳粛さ、尊さが無条件に心に沁みてくるであろう。そして、この歴史の真実と御霊の慰霊顕彰を永久に風化させないことが大切なのではないか。トメさんもそのことを望んでいたに違いないと思う。

第57回知覧特攻基地戦没者慰霊祭には、夜来の雨の降り止まない中にもかかわらず、また、3月11日に発生した東日本大震災の後にもかかわらず、観光バス等で続々と人々が参集し、例年よりも少ないということであったが、式典会場には千余名の参列者が参集した。例年どおり、地元の婦人達による心の籠もった接待は有り難かった。筆者は午前中、式典に先立って、赤羽潤さんの案内により、初めて鳥濱トメさんのお墓を訪れ、御冥福と感謝の祈りを捧げることができた。また、礼子さんが通っていた旧知覧高等女学校跡地を訪ね、なでしこ隊員の皆さんの活躍に思いを馳せた。そして、幸いにも、受付所兼休憩所に当てられた体育館内で、板津忠正氏にお会いし、感謝の意を伝えることができた。

式典は雨の降り続く中、式次第どおり、開式の言葉、献茶、一同合掌礼拝、黙祷の後、読経の中、各代表による焼香が延々と続き、知覧特攻慰霊顕彰会会長の追悼のことば、鹿児島県議会議員、南九州市議会議長、御遺族・偕行会（陸士57期生会）・特操会・少飛会各代表の慰霊のことばが捧げられたが、中でも御遺族代表の第80振武隊高橋弘准尉（戦死後中尉）の遺児の健気な言葉には胸打たれるものがあり、各戦友会代表の言葉には戦友を想い、その死を悼み、この国の現状と将来を憂うる真情が溢れていた。次いで、遺詠の献詠、各代表並びに参列者による献花、国分自衛隊音楽隊による献奏、南九州市長の挨拶、参列者一同による加藤隼戦闘隊の歌と同期の桜の合唱、閉式のことばによって、2時間余にわたった式典は無事終了した。

なおも降り続く雨の中を、送迎用のバスに乗り込み、別れを惜しみつつ知覧の里を後にした。国難とも言うべき未曾有の大震災も、特攻精神のある限り、必ずやこれを乗り越えて、復興を成し遂げることができるであろう。

散る桜　秋津島根の　神風に
第80振武隊　高橋　弘中尉

昭和50年開設の特攻遺品館

昭和60 ～ 61年新築の「知覧特攻平和会館」

鳥濱家のお墓

知覧高等女学校跡碑前にて赤羽潤氏（左）と筆者

鳥濱トメさんと板津忠正氏（左）

第57回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

会員　平野　勝也

平成23年5月3日（火）、鹿児島県南九州市知覧町において挙行された、第57回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列しました。当日は雨が降り続き、例年に比べ肌寒い中での参列となりました。

今年3月11日に東北地方と関東地方の一部を襲った未曾有の東日本大震災の影響を受けてか、ゴールデンウィークの最中でしたが、空港の混雑は例年の半分以下だったように感じました。私は、鹿児島空港の手荷物受取り場の奥に向かう柱の電光看板を見ると、今年も来た、という気持ちになります。その看板とは、万世基地から飛立った第72振武隊の荒木幸雄伍長が中央で仔犬を胸に抱いた、有名なあの写真に「君たちを忘れない」と書かれたものです。

鹿児島空港内の電光看板

空港からはレンタカーで知覧町へと向かいました。先行していた赤羽さんと知覧で合流し、総勢6名になりました。

慰霊祭の前日午後に知覧に到着。まずは腹ごしらえをしました。鳥濱明久さんが営む「知覧茶屋」に毎年必ずお邪魔します。ここでは、鹿児島の郷土料理を堪能できます。何と言ってもお薦めは、鹿児島豚の肉を軟骨ごと何日も煮込んだ「とんこつ」です。そのほか、さすがお茶の名産地、茶蕎麦が絶品。美味しい料理に各々が満足したところで、お店のすぐ側の特攻平和会館を拝観しました。

ゴールデンウィークということもあってか、全国各地からツアーなどで来ていると思われる家族連れや、10代~30代の若い世代も目立ちました。

会館では1日に数回、特攻隊員の方々のエピソードを語り聞かせてくださいます。我々は丁度その時間に拝観していたのですが、その場所には多くの人が集まり、言葉のひと言ひと言に頷きながら、目頭をハンカチで押さえている姿もちらほらと見受けられました。

しかし、少しばかり気になることもありました。例えば、知覧基地ではなく万世基地から出撃した第72振武隊の写真を大きく伸ばして手に持っていることや、話を聞いている方々がより感動するように「美談」として聞こえるような話し方をされているという印象を持ったことです。それは、特攻隊員の方々の真実の想いを見えにくくしてはいないだろうか。気掛かりです。しかし、特攻という史実を知って帰ってくれることで、各々が日本という国家の真の歴史を知るきっかけとなり、自ら学ぶ事によって、自虐史観からの脱却へと繋がって欲しいと切に願うものです。

平和会館の拝観後、すぐ隣の知覧ミュージアムで、第20振武隊の穴澤利夫少尉（昭和20年4月12日出撃戦死）の特別展が9日まで開かれているということで拝観しました。出撃間際に、婚約者である伊達智恵子さんへ手紙をしたため、智恵子さん手編みのマフラーを首に巻いて出撃された特攻隊員と言えば、ご存じの方も多いと思います。

今回、私と同じく3度目の慰霊祭参列となる同志の一人は、穴澤少尉と智恵子さんのエピソードを「知覧からの手紙」（水口文乃著／新潮社刊）で知ってから特攻に関して深く知りたいと思うようになり、知覧へも足を運ぶようになりました。赤羽さんを慕い集まった同志達は、全員遺族でもなく、自衛隊関係者でもありません。それでは何故、私がこの慰霊祭に参列するようになったのか。きっかけについて、少し触れてみたいと思います。私に、各地で行われる特攻隊の慰霊祭に参列するよう声を掛けてくださった人物がいます。その方は、知覧町で大東亜戦争中に陸軍指定食堂となった「富屋食堂」を営み、多くの隊員の方々から「お母さん」「おばちゃん」と呼ばれ親しまれた「特攻の母」鳥濱トメさんのお孫さん、赤羽潤さんでした。赤羽さんのお母様はトメさんの次女礼子さんで、出撃前の特攻隊員の方々のお世話をした知覧高女「なでしこ隊」のお一人でした。

赤羽さんとのご縁は数年前、世田谷観音寺で毎年9月23日に行われる「特攻平和観音年次法要」にご一緒させていただいたのが始まりでした。そして翌年5月の知覧の慰霊祭にも一緒に行かないかとの有り難いお誘いを頂戴して、初めて参列したのが3年前、今年で3度目の参列となりました。

私が知覧を訪れたのは、実は慰霊祭が初めてではありませんでした。赤羽さんと出会う前に、一人で彼の地を踏んだことがありました。その時は僅か数時間の滞在でしたが、駆足で知覧を回りました。最初に特攻平和会館を拝観し、旧富屋食堂跡地に建った資料館「ホタル館」を観て、トメさんの長女美阿子さんの御子息である鳥濱明久さんの営む「知覧茶屋」にて食事もしました。何と言っても、初めて特攻平和観音様の尊いお姿を拝見した時、神々しくてお優しいそのお姿に自然と涙が溢れたことは今も忘れられません。そこに御英霊の御魂があるのだと想い、現在の平和へと導いてくださった御英霊に深い感謝の念を抱いたことも覚えています。

最初の特攻平和観音堂前で祈りを捧げる鳥濱トメさん
(赤羽潤氏提供)

赤羽さんがトメさんや礼子さんから受け継いだ「特攻隊のあの人たちのことを絶対に忘れさせやしない」という想いをお聴きして、私達は「同志」として共に行動させていただいております。今回参列した私達は平均年齢39歳。当顕彰会会員としては、ひよこではありますが、いずれは戦争を知らない世代で受け継いでいかなければならない時がきてしまいます。その時に真実の歴史と、語り継がねばならない特攻の史実を少しでも正確に、真直ぐ伝えていけるよう、微力ながら努力していきたいと考えております。

私達は知覧ミュージアムを拝観後、特攻平和観音堂をお参りし、鳥濱トメさんのお墓参りに連れて行って頂きました。そこからは天気の良い日、知覧から飛立った特攻隊員が最後に見たであろう雄大な開聞岳が見えるそうです。この日は残念ながらその姿は見えませんでした。

翌日、午前中に飯田評議員と合流して知覧高等女学校跡地の石碑と、鳥濱トメさんのお墓参りにもう一度伺いました。その後、会場で受付を済ますと臼田理事、菅原理事にもお会いすることができ、ご挨拶をしました。

今年は未曾有の大震災を御英霊が嘆いたのか、涙雨の降る慰霊祭となりました。震災の影響でしょうか、例年よりも参列者は少なかったように感じました。

慰霊祭は、式次第に沿って粛々と進められていきました。焼香の後、鹿児島県議会議員や南九州市市議会議長などの県や市の代表、御遺族、偕行会代表、特操会代表、少飛会代表の順に慰霊の言葉が述べられました。県や市の代表の言葉はいつも型にはまったような、まるで定例文の棒読みのようですが、御遺族のお言葉には、胸を突き刺すような痛みを覚え、私は60有余年の歳月は、決して遠い昔の事ではないのだと感じる機会となっております。そして偕行会、特操会、少飛会の代表の方々の声は、戦友を失った深い悲しみを抑えながらも、御英霊の想いを率直に具現されていると感じます。戦後日本を憂えた言葉、最近の左翼政権の弱腰外交などへの批判、日本固有の領土竹島や尖閣に対する特定アジアの動き、GHQにより押し付けられた自虐史観からの脱却などを声高らかに述べられ、若輩者である私の胸の奥に強く響きました。献詠、献花、献奏などを経て参列者全員で「加藤隼戦闘隊」「同期の桜」を合唱して閉式となりました。

こうして、毎年大型連休中に慰霊祭が行われることで、より多くの方々が参列することができ、千名規模での慰霊祭が行われる意義は大きいと思います。

しかしながら、少し気になることがあります。まるでその私の想いを代弁するかのような出来事がありました。今年、私たちが宿泊した旅館の浴場でたまたま耳にした話です。

ある初老の男性が、たまたま居合わせた旧海軍の方へ話し掛けていました。「知覧には、たまたま親戚の祝い事で参りました。もともとは知覧町で生まれ育ったのでよく知っているのですが。あなたは慰霊祭でおみえになったのですか?」「私は海軍ですが、慰霊祭に参列に来ました。」「知覧の慰霊祭は、毎年ゴールデンウィークに行うから観光客も凄いし、慰霊祭の規模も大きい。しかし一方で、こんなに観光、

観光してしまって良いのかかって声もありますよね。慰霊祭に人が集まらなくなるよりは良いって話ですが、どう思いますか?」初老の男性がそう問い掛けると、旧海軍の方は何も言わず浴場から出て行かれました。

私が一番懸念している事があります。この、特攻平和観音堂を建立するために奔走されたのは、一体どなただったでしょうか? それは間違いなく、戦後間もない飛行場跡地に棒杭を立てて、雨の日も風の日も毎日毎日欠かさずにお参りをした「鳥濱トメさん」その人です。観音堂を知覧に建て、特攻平和観音様をお祀りしたいと強く願い、菅原中将、及川大将などを通じて世田谷観音寺御住職に懇願し、十何時間もかけて何度も東京へ足を運び、朝から晩まで観音様に手を合わせ続けるトメさんは、ついに御住職の信頼を得ました。そして東京から知覧の地へと、大事に大事に観音様を胸に抱えてお運びくださったのもトメさんでした。昭和30年の安置後も、観音堂にたくさん人が集まるようにと、子供たちにご褒美を与えて掃除をさせたり、お参りを習慣付けさせようとしてくださったのもトメさんです。すべての始まりは、トメさんです。そのことをおざなりにして良いはずはありません。

観音堂の側にあるトメさんが寄贈された灯籠は、初めて訪れる人では相当探さなければ見つけることができません。トメさんの寄贈された手水鉢は、観音堂の脇に目立たない状態で置いてあります。これらはもっと、「鳥濱トメ寄贈云々」と、案内板を立てたり、別に設置して分かり易くするべきではないかと思います。そうすれば、自ずと「鳥濱トメさんとはどういう人物なのか?」という事や、「観音様とどのような繋がりがあるのだろうか?」と思う方が増えます。そうすることによってより明確にトメさんの功績も分かります。真実を発信する義務があると思います。そうしなければ、奔走したトメさんの想いが何処かに置き去りにされてしまうような気がします。小泉純一郎元首相が建てた「至純」という石碑のほうが大事でしょうか? 映画「ホタル」の石碑のほうが大事でしょうか?

そんなはずはありません。

知覧特攻平和観音堂は観光名所ではないと思います。多くの日本人、特に若い世代に訪れて欲しい場所ではありますが、観光しに来る場所ではありません。先祖のお墓参りを当たり前にするように、大東亜戦争末期、日本人最後のプライドとして命を賭けて戦い抜いた先人へ感謝し顕彰する場であると、私は思うのです。

しかし、赤羽さんは言います。「どんなきっかけにしろ、知覧という場所を知って、特攻という歴史を知って、知覧を訪れてくれたらそこから始まる何かがあるのではないか」と。

戦後に生まれ、豊かな日本に育った私達は、特攻という歴史を絶対に風化させず、永久に語り継いでいかなければならない責務を負っているのだと、知覧を訪れる度に強く感じるのでした。

鳥濱トメさん奉納の灯籠

鳥濱トメさん奉納の手水鉢

千葉縣護國神社奉納「千葉県特攻勇士之像」竣工奉告・除幕式

評議員　飯田　正能

平成23年5月26日（木）11時より、千葉市弁天の千葉縣護國神社において、奉納「千葉県特攻勇士之像」竣工奉告・除幕式が、盛大かつ厳粛に斎行され、当顕彰会からは、藤田幸生専務理事、羽渕徹也事務局長及び筆者が参列した。そのほか、この建立事業に地元実行委員会の中心となって活躍された中江仁評議員（千葉県東葛偕行会会長・陸士61期）も主催者側として参列された。

千葉県特攻勇士之像（平成23年５月26日建立）

「特攻勇士之像」の全国護国神社等への建立奉納事業は、当顕彰会が、旧協会当時の平成18年12月2日、平成18年度第2回理事会及び評議員会において、平成19年度以降の主要事業の一つとして策定されたものであるが、その発端となったのは、平成17年、戦後60年を機に、大阪芸術大学の教員と学生達が、特攻隊に象徴される「日本人の心」を永久に伝えたい、そのための方策として、特攻隊の歌を収録したＣＤ「あ、特攻」を制作販売し、その売上げで「特攻勇士之像」を制作し、全国の護国神社に建立奉納したい、との壮大な計画を開始し、その事業への協力を求められたことにあるが、これこそ当顕彰会に相応しい事業として、これを継承することとし、早速平成19年4月13日の春季例祭日を機して、福井県護国神社に第1号が建立奉納された。爾来今回が10体目の建立奉納となる。

この「特攻勇士之像」の建立奉納に当たっては、像の制作費は当顕彰会が負担するが、その台座、副碑等の作製費の負担、建立場所の選定、建立後の維持管理と慰霊祭の斎行等は地元有志や団体と護国神社との調整協議によらなければ実現は不可能であるため、なかなかスムーズに事業が進行しないのが現状である。何よりも地元の期成実行委員会と護国神社との協力体制の構築が必要とされる。その点、この度の建立奉納事業は、正に理想的とも言える形で推進されたものと推測される。地元実行委員会の熱意と行動力、護國神社竹中啓悟宮司の誠意と実行力、責任役員らの理解と協力、これらが一体となって見事に結実したものである。

千葉縣護國神社は、市民の憩いの場として、またスポーツ施設もある広大な中央公園に隣接し、緑の森に覆われた高台に鎮座まします。平成23年6月1日発行の靖國神社社報『やすくに』第671号に掲載されている「護國神社だより①」によると、千葉縣護國神社の創建は、明治11年1月27日で、今年133周年を迎えたということである。明治11年1月といえば、前年の2月から9月まで激しい戦闘が続いた西南戦争直後のことであり、また、明治12年6月、東京招魂社が靖國神社と改称される前年のことであるから、征討旅団に徴集されて戦死した県出身者も相当数いたのではないか、と推察される。千葉県は明治初年以来軍都として重視され、多くの軍営、軍諸学校、演習場等が置かれた。徴兵令が施行され（明治6年1月発布）、軍制ようやく整備の緒に就いた明治6年4月29日～5月1日、明治天皇は早くも御自ら、習志野の原野で近衛兵等の演習を統監され、この地を「習志野原」と命名された。明治29年3月16日制定の陸軍常備団隊配備表によると、佐倉に近衛歩兵第4聯隊が配備され、更に習志野に騎兵第1旅団（第13、第14聯隊）、同第2旅団（第15、第16聯隊）が、国府台に砲兵第1旅団（第13、第14、第15聯隊）が、下志津に砲兵第2旅団（第16、第17、第18聯隊）がそれぞれ配備予定となっている。次いで明治40年9月18日制定の陸軍常備団隊配備表によ

千葉県特攻勇士之像除幕式場

千葉縣護國神社神門前

特攻勇士之像除幕式

左より杉山蕃、臼井日出男、藤田幸生、中江仁の各氏

特攻勇士之像除幕式祭儀

ると、前記のほか、習志野の騎兵第1旅団には近衛騎兵聯隊が、同騎兵第2旅団には騎兵第1聯隊もそれぞれ所属することとなり、習志野に野砲兵第1旅団本部が、千葉に交通兵本部がそれぞれ置かれ、千葉には鉄道聯隊主力、習志野には鉄道第3大隊が、更に佐倉に歩兵第2旅団第57聯隊が配備され、国府台の野砲兵第2旅団には野砲兵第1聯隊も所属することとなった。更にまた、支那事変が始まる直前の昭和10年～11年には、下志津に野戦重砲兵第4聯隊、千葉に鉄道第1聯隊、津田沼に鉄道第2聯隊、千葉に気球隊、国府台に野戦重砲兵第1、第7各聯隊、騎砲兵大隊がそれぞれ配備された。

また、歩兵、砲兵、戦車、鉄道、航空などの各学校等も多く千葉県内に設けられた。

日清、日露の両戦役を始め、支那事変、大東亜戦争を通じて、これらの諸部隊は大陸や南方の各戦線で奮戦し、多くの戦死者を出した。更に、支那事変から大東亜戦争にかけては、外征のため、昭和13年6月、佐倉で第27師団が編成されて中支戦線へ、昭和17年2月、柏で第59師団が編成されて北朝鮮へ、同年同月佐倉で第60師団が編成されて中支戦線へ、それぞれ派遣され、また、昭和19年7月、千葉で戦車第4師団が編成されて本土防衛に当てられるなど、郷土出身者を主体とした各部隊は各戦線で活躍し、多くの戦没者を出した。千葉県内には、陸軍のみならず、海軍関係も、館山の海軍航空基地を始め、多くの基地、訓練施設が設けられ、また、横須賀の海軍基地にも近く、特攻隊を始めとして、多くの戦没者を出している。

千葉縣護國神社に合祀されているこれら英霊の数は、陸海合わせて5万7828柱に上るという。そのうち、特別攻撃隊千葉県出身戦没者の数は、陸軍49柱、海軍89柱、合計138柱で、この

度建立された「千葉県特攻勇士之像」に並べて建てられた黒御影石の「顕彰碑碑文」の裏には、特攻戦没者全員の命名が刻まれている。

首都東京に近く、農産、漁業、牧畜等豊かな自然と産物に恵まれ、純朴な人情、風土、精神文化に育まれた先人達は、国のため、郷土のため、愛する家族等のために、身命を賭して尽くすことを誇りとしていたのではなかろうか。千葉縣護國神社の竹中啓悟宮司は、前記「護國神社だより①」の中で、「房総の風土の中で育った先人達は古来、瑞穂の国の豊穣に神恩を感謝し、父祖を敬い祀って祭祀を絶やさず君民一体の国づくりにいそしみ、大和心を発揚した。その精神文化を継承され、尊い命を国に捧げられた・・・」と述べられている。

また、右の「顕彰碑碑文」には、次のように刻まれている。

「千葉県特攻勇士顕彰碑

我が祖国日本は昭和十六─二十年米英支ソ蘭豪と大東亜戦争を戦った自国の安泰と欧米の植民地支配からアジアを解放するためだった　戦は連戦連勝南太平洋インド洋まで制圧したが物資の補給乏しく比島から沖縄と敵の反攻を許した　この時一機一艇で一艦に体当りする歴史に例のない必死の特攻戦法が採られた　貧しくとも誇り高い民族の苦渋の選択だった　二十歳前後の若者の死への旅立ちを国民は合掌して見送った　その勇姿を此処に置く敗戦国に育ち歴史を絶たれた現代の人よ　命に代えて何を守ろうとしたのか　この像に問い続けて欲しい　戦後同二十六年五月三日連合軍最高司令官マッカーサー元帥が米上院軍事外交合同委員会で日本の戦は自衛のためであったと証言し米報道機関が全米に発信した

日本国民よ　この事実を銘記せよ」

（千葉県東葛偕行会会長

中江　仁撰文）

千葉縣護國神社奉納「千葉県特攻勇士之像」竣工奉告・除幕式の式典は、護國神社拝殿における「竣工報告正式参拝」と特攻勇士之像前における「除幕式」の二つに分けて斎行された。

「竣工報告正式参拝」は、午前11時より、神官の先導で、齋主以下祭員並びに竹中宮司以下参列者一同拝殿へ参入して所定の席に着座し、先ず、千葉県特攻勇士之像建設実行委員会の臼井日出男委員長から奉納目録を奉献し、次いで、当顕彰会藤田幸生専務理事が奉納目録を奉献した後、修祓の儀、献饌の儀、参列者代表の玉串奉奠・拝礼に合わせて一同拝礼し、次いで撤饌の儀、齋主以下退下で、式典は滞りなく終了した。誠に簡素にして厳粛な式典であった。

引き続き、特攻勇士之像前に式場を移して、**「除幕式」**が行われた。

齋主以下祭員並びに竹中宮司以下参列者一同着座して修祓の儀が行われた後、臼田建設実行委員長と当顕彰会藤田幸生専務理事の手によって除幕の引き綱が引かれると、燦然と輝くような特攻勇士之像がその姿を現した。

特攻勇士之像の建立地は、護國神社の境内に入って直ぐ右側の内苑の一角にあり、東面して建つ護國神社本殿に相対する形で、西面して建てられている。その姿は、西方浄土に向かう菩薩の姿に似て、神々しく輝いている。特攻勇士は正しく神にして仏なのであろう。国難に際しては、自らの命を捧げて祖国と衆生を救う、範を垂れ賜っているのである。

次いで、齋主清祓の儀を行い、降神の儀の後、神饌が供され、齋主祝詞を奏上した後、玉串を奉じて拝礼し、その後、竹中宮司以下参列者代表が同じく玉串を奉じて拝礼、一同それに合わせて拝礼した。続いて、撤饌の儀、昇神の儀が行われ、齋主以下神官退下して、除幕式は、滞りなく終了した。

その後、神門前の階段で齋主以下参列者全員の記念撮影が行われ、一切の式典行事を終えて、一同は送迎用バスに分乗して直会会場へと向かった。

直会会場は、ホテルグリーンタワー千葉の3階にある「シンフォニー」の間である。

祝賀式直会は、午後0時30分から始まった。

式典開始に先立って、フリーカメラマン堺敬生氏制作のドキュメント映画**「翔天の詩」**が約20分上映された。特攻隊員上野哲彌少尉（陸士57期）と堺少年との運命的な出会いに関わる、感動の玉編である（本会報別稿「「翔天の詩」を巡って」参照）。

開会の辞の後、挨拶に立たれた建設実行委員長の臼井日出男氏は、自民党所属の衆議院議員で、元防衛庁長官であり、靖國神社、護國神社の英霊に対する慰霊顕彰にも尽力しておられる。委員長として最も相応しい方と言えよう。特攻勇士之像建立の目的と意義を強調され、建立奉賛に協力された多くの方々に心からの謝辞を述べられた。

次いで、竹中護國神社宮司から建立経過報告がなされたが、竹中宮司は夙に、特攻勇士の慰霊顕彰に深い理解を示され、その像の建立に情熱をもって精力的に取り組まれた。宮司自ら関係

者、関係機関等との連絡調整に当たられ、大きな成果を上げられるとともに、実行委員会の事務局的役割を果たされた。誠に感謝に堪えないところである。

続いて、当顕彰会の藤田専務理事が祝辞を述べ、実行委員会を始め、特攻勇士之像の建立奉納事業に絶大な協力支援を賜った千葉県の奉賛諸団体、勇士の方々に深甚の謝意と敬意を表し、今後の慰霊顕彰事業の継承をお願いした。

次に祝辞を述べられた千葉縣護國神社の崇敬者代表・責任役員の吉成儀氏は、海軍甲種飛行予科練習生第14期の出身で、特攻攻撃に出撃する幾多の戦友を見送った経験があり、特攻勇士之像の建立には複雑な想いがあるが、先立った戦友達の供養にとの思いで建立奉賛活動に加わったとのことである。

次に祝辞を述べられた千葉県東葛偕行会の中江仁会長は、前記のように当顕彰会の評議員であり、長年にわたって英霊の慰霊顕彰事業に尽力しておられ、この度の特攻勇士之像建立奉賛事業推進の中心となって尽力され、顕彰碑碑文の撰に当たっても、その意義と目的を、真情を込めて見事に表現しておられる。陸士61期の同期生として誇りに思うとともに敬意を表する。

次いで、臼井建設実行委員長から、この度の特攻勇士之像の建立奉賛に当たり、団体として最も多くの会員の奉賛を集め、顕著な成果を上げた、自衛隊ＯＢの会である千葉県隊友会と建設工事を誠意を込めて見事に完遂した株式会社いしともの各代表者に対し、感謝状の贈呈があった。千葉県隊友会に関しては、前会長瀬川忠行氏（陸士58期）の御尽力絶大であり、現会長山田正二氏を始め、五百数十名から奉賛金が寄せられた。金額の如何にかかわらず、これら多くの自衛隊関係者が英霊の慰霊顕彰に想いを寄せ、先人の偉業を継承しようとされていることは、誠に有り難く、頼もしい次第である。そのほか、建立奉賛に寄せられた県下諸団体、個人は千名に近く、奉賛金募集目標額を大きく上回ったとのことである。建設実行委員会の方々の熱意と実行力の成果であることは言うまでもないが、さすがに戦前から軍都として栄え、豊かな自然に育まれた県民の精神文化、大和心なお健在なりとの感を深くした。

滞りなく式典を終了して直会の宴に入るに当たり、英霊に対する献杯の音頭を取られたのは、前千葉県議会議長の鈴木良紀氏であるが、同氏は、靖國神社・護國神社を参拝する自由民主党千葉県議会議員の会の会長を務められた方でもある。

直会の宴はまた、多くの有志の方々との交歓の場としても極めて有意義であった。特に、この度の特攻勇士之像の建立奉納事業に当たっては、既に平成21年3月、群馬縣護國神社に建立奉納された特攻勇士之像を参考とし、その建立奉賛について種々助言を頂いたという群馬県特攻顕彰会の新井有治名誉会長（陸士61期）と交歓できたことは有り難かった。これまた、同期生として誇りに思い、敬意を表する次第である。

今回の建立奉納式典等の斎行は至れり尽くせりの感があったが、その際に配布された北影雄幸著・㈱光人社発行『これだけは読んでおきたい・特攻の本』と田中賢一氏（陸士52期）著『特

攻像の譜』は、座右に置いて熟読含味すべき著作であって、誠に有り難かった。後者の一部、特攻隊員を偲ぶ歌他を次に掲げて筆を措くこととしたい。

○千葉県出身の特攻隊員を偲ぶ歌

梟敵侵す沖縄の
悲報は櫛の歯を引きて
乃公(だいこう)出ずば意気に燃ゆ
春繚乱の花の日も
秋蕭条の月の夜も
鋭心磨き一筋に
鍛えし我等心技もて
四式戦は火となりて
寇し船とも砕くべし

　君が代を思う心のひとすじに吾が身
　ありともおもはざりけり　梅田雲浜

知覧の基地に夜は更けて
三角兵舎も今宵のみ
遠き故郷総(ふさ)の国
使い残せし春秋を
我がたらちねに進上と
書き加えて封を閉ず

　親思うこころにまさる親ごころけふ
　の音づれ何ときくらん　吉田松陰

○仰ぎ見る特攻像
眉宇に秘めたるその決意
国難打開に先駆けん
御親(みおや)の残せし大八州(おおやしま)
いかで失うことあらん
五尺の体今ここに
御国の為になげうつも
後に続くを信ずれば
心に残るくまもなし

(田中賢一作)

◇

碑誌銘

特別攻撃隊として散華された多くの千葉県出身英霊の遺徳顕彰のため公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会及び靖國神社の御支援御協力のもと、千葉県下遺族、戦友、崇敬者、各崇敬団体から寄せられた真心籠る浄財を以て茲に「千葉県特攻勇士之像」を謹んで建立する。

平成二十三年五月二十六日
千葉県特攻勇士之像建設実行委員会
委員長　臼井日出男

臼井日出男実行委員長・挨拶

竹中啓悟宮司・建立経過報告

特攻顕彰会藤田幸生専務理事・祝辞

吉田儀千葉縣護國神社責任役員・祝辞

中江仁東葛偕行会会長・祝辞

「翔天の詩」を巡って

堺　敬生

　私が多感だった中学一年当時（昭和19年）通学の途次巡り合った航空将校との一期一会の出会いと心の軌跡を綴った映像作品が「翔天の詩」です。この作品に登場する航空将校は戦後追跡調査の結果、山形県出身で陸士57期の上野哲彌少尉であることを突き止めました。上野少尉は昭和19年11月陸軍特攻八紘石腸隊の特攻隊員として銚子の飛行場（下志津陸軍飛行学校銚子分教場）から飛び立ち、昭和20年1月8日フィリピンの最前線基地から特攻出撃し、レイテで散華したことも分かりました。昭和47年、上野少尉の祥月命日の1月8日を期し、上野少尉の故郷酒田市を訪れました。その酒田訪問の直前、銚子市内の日蓮宗の名刹妙福寺で、上野少尉の本堂回向が広野観山住職の導師によって懇ろに執り行われ、更に広野住職より「勇翔院英哲日義居士」の法号を頂き、それを携えて酒田へ向かいました。出発前、上野家に電話で列車到着が早朝で、一月は寒さも厳しいため、どなたも駅への出迎えは固くご辞退いたしますと申し入れてありました。

上野哲彌少尉
酒田市出身・陸士57期
昭和20年１月８日レイテにて特攻戦死（戦死後大尉）

　酒田駅に到着した時、不思議な現象が起こりました。初めて降り立った酒田駅にもかかわらず、私の足が、勝手知ったる銚子駅のように、まるで見えない糸に手繰り寄せられるように、ぐんぐん進み、改札口を出てから駅構内の何人もの人の中の唯一人の前に歩み寄り、無言で挨拶し、その人と共にタクシーに乗り込んだのです。その間終始無言、そしてある家の前で車を降り、その人と共にその家に入りました。それが上野少尉の生家で、畳の上に上がって初めてお互いに名乗り合いました。上野少尉の御母堂の上野とみさん（当時73歳）だったのです。

　立派な仏壇に、広野住職から授かった法号を供え、改めて上野少尉の御冥福を祈りました。仏壇脇の欄間には、上野少尉の遺影が掲げられていました。「あっ、間違いない、この人だ」と。あの総武線の車中での上野少尉との出会いが彷彿と甦ってきました。その後、お母さんのとみさんに上野少尉との思い出を話したのですが、とみさんが「お茶が冷めたので替えましょう」と中座されました。熱いお茶を持ってとみさんが戻ったところで、再び話の続きを話し始めると、ものの5分もしないうちに再び「お茶を替えてきます」と言っていなくなってしまったのです。お茶などどうでもよいと思いながら続きを話していたところ、再び同じように中座され、さすがの私も三度目の中座の際には、「お母さんは私の話を聞く気がおありなのだろうか」と、正直そう思いました。しかしそうではなかったのです。その後、お寺に向かう道すがら、上野少尉の妹さんから「先刻母が大変失礼いたしました。堺さんが兄のことを一生懸命話をして下さっているにもかかわらず、母が何度も中座し、気分を悪くされたことと思います。実は母が『お茶を替える』というのは単なる名目で、台所へ来て泣いていたのです。きっと堺さんに涙を見られたくなかったのでしょう。そんな母の気持ちも汲んで、許してやって下さい」と言われ、「そうだったのですか」と、私は一寸ですが、お母さんは私の話を聞く気がおありなのだろうか、と思った自分が恥ずかしくなったのです。戦後27年にして上野少尉の故郷酒田市を訪ね、御遺族と会い、墓参も果たすことができ、心より上野少尉の御冥福を祈りました。

　酒田から戻ってすぐ、妙福寺の広野観山住職の元へ報告に行きました。そこで、私が酒田駅で感じた不思議な現象を住職に話しました。それを聞かれた住職は、「今、堺さんは不思議な現象という表現をなさいましたね。それは、堺さん自身が不思議と感じただけで、仏門に仕える立場の私から言わしめれば、不思議でも何でもないのです。ただ酒田へ行って上野少尉の冥福を祈ったからそれで良いというものではない、むしろこれからが大切です。一番大切なことは、上野少尉への今の思いを生涯忘れずにいること、そして出来たらその上野少尉の思いを形に残しなさい」と言われたのです。その結果、私は上野少尉との一期一会をテーマとした8ミリ映画の制作を思い立ち、17

年の歳月を費やして完成したのが、「翔天の詩」です。幸いこの「翔天の詩」が平成3年（1991年）、平和と生きる尊さをテーマとした「第9回ヒロシマ国際アマチュア映画祭」に入賞、この入賞がきっかけで旧飛行場跡地への慰霊碑建立の募金運動が起こり、1年半後の平成5年11月8日、旧飛行場跡地の銚子市春日台町児童公園に、慰霊と世界の恒久平和を祈念するモニュメント「翔天の碑」が完成し、除幕式を行いました。以後毎年8月15日の終戦記念日には、ささやかながら慰霊祭を執り行っています。

「特攻勇士之像」と筆者

去る5月26日、千葉県護國神社（竹中啓悟宮司）において、「特攻勇士之像」のブロンズ像一体が奉納され、除幕式の後の直会の席で、「翔天の詩」が上映、披露され、列席の方々に感銘を与えました。この「翔天の詩」の他にパート2と言える「翔天の旅・約束」も完成しております。この方には知覧特攻平和会館での、元来撮影禁止の館内を、特別許可を頂いて撮影した貴重なカットも組み入れられております。私はこの他に、大東亜戦争劈頭の真珠湾攻撃で戦死した日本海軍零戦隊隊長故飯田房太中佐（海兵52期）をテーマにした「還ってきた飛行帽」という作品も「翔天の詩」と共に靖國神社に奉納しております。いずれにしても、私はこれらの映像作品を機会あるごとに上映し、多くの人に映像を通じて平和の尊さをアピールしたい、それが私に課せられた使命とも思っております。

なお、これらの作品の鑑賞、あるいはDVDを希望される方は、お知らせ頂ければ対応させていただきます。

〒288−0076
銚子市本町1586
フリーカメラマン　堺　敬生
TEL0479−25−2337
FAX0479−24−6821
携帯090−4671−1272

「塞翁が馬」のわが青春

会員　呉　正男

「**編注**・筆者は1927（昭和2）年台湾斗六生まれ、横浜市在住、法政大学経済学部卒、横浜華銀勤務、1997（平成9）年退職。日台友好の友愛会員。本稿は同会会報「友愛」第9号に掲載されたものである。」

私は横浜中華街にあるスポーツクラブに毎週四、五回通っているが、必ず近くの関帝廟にお参りすることにしている。一般の参拝者は入口の自動販売機に500円を入れて、線香を受け取り、拝殿の中に入るのだが、私は中華街の顔役だったので、係員の笑顔で迎えられる。拝殿に入ると先ず、関帝神像を背にして天空に向かって合掌するのだが、拝殿前の参拝者は、突然彼らに向かって私が合掌するので、ケゲンな顔をするのである。私は約50年前の拝拝（拝礼の台湾語）の場面を思い出しながら「天公」の加護に多謝感謝を念じるのである。

私は昭和33年、日本から17年振りに故郷の台湾・斗六鎮に帰宅した。数日後「拝天公」の祭祀が行われた。父母は私が無事帰宅したら天公にお礼を捧げるとの願掛けをしていたのだ。玄関前の大卓に供え物を並べ、感謝の拝拝をしたのである。

次いで関聖帝君、地母娘娘、観音菩薩、土地公の神像に合掌するが、お願い事を自制して生かされている事に感謝の拝拝をしている。

私は斗六街（現在の斗六市）で生まれ、幼稚園3年を経て、共学生として斗六尋常高等小学校に入学した。学年平均僅か30人程の日本人小学校で、共学生が6人もいた。6年卒業後と高等科1年を終えた時の2回、嘉義中学を受験したが落第した。共学生で私一人だけが取り残されたのである（同級共学生のうち3人が医者になった）。

鈍感だったのか、悔しくて泣き沈んだ記憶がない。高等科2年卒業時に3回目の受験かと思っていた。斗六郡役所勤務の判任官だった父から「京都に親友がいるから日本へ行け」と突然言われた時も、大して不安も感じず故郷を後にした。当時、台湾の内地留学生は、中学入学が多かった。頭は明晰ではないが、大変素直な少年だったと苦笑している。

昭和16年4月初旬、神戸港に上陸。三ノ宮駅の食堂で、50銭の高価ランチ

を食べた時の感激は今でも強く残っている。4月では、どこの中学も受験できず、結局、東京中野区に新設された私立中学に入学した。同級生全員が他の中学の落第生だったのだ。私は台湾での受験勉強の成果があったのか、成績優良だった。

中学1年の12月に、大東亜戦争が始まった。小学4年から4年間、剣道をやっていたので、活発で強く、硬派少年となり、戦局の悪化に伴い、憂国の軍国少年に成長した。中学3年の夏頃に、父親に志願入隊希望を告げ、許諾を求める手紙を出したが返答がなかった。長男であり、OKのはずはない。私は「志願入隊する、生活費の送金を止めてもよい、新聞配達の苦学生になる」と父に縁切りの文面の手紙を書いた。父から直ぐに「オマエノシンネンドオリヤレ」との電報がきた。当時の内地中学生には、志願入隊の希望は普通の事だった。私の志願入隊に関しては、父から当時の心境や苦悩についての感想を、後年聞いた憶えがない。私の周りに台湾人先輩達もいたが、誰からも「志願入隊をやめろ」との忠告や助言を受けなかった事を不思議に思っている。戦後流行の反戦映画を見たり、小説を読んで、悩まずに志願入隊した単細胞を恥ずかしいと思ったものだ。

昭和19年4月、私は陸軍特別幹部候補生を受験し、水戸航空通信学校に入隊した。台湾での小学校時代、入隊や出征軍人の見送りは盛大な歓呼の声や旗の波であったが、私の入隊は、友人一人に見送られて中野駅を出発した寂しさは、今でも思い出す。

入隊した同期生は２４００人の中から選抜され、私は機上通信士養成中隊（２００人）に配属され、同期生羨望の的であった。この中隊には台湾出身は私一人だけであり、朝鮮出身は二人だった（一人は飛行第六六戦隊に転属して沖縄上空で戦死した）。選抜された我が中隊は、他の11個中隊との対抗競技の全てに勝たねばならぬ厳しい訓練が課せられた。

昭和19年12月下旬、戦局逼迫し、補充戦力として繰上げ卒業となり、転属命令が下った。

私は茨城県西筑波飛行場の滑空飛行第一戦隊に転属した。比島方面に出撃直前であったので、搭乗機も指定され、夏服に着替えさせられた。そして遺書を書き、爪・頭髪を切り、私物全部を東京の下宿先に送った。書いたはずの遺書の内容は全然記憶にない。東京大空襲で焼失したからいいようなものの、残っていたら幼稚な文面で恥をかいたと思う。数多くの遺書を目にするが、何と立派な書体と文面だなあと感嘆している。

この戦隊は、「空の神兵」で有名な空挺隊であった。滑空歩兵約20名を乗せた大型滑空機（グライダー）を九七式重爆撃機が１２０メートルのロープで曳航し、夜間に敵飛行場付近で切り離し、強行着陸させる戦隊だった。私は九七重の通信士だ。私が着任前に比島方面に向け先発したグライダー搭乗の滑空歩兵2個聯隊を乗せた空母雲竜が12月19日、上海沖で轟沈して全滅したので、飛行戦隊の出撃は中止となった。

滑空機操縦士に特別操縦見習士官上がりの岩佐陽太郎少尉（横浜在住元台北高等学校配属将校の長男）及び鄭喜一少尉（鄭成功の実弟次郎左衛門の後裔）がおられたので、戦後も親交を得た。

昭和20年に入り、米機の空襲が激しくなったので、西筑波飛行場での飛行訓練は不可能となった。戦隊は5月初旬、朝鮮半島の日本海に面した宣徳飛行場（北朝鮮で現存）に移動した。沖縄戦参入を目指して夜間飛行の離着陸の猛訓練が続き、大事故も発生した。

6月頃、私は内地に転属する操縦士数名を米子飛行場に空輸のため、九七式重爆撃機に搭乗した。その帰航時に満洲方面に赴任する高級将校数名を乗せて大変喜ばれたが、結果的に彼等はソ連侵攻により不運にも苦難の目に遭うことになった訳だ。

7月頃、空中勤務者全員は飛行場内の神社境内で、特攻要員参加の意識調査があった。

熱烈望、熱望、志望の何れかに○印を付ける生死決断の場面であった。

私は熱烈望に○印を付けたことを鮮明に覚えている。当時「人生五十年、軍人は半分、飛行機乗りは更に二割引き」と言われていた。戦局の悪化、特攻隊報道も耳にしており、満17歳の私は死の順番が何れ来ることを漠然と覚悟していた。

私は出撃要員に洩れたが、戦隊主力は沖縄戦参入のため、滑空機を曳航して8月5日内地に向け出撃した。私は全機の帰還はあり得ないと見送り、「生き延びた」と思った。決死を覚悟した戦隊主力は、東京西郊福生飛行場で終戦、戦隊は実戦に投入されず、「幻のグライダー部隊」となった。旧西筑波飛行場衛門付近に「陸軍滑空飛行第一戦隊」（グライダー部隊発祥の地）の記念碑がある。

8月15日の玉音放送は宣徳飛行場で聞いたが、雑音で理解できず、誰もが対ソ戦の鼓舞と思った。最近、雑音なしの明瞭な玉音放送を聞いたが、難解な言語の連続羅列で、浅学の私には矢

張り理解できなかった。残留戦隊員は8月16日、朝鮮西北部の新安州飛行場に移動したが、敗戦の不穏を察知して平壌飛行場に入り、指示命令を待つことにした。敗戦の混乱を経験したことのない我々は、飛行場に面した大同江でノンビリ遊泳をしていて、南朝鮮に向けての脱出の機会を逸してしまったのである。8月末頃に私は民間人に変装して3人で南下したが、38度線近くの新幕駅で、約20名がソ連兵に抑留された。日本に送還するとの言を信じ、日本海側の元山港まで38度線北部山中を、約1週間野宿しながら移動した。朝鮮戦争当時38度線の攻防記事、写真は5年前の足跡の地であるので、感慨深く注目したものだ。

元山から貨車で興南港まで移動した。この地は、先月まで戦隊がいた宜徳飛行場の近くで、興南港の上空を飛んでいたのだ。

9月末頃興南港を出てソ連領に上陸、貨車（トイレなし）に乗りシベリア鉄道を西へ西へと向かう23日間は、不安と苦難の移動だった。

到着したのは、中央アジアの半砂漠地、カザフスタン州西南部のアラル海に近い収容所だった。

約2年間、雑多なノルマを課せられた重労働、空腹、マラリア発病等の悪夢は思い出したくない。今でもソ連(現ロシア）を憎悪する心境である。昭和22年7月、舞鶴港上陸時の体重は11貫(約41キロ）で、体力の限界だった。近年の平均体重は75キロである。

昨（２００７）年8月に満80歳を迎えることができた。長年血圧の降圧剤を服用しているが、体操クラブに35年間通っていたので、同年配の方よりも、外観、動作は良好であると自負している。その上、食欲、飲み欲は衰えていない(笑)。今日健康に生かされており、幸運な人生であったと神仏に感謝している。人生航路には数多くの運命の岐路があり、私はその都度幸運な道へと神仏の差配が得られたので列記してみた。

1　斗六小学校から2回嘉義中学を受験したが落第したので、内地に留学することができた。

2　戦争末期の昭和19年4月、志願入隊したので、東京大空襲に遭わなかった。

3　入隊した教育隊で選抜されて機上通信士の養成中隊に入ったため、旧軍隊の陰惨な苛めや制裁を受けなかった。

4　昭和19年12月に転属した滑空飛行第一戦隊が、比島に向けて出撃直前であったが中止となった。同期の陸軍船舶特別幹部候補生は約１８００名入隊し、１１８５名の戦死者を出している。台湾人の戦死者は5名の内、比島方面で4名戦死している。

5　戦隊の九七式重爆撃機通信士は激務ではなく、実戦に出動しなかった。航空糧食の支給もあり、17歳の私はタバコを酒と交換して飲んでいた。

6　ソ連に抑留され、戦後すぐ帰台できず、二・二八事件に関与しなかった。軍歴があるので、嘉義飛行場攻撃に参加していただろう。

7　ソ連抑留地が、酷寒のシベリア方面ではなく、中央アジアであり、抑留期間が2年だけで生還できた。

8　抑留時の自主申告で、東京中野の下宿の小母さんの実家、茨城県結城郡を本籍地としたので、日本人として帰還できた。台湾人と申告していたら、八路軍（共産党軍）に引き渡され、兵士として、国共内戦、朝鮮戦争で戦死したかも知れない。或るいは文化大革命時において旧日本軍人であり、日本留学生だったので、地主、資本家の子弟として人民裁判で命を落としたことだろう。

9　復員後、父からの指示は、予想もしていなかった復学だった。21歳で新制高校2年生となり、昭和29年大学卒と、5年遅れの学生生活だった。

10　同年代の台湾人の友人達は既に大学を卒業していたが、就職難だった。彼等は悪評の蒋介石独裁政権下の台湾に帰郷を躊躇していたが、新中国の成立で、新中国建設に参加すべく、希望に燃えて昭和27年、28年に大挙して大陸に渡った。私はまだ在学中だったので、舞鶴港に2回も見送りに行った。私も大卒後に行くつもりだったが、思い留まった。父は帰台を希望していたが、結局、創立間もない信用組合横浜華銀に就職した。帰台していたら、私の性格上、圧政下の白色テロに遭遇していたことだろう。

数多くの受難者の体験記に接し、多くの方が受けた過酷な仕打ち、暗黒非業な運命に比較すると、私が如何に幸運だったかと痛切に感じている。神仏の加護によって得られた幸運を感謝すべく、横浜中華街の関帝廟にて空に向かって「天公」に合掌しているのである。

※２００４年に私は、「ＮＨＫのど自慢大会の台湾開催をお願いする日台会」会長として、石戸谷慎吉氏（友愛会員）の支援を得て、約2万人の署名を集めた。遺憾ながら開催実現には至らなかったが、２００６年3月13日、橋本元一ＮＨＫ会長は、総務省副大臣室で、菅義偉副大臣、石戸谷慎吉氏及び私に「海外公演再開の折は、台湾を優先する」との確約を得ている。

第44回豫科練戦没者慰霊祭

評議員　小倉　利之

平成23年5月29日(日)、公益財団法人「海原会」(藤野雅之会長)主催による第44回豫科練戦没者慰霊祭が、陸上自衛隊武器学校内施設で実施されました。

当日は、台風2号に刺激された梅雨前線が土浦の町に雨をもたらし、雄翔園の「豫科練二人像」前では実施できず残念でした。しかし、雨天にもかかわらず、御遺族、御来賓、同窓生、会員等が続々と参集し、受付を済ませ、用意されたバスに乗って構内の会場に向かいました。豫科練戦没者慰霊祭には今回で7回ほど参加していますが、雨天のため室内での実施となったのはは初めてのことです。その会場は、武器学校の講堂のようなところでした。

式典会場には「豫科練戦没者之霊」と標された祭壇が設けられ、両サイドには生花が供えられて、質素ではあるが、心の籠もったものでした。また、祭壇の左側には、音楽隊の席が設けられ、右側には献花用の菊の花が机上に盛られていました。

10時前には、御遺族を始め、参列者が続々と来場され、それに合わせて式典の雰囲気を盛り上げるために、茨城県勝田駐屯地の陸上自衛隊施設学校音楽隊による演奏が始まりました。この時間には、晴天であれば慰霊飛行が実施されるところですが、残念ながら雨天のため、中止となりました。

式典は先ず、陸自施設学校音楽隊の伴奏による国歌斉唱で始まりました。

次に阿見詩吟会の佐藤昌司師範により、故高松宮妃喜久子殿下の次の御歌が奉詠されましたが、太平洋の大海原を頭に浮かべながら、朗々とした歌声が心に強く響き渡りました。

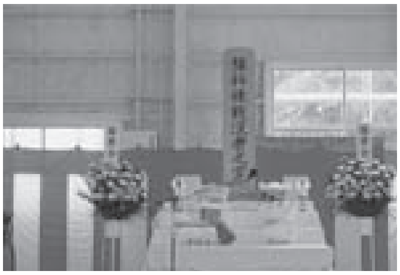
「うなはらにはたおおぞらに散華せし
　きみら声なくいく春やへし」

藤野雅之海原会理事長は、式辞の中で「本日は、海原会第44回全国慰霊祭を開催致しましたところ、御遺族、会員多数のご参列を戴き、盛大に慰霊式を挙行できますことを、衷心より感謝申し上げます。今年は先の大戦で矛を収めてより、既に66年の歳月が流れ去りました。我々は半世紀以上も毎年、天国におわします英霊に対し、粛々と慰霊式典を挙行して参りましたのは、堅い「豫科練の絆」によるものであります。今後も生ある限りこれを継続することをお誓い申し上げます・・・一万八千五百六十四柱の御英霊、どうぞ安らかにお眠りください・・・ご来賓各位及び世代交代した御遺族の皆様、本日は遠路遥々この地に足を運ばれ、慰霊の誠を捧げられましたこと誠に有り難うございました。衷心より御礼を申し上げて、追悼の辞と致します」と述べられました。

続いて同窓生代表の追悼の言葉を、小林和夫雄飛会会長が捧げられましたが、「慰霊祭は、祖国防衛のため戦った英霊の方々の功績を顕彰する貴重な時であります。我々が今日あるのも偏に戦没豫科練先輩各位が、命を捧げた尊い犠牲の賜であります。生存豫科練生一同は、英霊の胸中に思いを馳せ、心から哀悼の意を表するものであります・・・」と述べられました。

続いて、御遺族、御来賓、各会代表者等による献花が行われ、順次白菊一輪を霊前に捧げて、拝礼されました。

来賓挨拶は、陸上自衛隊武器学校の若月寿一校長が「去る3月11日に発生した国難とも言える東日本大震災に、陸上自衛隊からも約6万の隊員が、人命救助活動を始めとする災害派遣に参加しており、隊員は真に、身を挺して活躍してくれているものと確信致しております。豫科練の精神も、雄翔園や二人の像を通して、若い隊員達の教育



「豫科練戦没者之霊」祭壇

慰霊祭会場来賓席

陸自施設学校音楽隊の演奏

奉納舞踊「若鷲の歌」

にも活用されており、その精神は何らかの形で受け継がれているものと確信しております」と述べられました。

遺族の言葉は、遺族代表として、故本間健二郎上飛曹（甲飛7期）の実弟本間謙伸（甲飛15期）様が述べられましたが、同じ豫科練出身の弟様が述べられたことで、一層感銘深く、弟様としては、きっと兄上様の後に続かんとして入隊されたものと思われ、その当時も素晴らしい兄弟であられただろうと推察いたします。

次いで参列者全員で「若鷲の歌」を奉唱し、陸上自衛隊音楽隊の奉納演奏があった後、海原会の阿保文敏副理事長の閉会の辞があって、式典は滞りなく終了しました。

その後、「雄翔館」を参観し、阿見町「豫科練平和祈念館」を見学してから直会会場へと向かいました。

直会は、先ず、海原会顧問の前田武氏が謝辞として、「豫科練の活躍を語り継ぎ、その慰霊顕彰は、現存する者が生ある限り、努めましょう」と挨拶をされ、次いで、来賓代表として、阿見町の天田富司男町長が「阿見町の豫科練平和祈念館の落成は、海原会の支援なくしては叶いませんでした。お陰様で現在では多くの見学者が訪れており、好評を頂いております」と挨拶をされました。乾杯の後、奉納舞踊として、地元婦人会有志による舞踊「若鷲の歌」が披露されましたが、真剣な心の籠もった見事な踊りに、惜しみない拍手が場内一杯に響き渡りました。

宴酣な中ではありましたが、定刻となり、帰路の無事と参会者の健勝を祈り、再会を約して閉会となりました。

武士道と軍人精神を究明する歌人・作家として著名な北影雄幸著『これだけは読んでおきたい特攻の本』（光文社発行）の「あとがき―特攻隊と日本の心」の中に、次のような感銘深い記述があったので、ご紹介いたします。

「前記ミロー（注・『神風』の著者フランス人ジャーナリスト、ベルナール・ミロー）はまたこうも記している。――ほんのひとにぎりの狂躁的人間なら、世界のどの国にだって必ず存在する。彼ら日本の特攻隊員たちは全くその反対で、冷静で、正常な意識を持ち、意欲的で、かつ明晰な人柄の人間だったのである。多くの特攻隊員たちの書き残したものや、彼らを知る人々の談話の中からうかがい知られる勇気を秘めたおだやかさや、理性を伴った決意というものもまた、彼らの行為が激情や憤怒の発作であったとする意見を粉砕するに十分である。――

今もって特攻隊員を狂気の所産と見る人々が少なからずいる。確かに特攻自体は、いかなる理屈をつけようと、戦争自体が狂気の所産であるのと同じ意味で、狂気の所産であったことに間違いはない。だが、こと特攻隊員に関しては狂気の所産どころか、もっとも屹立した正気の所産であった。己れの命を懸けても祖国を守るのだという精神の純粋性は、狂気からは決して生まれない。祖国を守るということは、父や母を守ることであり、兄弟や姉妹を守ることであり、さらには親友や恋人を守るということと同義であった。このような美しい心が狂気の所産であるわけがない。

特攻隊員が正気であったことを証明するのは、今に残された彼らの写真である。いずれの写真も凛（りん）としている。今の同年代の男子にはない凛乎（りんこ）とした美がそこにある。彼らの写真が凛々（りり）しいのは、時代の緊張のせいもあるが、それよりも何よりも彼らの精神そのものが張りつめた弦のように少しの弛（ゆる）みもなく緊張していたからである。まことに見事な若武者ぶりである。おそらく日本の青春の最も美しく、最も良質な部分が、彼らに象徴されているのであろう。もし特攻隊がなければ、かの大戦は日本の単なる惨めな敗戦で終わったであろう。だが、特攻隊の奮戦により、かの戦争は日本民族の一大叙事詩と化した。これが戦後日本の復興にとって計り知れない力となり、さらには二十一世紀の新生日本を創出する原動力ともなる。その意味からも、特攻隊の現代史的意義はいささかも色褪（あ）せていない。

歴史とは、それぞれの国家に固有のものである。そして歴史的事実というものは否定しようがない。日本史は大東亜戦争という悲痛な過去を体験し、三百万人もの同胞が非命に斃（たお）れた。その尊い犠牲のもとに現在の平和があることを片時も忘れてはならない。

ことに特攻隊に象徴されるように、多くの若者たちが祖国愛と同胞愛に燃えて出陣し、圧倒的な物量を誇る敵と戦い、その多くが戦野に斃れたのである。この悲痛な歴史的事実を風化させてはならない。

平和の尊さは戦争と対置させることにより鮮明に浮き彫りにされる。現在の日本の平和を尊いと思うなら、その平和な日本を建設しようと念願して黙々と戦場に赴き、そこで非命に斃れた多くの将兵の真情を解さなければならない。そうすることによって初めて平和の尊さと生命（いのち）の重さというものが実感できるからである。」

特集

特攻インタビュー（第5回）

陸軍水上特攻
皆本義博 氏

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員による「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局（担当大澤）までご連絡下さい。」

◇　◇　◇

皆本義博氏軍歴（略歴）

陸軍士官学校第五七期　陸軍中尉
海上挺進第三戦隊第三中隊長
四式肉迫攻撃艇（秘匿名称・連絡艇㋹マルレ）装備（約30隻）
沖縄・渡嘉敷島配備

◇　◇　◇

○特攻ライブラリー取材スタッフ
（五十音順）

及川　昌彦　世話人
神崎　夢現　進行
倉形　桃代　記録
提橋　律子　世話人
須貝　智行　写真撮影
高橋　暢　映像撮影
長尾　栄治　インタビュアー・構成

◇　◇　◇

◆身体検査であやうく陸士入校取り消しに

――ご出身は熊本で、済々黌（現・熊本県立済々黌高校）から陸軍士官学校に進まれたのですね。

皆本：全国の中学校の中で、鹿児島一中、熊本・済々黌、福岡・修猷館、東京・府立四中が陸軍士官学校と海軍兵学校に進む名門校でした。済々黌からは陸士56期、57期に一番多く入りました。陸士に行ったのが35名。海軍兵学校と海軍機関学校が9名。東大にも10名行っています。済々黌には名物先生もいました。数学の坂本昇という先生は、教壇に上がって教科書を開く前に一席ぶつわけです。熊本弁で「よかか！」と。「よそん者は、一所懸命勉強してるよ。負けんようにやれ！」と必ず一言、檄を飛ばしてから授業を始めました。

――当時の学校制度は予科と本科という区別がありましたが、陸士も、まず、陸軍予科士官学校に入校して、その後、陸軍士官学校に進むという形だったのですね。

皆本：はい。士官学校は昭和12年に神奈川県座間に移っていて、市ヶ谷は予科士官学校だけになっていました。予科士官学校も昭和16年9月に埼玉の朝霞に移転しますから、我々の57期が市ヶ谷に入校した最後の期となりました。

入校は4月1日ですが、入校直前に身体検査を受けなくてはなりません。昭和16年3月28日、市ヶ谷に着きましたが、私を含め10名が身体検査に引っかかりました。私以外の9名はガックリしながら市ヶ谷を去って行きました。あいうえお順か何かで私は一番最後でした。忘れもしません。私の身体検査で鈴木軍医少佐が頭をかしげました。私は海軍兵学校や陸士56期の試験を受けましたが、胸に異常があって不合格だったので、今度も駄目かと……。高等学校の受験の手続きもしてないし、こら参ったなと思いました。しかも、郷里の村を出る時、駅で、万歳三唱で送ってもらいましたからね。

そしたら、鈴木軍医少佐が私を指差して「これで最後か」、衛生曹長が「最後です」。鈴木軍医少佐はホッとしたんでしょうね。小さな声で「君の出身はどこだ？」と聞いてきたんです。私は「熊本です」と答えました。「中学は？」と聞くので「済々黌」と答えたら、小さな声で「済々黌からは大勢、入校して頑張っているな。君もひとつ頑張れ！」と肩を叩いて、もう一回ゼスチャーで聴診器を当てました。

そういうこともあって、予科士官学校在学中は保護生徒でした。保護生徒というのは長距離行軍とかが免除されて、他の生徒が到着した頃にトラックで運ぶという、そういう状態でした。

――その年の12月に日米開戦になるのですが、その時のことを何か覚えていらっしゃいますか？

皆本：もう、予科士官学校は市ヶ谷から朝霞に引っ越していました。今は、陸上自衛隊の広報センターなどがある

朝霞駐屯地になっています。

12月8日のことですが、昭和16年10月の末、富士の演習場で野営演習をやって朝霞に帰ってきました。どこで、どうやって知ったかは忘れましたが、戦争が始まったのを聞いて、皆で、とにかく万歳を叫ぼうということになりました。あの頃はテレビなんかもないし、戦争が始まるということは、士官候補生の我々には全く情報はありませんでした。まあ、アメリカとの戦争が始まるかどうかなど考えてもいませんでしたね。それほどの広い情報とか知識を持っていなかったものですから。

――その後、陸軍士官学校に進まれますが、その時には兵種が決まっているのですか？

皆本：予科士官学校は兵種なしです。皆、共通です。予科士官学校を卒業しますと、兵科……兵種と言いますかね、それが分かれて、それぞれの部隊に配属されます。私は熊本の工兵連隊長・山田工兵大佐をよく知っていたから、じゃあ、工兵連隊に行こうということで、金沢の師団工兵連隊に配属されました。だから、私は工兵です。英語で言いますとエンジニアです。配属された原隊で半年ほど隊附をつとめて、座間の陸軍士官学校に入校しました。

◆工兵から船舶兵に

――昭和19年4月に陸軍士官学校を卒業されるわけですが、すぐ「㋹マルレ」に？

皆本：ちょうどですね、昭和18年9月に船舶兵という新しい兵種が生まれたんです。それまで陸軍の船舶関係は、工兵科の中にある船舶関係の連隊とかが担当していました。それが、船舶兵科種が創設されたことで分かれたわけです。

――それで、皆本さんは工兵から船舶兵に兵科を変更したわけですね。

皆本：船舶を希望したわけじゃないですがね。卒業が近づいた時、陸軍工兵大佐が来て、いろいろ訓示して「質問はあるか？」と言う。私は黙って「早く去れ！」と思っていましたら、同期生で、後にフィリピンで戦死した氷室というのが「皆本が質問します！」と突然言ったんです。仕方ないから「大佐殿、質問しますが、我が工兵と輜重兵だけは、皇族殿下がお一人もおいでにならない。品が悪いから、この兵種には来られないんですか？」と言ったら、工兵大佐は明快な返事を避けて「卒業は近まっておる。つまらんことを考えんで勉強せい！」と言いました。

それが影響したかどうか知りませんが、私は工兵をクビになって、新しい船舶兵に任命されました。船舶兵は新しい兵種ですから、同期生の戦車兵と工兵が船舶兵に移りました。戦車兵はなぜかというと、戦車兵科はたくさんいましたが、戦車の製造が間に合わないわけです。だから戦車兵と工兵から兵種変更して、確か60名が船舶兵になりましたが、そのうちの過半数以上、40名くらいは戦車からでした。残りが工兵からですが、船舶兵になりましたら何と言っても本家は工兵の方です。工兵では船関係を少しやっていましたから。

――陸軍船舶兵は「暁部隊」という通称でも知られています。最初に配属されたのは？

皆本：広島県宇品の船舶司令部附になりました。当時、大本営陸軍部で陸軍船舶特殊攻撃の考えを提起した人がいて、船舶司令官・鈴木宗作中将閣下を始めとする船舶司令部と大本営が、その検討に入っていました。兵器行政本部と第十陸軍技術研究所では、肉迫攻撃艇の開発を手がけていました。それと、陸軍船舶兵特別幹部候補生という制度が昭和19年4月に新設されました。これは、昔の旧制中学を出た15歳から19歳という若い志願者を幹部候補生にするというものです。陸士出の幹部候補生は見習士官から少尉になりますが、こちらは卒業後、伍長に任命する。卒業しますと下士官に任用するという制度を決定しております。

陸軍少尉任官

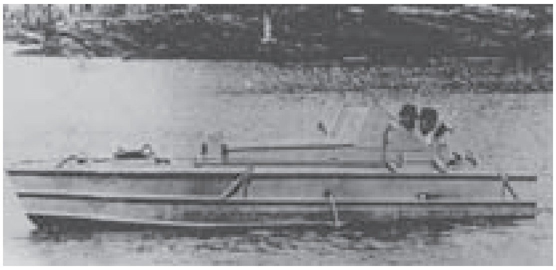
ただ、既存の部隊が全くない。これからどうするかという時期ですからね。船舶司令部で私を含め18名が選ばれ、研究班が作られました。長が斉藤義雄少佐。18名の中に同期生が3名いて、あとは大学を出たり、旧制中学を出た幹部候補生出身者たちでした。

昭和19年7月16日、この18名が広島県広島湾の大カクマ島という……昔の名前は弁天島でしたが……そこを根拠地としました。その島は、もともと大変なお金持ちの方が別荘を作っておりましたところで、陸軍が買い受けたか、借り受けたか知りませんが、そこに泊り込んで、「どうしたらいいか」、「舟艇の試作艇ができた」、「どういう攻撃をしたら良いか」ということを、いろいろ皆で協議しました。時々、西浦節

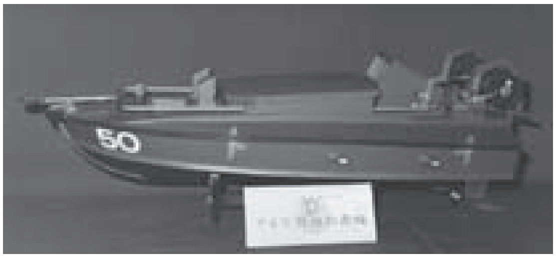
三船舶参謀なんか来られて一緒に協議して検討したわけです。
――試作艇の攻撃方法などを、いろいろ模索したということですか？
皆本：はい。斉藤少佐が海上挺進攻撃研究班の隊長で、副隊長が私と同じ沖縄・渡嘉敷島に展開した海上挺進第三戦隊の戦隊長・赤松嘉次大尉（後に少佐）です。斉藤少佐は工兵科出身、赤松大尉は戦車兵科出身でした。赤松さんは既に亡くなっておりますが、赤松さんが編成する時に、私の同期が18名の中に3名いましたから、「皆本、貴様、俺のところに来い」ということで、海上挺進第三戦隊の第三中隊長になりました。

◆四式肉迫攻撃艇（秘匿名称・連絡艇㋹マルレ）

――その試作艇、「㋹マルレ」を最初に見た時の印象はどうでした？
皆本：まあ何ですかね。手漕ぎの舟じゃなくて自動車エンジンを積んでいました。動力は自動車エンジンでした。昭和19年7月11日、千葉県岩井付近の海上で海軍の水上特攻……これは「マルヨン」……丸の中に数字の四と書きます。「マル四艇」。実際の名称は「震洋」です。その震洋艇と陸軍の試作艇の比較試験をやりましたが、何と言っても、やはり船に関しては陸軍の技術本部より海軍さんの方が専門ですから。で、比較検討しましたが、当時の資料を見ますと、ほとんど必要な要件を陸軍の試作艇も完全に充足しておる。言い換えますと「これでよろしい」ということで決定しました。ただ、そういった兵器は公にしたらまずいものですから、秘匿の名称で「㋹マルレ」とカタカナでつけました。「㋹マルレ」といいますのは、連絡艇（れんらくてい）の頭文字をとって「㋹マルレ」というふうに決めました。



四式肉迫攻撃艇（秘匿名称・連絡艇㋹マルレ）

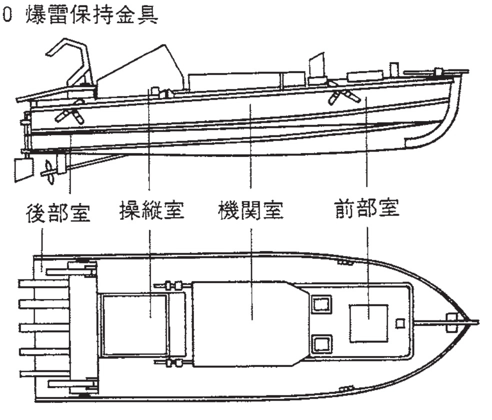


それから、どういう攻撃態勢をとるか、あるいはどういう編成をやるかという検討は我々18名が中心で、船舶司令部の指導を受けながらやりました。舟艇は重量1・5t、全長5・6mくらいの艇ですが、問題は搭載する兵器をどうするかということでした。船舶司令部と第一技術研究所でやりまして、我々、実働部隊も18名が参加して、試作艇に爆雷を積んで実際に爆雷投下もしました。陸軍が使っていた高崎丸という古い船がありまして、実戦的な攻撃方法を試しました。それで、１００kgの爆雷では駄目だと。特に、相手が商船や貨物船じゃなくて駆逐艦とか巡洋艦とかになりますと、かなり装甲が厚いものですから。いろいろやった結果、２５０kg以上あればＯＫということで私らも実際に試して、それに決まりました。

あとは、どうやって攻撃するかですが、海軍さんの方は舟艇の先の方に爆薬を積んでいるので、艇首が当たれば水柱を上げて爆発します。陸軍の方は艇尾に爆雷を懸架する方式だったので、艇首からそのまま突っ込んでぶつかっても、艇尾にある爆雷と敵艦の距離が5m以上離れて、爆雷を落としても効果が低いんです。じゃあ一番良い方法は、ということで、まず、敵艦に対して前進して、ぶつかりそうになる直前に左ハンドルか右ハンドルをきって艇尾を敵艦に向け、ぶつける時に爆雷を落とす。手で引いて落下させるか、手で引けない場合は自動的に落ちて、それが落ちますと至近距離で爆発します。水圧も測って、これなら駆逐艦ぐらいはいけると、こういう結論を出してやっとりました。
――艇尾をふって当てると言っても、操縦は難しかったでしょう？
皆本：訓練の時は大体、停まっている船とか楽な物ばかりでした。動いている船はなかなかですね。
――動力は自動車のエンジンということですが、整備上の問題点はありまし

「四式肉迫攻撃艇」

（秘匿名称・連絡艇㋹艇）



注　名称は「日本兵器総覧第７部船艇」による。

たか？

皆本：陸軍にも機械関係、エンジン関係に詳しいのが、かなりおりましたがね。困ったのは、使う自動車がフォードあり、シボレーありでしょ。それから日産とトヨタもあった。いよいよ戦地に展開したら、整備兵が一時間も前からいろいろやって「まだ終わりませんか」と言うんです。「貴様、何やってるんだ！」と怒鳴ったら、「どうも合いません」と。つまり、インチ・ゲージとミリ・ゲージのネジが一緒になっているんですね。ちょっと見た目では同じですが、ミリ・ゲージのネジがインチ・ゲージにはまらないんです。それが非常に苦労しました。

◆昭和天皇への報告

——「㋹マルレ」は海軍の「震洋」と違い、特攻兵器として開発されたわけではないので、体当たりはしないのが前提だったと聞きますが？

皆本：海軍は、最初からぶつけるということでやっておりましたね。陸海軍の水上特攻は数が多かったせいか、特にフィリピンの戦場なんか、陸軍の方が成果は大きかったと思います。

それで、いよいよ「㋹マルレ」の整備が終わりましたから、大本営陸軍部は天皇陛下に報告申し上げなくちゃいかん、ということで、我々が艇に乗りまして。それに、船舶司令部で高速艇にカメラを乗せて（笑）。我々はミスがないように緊張して、さきほど言ったように操縦しました。それで、陛下にお見せしたら陛下からご質問がありました。「乗っている将校・下士官は生きて帰れるか？」と。どうお答えするか苦慮したようですが「はい！何とか生存の可能性あります！」ということで逃げておりますね。やっぱり、陛下は非常に温かいお気持ちでやられていると思いました。

ちょっと話は変わりますが、私、平成17年9月14日から2日間、アメリカのテキサス州フレデリックスバーグで行われた「太平洋戦争・沖縄シンポジウム」に参加しました。日本代表としてパネリストの23名の中に入り、飛行機賃や宿泊料は全部アメリカ側が負担してくれました。フレデリックスバーグはニミッツ元帥生誕の地です。そのシンポジウムで非常に感銘したのが、アメリカの退役海軍大佐が話した二つのことでした。

一つは、日本の航空特攻は素晴らしい人が乗って勇猛果敢に戦った。しかし、それを統括した最高統帥の方には必ずしも同意できない点があるということでした。いろいろ聞きますと、あの頃のアメリカ海軍の艦載機は、第一線に出ている日本の戦闘機より出力が大きいんです。エンジンの馬力が強力だから速度が出る。日本は速度がちょっとのろい、中には特攻なんかで、やや古い飛行機に爆装して出撃させますね。もともと出力が弱くて、旋回性能はほとんどない。敵の艦上戦闘機に遭遇すると退避できないから、特攻隊員はとにかく勇猛果敢に征かれた。海軍大佐が私に言いましたことが、非常に印象に残っています。

もう一つは、彼はフィリピン戦や沖縄戦に参加していたようですが、航空特攻が来ても苦にしなかったと言うんです。まあ、そうでしょうね。あれだけの対空火器を持っているし、艦載機が飛べば、そりゃもう全然能力が違います。ただ、私の手を握って言ったのは、「水中・水上特攻というのは成果があまり明らかになっていないが、精神的な効果が偉大なものだったよ」と。「私（退役海軍大佐）が巡洋艦艦長をやった時に、水中・水上特攻が来た時にはナーバスになって、任務に耐えない兵隊がかなり出た」ということを言われました。これ、ありのままを『特別攻撃隊全史』（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編）という本に入れております。ちょっと脇にそれました。

——では、話を戻して……「㋹マルレ」の開発や編成は順調に進んだのですか？

皆本：それはもう。とにかく順調になるように大本営陸軍部も全力を挙げていましたから。それから私も船舶関係をやっておりますからね、はい。

——準備が終わって、いよいよ部隊編

成、そして沖縄へ移動と？

皆本：天皇陛下にもご報告申し上げて、それから大本営陸軍部も見に来まして。それで、昭和19年9月1日から中旬までに第一戦隊から第十戦隊を編成しました。それで、今度は10月の上旬から下旬にかけまして、第十一戦隊から第三十戦隊までの編成を完結しました。動員をしながら、沖縄とフィリピンに部隊を展開させました。台湾と沖縄県石垣島に展開した部隊もいましたが、これは戦闘がなく、そこにいただけでした。

◆陸軍海上挺進戦隊

——皆本さんは、どちらの部隊に配属されたのですか？

皆本：私は第三戦隊です。第一・第二・第三戦隊が一番早く編成されました。一個戦隊の舟艇は100隻。隊員は戦隊長以下104名でした。舟艇は一人乗りが原則でしたが、戦隊長艇と中隊長艇は指揮の関係で二人乗りでした。ですから、戦隊長1名、中隊長3名の分、舟艇よりも人数が多いわけです。

　私らの第三戦隊が動員完結したのは昭和19年9月3日でしたかね。宇品で船団を組んで、3隻の船に乗って沖縄に移動することになりました。沖縄戦が始まる前でしたが、当時でも冷静に考えれば、この戦争は先が見えたという感じでした。特攻隊の船団は長崎の西を廻って熊本の天草湾に入り、それから鹿児島湾に入るというように遠回りをする。燃料も余計に必要だし、海軍の艦長に「何で豊後水道を通らないんですか？」と聞いたら、「海軍の艦艇以外は豊後水道の通行を禁止している。なぜかと言うと、10数隻のアメリカ潜水艦がそこに待機しておって、貨物船なんか片っ端に沈められるから、輸送船の方は迂回するんだ」と言うんです。

　宇品を出ます時に、私は「宝来丸」という3800tの貨物船の輸送指揮官代理を命ぜられました。それで門司に着いたら、軍から、我々の船にドラム缶入りのガソリンを積めと言ってきました。そしたら、船長が頑として聞かないんです。第一船舶輸送司令部が門司にありましたから、とにかく参謀に来てもらって説得させようと思ったら、予科士官学校の時の区隊長だった谷口太郎少佐がおられ、「おい皆本。君は今度、沖縄に展開するんだな。ご苦労だ。頑張ってくれ」と言われました。それで、これこれしかじかと事情を話しましたら、「よし、俺が行く」と言って船長に会ってくれました。ところが、船長が、船舶参謀の谷口少佐の命令を聞かないんですよ。門司出港の時が近づくのに、積むべきガソリンも積めない。なぜかと言うと、魚雷を喰った場合にガソリン積んどったら、もう一面……何といいますかね、火が洋上に広がって1人も生存できないということなんですね。

　困り果てていましたら、門司の近くの沖仲士の親方が4、5人連れて来ました。そして、私と船長のやりとりを聞いた沖仲士の親方が、船長の胸ぐらをつかんで「船長、何だ！　戦やってんだ！　馬鹿野郎、貴様下りろ、俺が積む！」と言ってくれて。その気迫は嬉しかったですね。涙が出ました。そして、部下に「早く積め！　船団の出発時間に間に合わせなければ駄目だ。いいか！」と。私が「親方、ありがとうございます」と言ったら、「おい！中隊長さん、死ぬなよ！」と言ってくれました。それから出港しました。何と言いますかね、もう、淡々とした状況じゃなくなっていましたね。実際、私の乗った船も奄美大島の側で、アメリカの潜水艦の攻撃を受けましたが、水雷艇「真鶴」の適切な対処で被害を受けることなく行きました。途中で沈んだ戦隊もかなりあります。

——反対した船長は一緒に乗り込んだのですか？

皆本：はい。そりゃまあ、船長が乗らんと他の者では出来ませんからね（笑）。私も冗談で、「俺が船長だったら考えは同じだな」と言いました（笑）。他の船にガソリンを全部、積めなくて、私の乗っている船が比較的、船室が空いていたから命令が来たんですね。

　門司からは、海軍の水雷艇とか駆逐艦の護衛で船団を組んで移動しました。そして天草に着きました。天草湾なら潜水艦が入ってこないので、その晩、「酒1杯ずつ呑んで宜しい。外で軍歌でも歌え。月を見ろ。安心して月を見られるのはこれが最後かもしれん。よく見とけ」と。

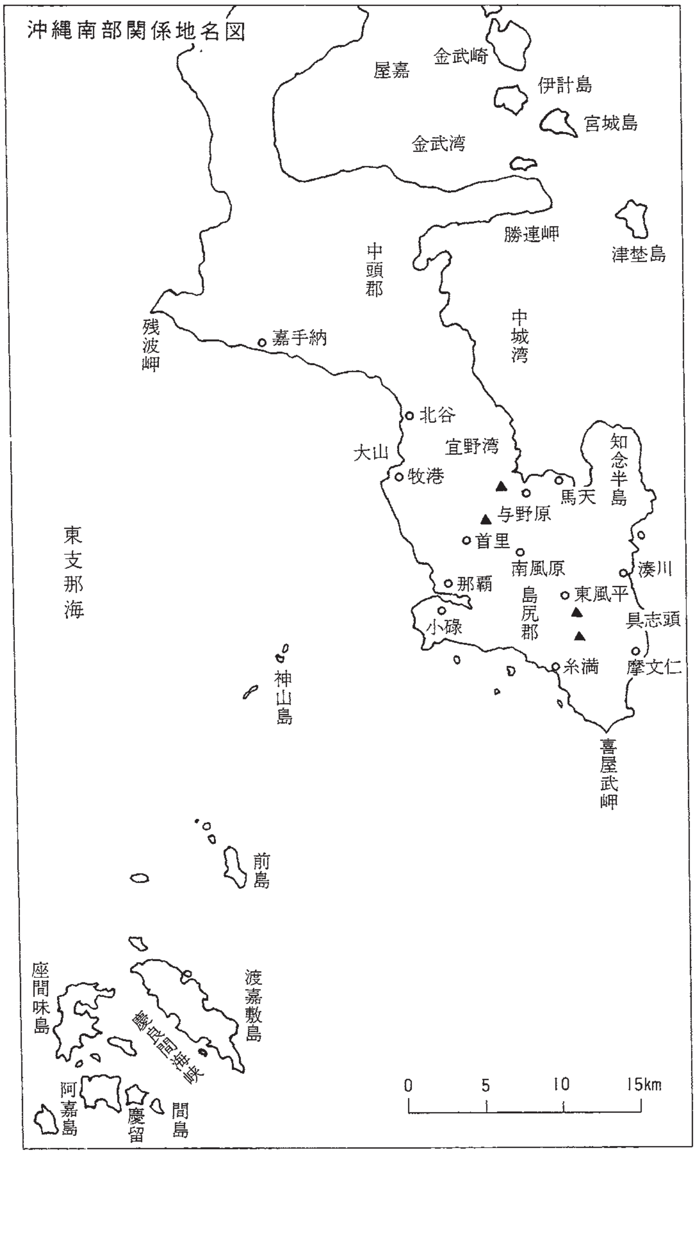
　鹿児島に着いたら「皆本少尉宛」ということで、船舶司令部から電報が来ていました。宇品を出発する前に、マルレ艇を船台に積んだんです。そしたら船長が「中隊長、このままで出港すると、洋上に出て揺れて舟艇が船台から落ちて壊れる。マニラロープで縛らにゃいかん」と言う。船長に「マニラロープがあるか？」と聞いたら「ない」と言うので、私は信号を出させて内火艇を呼びました。どこに行けばいいか解りませんでしたが、ともかく陸に上がったら、襟に何かの印をつけている広島女子専門学校のお嬢さんに会いました。「隊長さん、何ですか？」と聞

くから、「マニラロープが欲しい」と言ったら、彼女がかけあってロープを調達して船に積みました。ところがロープを船に運んだら、もう出港でしょう。うちの小隊長が、中隊長に「（湾内に残す）舟艇をどうしますか？」と言うんです。「波止場までやる暇はない。とにかく切り離しておけば、湾外には出ないよ」と言って（笑）。それで船舶司令部から、「あの舟艇はどうした？」と質問がありまして、私は戦隊長に「戦地に行くのに、そんなことを掛け合っている暇はない」と言ったら、「よし、そのとおりだ」と（笑）。

――その頃になると、移動するだけで命懸けですね。

皆本：そうです。もう何ですね、スムーズにはいかないです。

話は変わりますが、私は戦後、陸上自衛隊幹部学校で3年間、沖縄方面作戦の講義をやりました。幹部学校というのは昔の陸軍大学校です。私が教育したのは、防衛大学校1期とか2期、3期の選ばれてきた連中です。私が幹部学校の教官として着任したら、竹下正彦校長が呼んでいるというから会いましたら、竹下校長が「君は沖縄の生き残りだから、君が沖縄方面作戦をやれ」と言うんです。私は「校長閣下、ちょっと待ってください。自分が戦った戦場のことを講義すると美化するから」と言いましたら、「美化せんでやれ。沖縄戦は一番苦労した最後の戦、国土戦である。素晴らしい統率が陸海軍、県知事や校長にもあったから、それをやってくれ」ということでやりました。考えてみたら、18名で大カクマにこもってやった時に、指導に来た西浦節三中佐は陸士34期で、竹下正彦校長と同期ですから（笑）。その話があって、「皆本も生きて帰って来たから付き合え」、「用があっても無くてもいいから、午前10時と午後2時には校長室に来い」と言われました（笑）。



◆渡嘉敷島に上陸

――鹿児島から渡嘉敷島へは直接移動したのですか？

皆本：沖縄本島に、ちょっと立ち寄りました。那覇の港に入って、夜中に慶良間に着いたんでしたかね。我々が慶良間に到着するちょっと前に、海上挺進基地大隊が着いていました。我々、海上挺進戦隊104名の特攻隊を支援する部隊です。この基地大隊は隊長以下、約900名おりました。これが一足先に着いて、いろいろ段取りしておりました。

――基地に到着すると、最初にどんな仕事をされたのですか？

皆本：管理業務は基地大隊がやりますが、宿舎がないから村民の方の家に分宿しまして分かれておりました。ニッ

パハウスと言いますか。宿舎ができるまではそこにおりました。で、村民の方々と正対の儀礼を済まして、さっそく訓練に入ったわけです。

――皆本さん達を迎えた村民の方々は、どんな感じでしたか？

皆本：非常に温かく、喜んでいただきました。後で、写真もお見せしますが、本当に良くしていただきました。いまだに文通しています。大江健三郎が、渡嘉敷で３１５名が集団自決したのは軍の命令があったからだという本を出しましたね。それを見た曽野綾子さんが「とんでもない！」と2年がかりでモンペをはいて島に行って、ずっと聞いてこられて出版された本が『ある神話の背景―沖縄・渡嘉敷島の集団自決』（ＰＨＰ文庫他）です。曽野先生もおっしゃっているように、自分の郷里以上に沖縄の人には親切に支えていただきました。はい。

――海上挺進第三戦隊が渡嘉敷島に到着されたのは昭和19年8月？

皆本：9月ですね。9月3日に動員完結して宇品を出ることになりましたから、9月27日頃ですか。今みたいにスイスイと行けるわけじゃなくて、途中で敵の動きを見たり、船団を集めたりしますから。9月3日に動員完結して、慶良間の渡嘉敷に着いたのが9月27日です。今、考えますと、そんなに時間がかかるかなという感じですが。

――戦闘が始まるまでは、どのような訓練を？

皆本：渡嘉敷では戦隊の全艇で突撃する訓練をやるわけにはいきませんから、舟艇を浮かべてそれを攻撃する実爆を1、2回やりました。ですが、数に制限がありますからね。後はもう、ただ形だけの訓練でした。

10月9日に沖縄守備軍の第三二軍が兵棋演習を主催しました。「兵棋」というのは、海上なんかの図面に棒を動かすという兵棋演習をやりまして、それに赤松戦隊長が部下を連れて参加しております。私は渡嘉敷にいましたが、翌日の10月10日、松の木に登っていた基地隊の哨戒兵が「敵機来襲のようです！」と言うので見ましたらね、沖縄本島に猛烈な空襲が行われました。この空襲で那覇市が全焼しました。それに渡嘉敷の港内外の連絡船、漁船も全部沈められました。後で聞きましたら、小禄の飛行場……これは沖縄本島にある海軍の飛行場なんですが、小禄飛行場の格納庫がまだ燃えているのに、海軍の爆撃機か何か大型機が強行着陸したということで、海軍さんに「海軍はすごいなあ！えらい度胸だ！」と言いましたら、「やられていると分かったが、小緑から鹿児島辺りまで飛ぶ燃料はなかった。一か八かでここで降りよう」ということで、本当に幸運にも着いたということでした。

――昭和19年10月10日の那覇大空襲で、渡嘉敷島にも被害があったのですね？

皆本：はい。今、言いましたように連絡船・漁船も、村落もほとんどやられましたね。

◆牛島満陸軍大将と大田実海軍少将の思い出

――㋹マルレ艇にも被害があったのですか？

皆本：いえ、軍の特攻艇はみんな洞窟の中でしたから。基地隊だけでなく特攻隊の乗組員まで、皆、一生懸命ハンマーで洞窟を作りました。だから、舟艇に被害はなかったです。

ちょっと、沖縄方面とか全軍関係のことに触れたいと思います。沖縄本島には第九師団、第二四師団、第六二師団、独立混成第四四旅団が展開していました。さっき言いました陸自の幹部学校でのことですが、「教官、質問します。昔の陸軍には優秀な参謀や司令官がおられたのに、何で小刻みに満州とか中国におる師団を沖縄本島に展開したんですか？」という質問があったんです。沖縄では6回、配備変更をやっています。「今の教育で、こんな配備変更をやったらバツがつきますけど、どうしてですか？」と聞くから、「君らが勉強しようとしているのは、今で言う演習・兵棋演習と違うんだ」と言いました。1個師団が派遣されて、その時に敵が来たら、その1個師団で戦わにゃいかん。もう1個師団が派遣されたら、地域を分担して2個師団で戦う。いつ敵が来るかは、来てみないと分からないということで、部隊が派遣されるたびに配備を変更していました。

そして、沖縄に補充する陸軍部隊が全部そろったという時に、第九師団を沖縄から転用するという問題が起きました。フィリピン・レイテ島が危ないから、日露戦争で旅順要塞の東鶏冠山を陥落させて以来、戦史に燦然と輝く石川県金沢編成の第九師団に最大の期待を持っていたんです。その発令が昭和19年11月末です。船で台湾まで行きましたが、そこから先に行けなくなって、結果的に第九師団はそれで助かったわけです。

第九師団の転用は、我々にも影響を及ぼしました。我々の海上挺進第三戦隊は、戦隊長以下１０４名。これは全部突撃する。まあ航空で言うならば、

全部、特攻機に乗るパイロットです。それを支えるのが900名の基地大隊で、すべてやってくれると安心していました。ところが、慶良間に配備されていた三個戦隊すべてに、基地大隊を一部残して沖縄本島に転用せよと命令が来ました。基地大隊を独立歩兵大隊に改編して、独立混成旅団の隷下に入れるということなんです。私たちは、「何だ!大本営はバカじゃないか」と憤りました。今頃になって一個師団を抜いて、そして基地大隊をよそに持って行くと。しかし、いつまでも、そんな事を言っておれませんからね。基地大隊の隊員は我々と手を握り合って、「長い間、お世話になりました」と言いました。基地大隊長の少佐なんか、「我々は沖縄本島に行って戦うが、島の方も、ひとつ最後まで頑張って頂くように祈る」と言って去って行きました。

　それで、今度は昭和20年3月10日。

牛島満軍司令官

今の方には解りにくいが陸軍記念日。日露戦争の奉天会戦に勝ったためでたい日です。その3月10日に沖縄本島の県立高等女学校の講堂で、陸海軍の水上特攻・水中特攻を集めて兵棋演習やるという命令が来ました。ただし、敵の接近が近いようだから戦隊長は残留せよ。代理者を出せということで、中隊長が3人おりましたが、戦隊長が私に「皆本、お前が兵棋演習に行け」ということで行きました。陸軍の方は7個海上挺進戦隊があって、沖縄本島に4個、慶良間に3個と分かれていました。海軍の方は第二七魚雷艇隊、第二二・第四二震洋隊。それから、第二蛟竜隊という特殊潜航艇を改造した部隊がありました。

　兵棋演習が終わって、牛島軍司令官閣下が「いよいよ、これからだ。もう大体皆さん、よく体制ができているようだ。後、ひとつ元気で頑張ってもらいたい」ということで一席設けられました。挨拶される時、牛島閣下は、海軍沖縄方面根拠地隊司令官の大田実少将や連隊長なんかに、ちょっと会釈しながら、「私事に及びますが、私が士官学校長であった時、士官候補生として士官学校におった人、立って下さい」と言うので、私を入れて3人立ちました。そしたら一人一人を、こうやって見られて……。千何百という生徒がおるのに、顔を覚えておられる訳はないけれど、ハンカチを出されて目頭を拭かれましてね。薩摩弁入りで「ようきやった! 有り難うございました! 宜しくお願いします!」と。もう皆、大田司令官も大変感動されました。牛島さんは薩摩隼人で……大体九州は焼酎が……私も焼酎をやりますよ。軍司令官閣下はちょっと口を付けられたら、全然、お呑みになりませんで「もう、年寄りはいない方がいいだろう」と帰られました。

　そしたら、中将になりたての長勇参謀長が威張りこくっているから「落としてやろう」ということで、第二七魚雷艇隊長の白石海軍大尉に「白石さん。見るところ、あんたが一番先任のようだから、参謀長の胴上げやろうじゃないか。〝イチ・ニィ・サン〟で、〝サン〟と言った時に手を引いて下に落とそう」と言って、私が発案してやりました(笑)。それで、〝ドサーッ!〟と落ちたら、長参謀長は体が大きくて、体重も100キロ近くあったんじゃないですか? 〝ダダーッ!〟といって落ちましたら、参謀長が立ち上がって「貴様ーっ!!」って言って、こうやって握り拳を握って追いかけようとしましたが「それくらいの元気があって宜しい!」だけですみました。

　その後、私は、大田司令官のところにお流れ頂戴に行ったら3杯くらい頂きましたね。「おい、皆本。いい校長に仕えたなあ」と大田司令官が言いました。大田閣下のご三男・落合畯さんは海上自衛隊に入り、湾岸戦争後、最初のペルシャ湾掃海派遣部隊の指揮官になりました。私は彼を知っているものですから、最後の寄港地の総領事館宛てに激励の電報を打ちました。そしたら、落合から〝艦上にて〟というお礼の手紙が来ました。今でもそれを持っています。また、落合が海上幕僚監部に来た時、「落合、新宿の店で君に返盃をしたい。君の親父さんから3杯頂いたから、返盃したいから来い」と呼んで、それで、彼の同期生で陸上幕僚監部に来ていた一等陸佐に合わしてやったりしました。そういう関係がございました。

◆沖縄の戦い始まる

――兵棋演習の後、しばらくは平穏な状態が続いたのですか?

皆本:その頃の状況を言いますと、基地隊の哨戒兵が松の木の枝に腰掛を作って対空監視をやってます。洋上警戒も兼ねていましたが、私は「敵・彼我、識別の必要はない。飛んでいる飛

行機は全部〝敵機〟だから、敵機何機、どの方向だけ言え」という指示を出していました。事実、沖縄の戦場では友軍機が飛んでいるところを、一度も見たことはありません。

――昭和20年３月後半から、陸海軍の特攻機が沖縄沖に出撃していますが。

皆本：渡嘉敷からは見えませんでした。少し離れていましたからね。話は前後しますが、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会（現・公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会）で鹿児島あたりの出発基地で慰霊祭をやっているのは非常に有り難いが、沖縄県の西に一番多く特攻機が突入し、あそこで戦死しておられるから、あそこでひとつ、慰霊祭をやろうじゃないかと私が提案したことがあります。そしたら賛同を得ましてね。昭和史研究所長の中村粲先生や最後の連合艦隊司令長官・小沢治三郎中将のお嬢さんとかが慰霊祭に来てくれました。その晩、那覇で涙を流しながら「皆本さん、父も喜んでますよ。父は、最後の連合艦隊司令長官で、沖縄戦に直接、加入しなかったけれど、最大の感銘を抱いていました（注1）」と言っていました。やはり、なんですね。離れた距離の沖縄本島周辺の戦闘は、慶良間の近くまで来て華々しい空中戦になるということはあり得ないものです。あの途中で多くの方が散華されました。戦艦「大和」が奄美大島までしか行けなかったというくらいですから。我々の島からは、我が陸海軍の特攻機が攻撃する場面というのを見ることが出来る距離じゃなかったんです。

――アメリカ軍は沖縄本島の前に慶良間諸島に上陸しましたね。

皆本：その前、３月23日のことですが、忘れもしません。茅葺の兵舎で、12時になったから全員集まって昼食をとろうと箸をとった時、ワーンという艦載機特有の爆音がしました。「おい！昼飯は後だ！」と言って外に出た。それが戦闘開始です。アメリカ・テキサス州のシンポジウムで、あるアメリカの海軍さんが、世界で一番時間を厳守しているのは日本の軍隊で、12時になると必ず飯を始める。だから、警戒心が薄いところを狙って襲撃してきたんです。

それで、大規模な艦載機の空襲を受けまして、焼夷弾などで村落や山林が火災をおこし、11名が戦死、16名が負傷しました。我々には対空火器はほとんどありませんからね。なすがままにやられました。翌３月24日、夜明けと共に敵艦載機が来襲しました。これは大変だ！というので、赤松戦隊長が基地隊の田所秀彦中尉に村落警備を命じました。

25日になりましたら巡洋艦・駆逐艦15隻が慶良間海峡に侵入しました。そして艦砲射撃。我々の基地隊と戦隊は火砲を持っていません。小銃で撃ったって意味ありませんから、敵艦艇に対する反撃の方法は全くありませんでした。その日、３月25日に各中隊が出撃準備を整えました。20時、各中隊は三分の一の「泛水（へんすい）」を下令し、船舶団に報告しました。「泛水」と言うのは水に浮かべることです。ただ、阿波連という南の村落に配備していた第一中隊は「湾内に敵駆逐艦が侵入したため、泛水は困難だ」と報告してきました。21時30分、戦闘準備を視察中だった大町茂・第十一船舶団長が敵中突破して、慶良間の阿嘉島から渡嘉敷島に来られました。考えますと、アメリカ軍が上陸しようという時期に、船舶団全般の統括指揮官である船舶団長が作戦準備状況を視察に来るということ自体、情勢の捉え方がまずかったなという気がします。やはり情報不足だったということです。

◆㋹マルレ自沈せよ

皆本：それで、翌日の３月26日になると泛水出撃が困難になりました。さっき言いましたように、慶良間海峡の入り口には15～16隻の駆逐艦や巡洋艦が来て遊弋していますから、特攻艇が行けば猛烈な火砲でやられるということなんですね。それで船舶団長は軍司令部の了解を得まして、企図秘匿のために特攻艇を自沈せよ、沈めろと……。

特攻艇の出撃・運用の責任者は軍司令官以上になるんです。やはり、特殊な兵器ですから、他と違って、近くの師団長などに出撃の権限がないんですね。船舶団長も自分が発令できないから、軍司令部の許可を頂きました。敵に察知されたり対応されたら困るということで自沈を命じました。大町船舶団長が来られて、戦隊長以下を集めて命令される時に、私もそこにおりました。「これでは出撃困難だ。沖縄本島に４個戦隊がおる。これの状況を察知されないように全部沈めろ」と言われた。

私は小隊長に合図し、みんな集まっている洞窟から外に出まして「小隊長、来い。俺が責任を持つから沈めなくていい艇があれば残せ。その責任は俺が持つ。貴様らには責任は持たせん。解ったか！」と言いました。小隊長が「大丈夫ですか？」と聞くので「俺が言っているんだ。俺は海上挺進戦隊の、宇品の船舶司令官のところで検討して

やっているから一番詳しく知っている。とにかく沈められないのは残せ」と言いましてね……。慶良間の渡嘉敷付近、阿波連の外の湾はエーゲ海に並ぶ透明度の高い海です。戦後、慰霊祭に行って私も泳いでみましたらね。40mくらいのところが手に取るように見えて、澄み切っているんですよ。瀬戸内とかこの辺の海岸と違う。だから、飛行機から見れば「あ、沈めている」と判るなということでありました(笑)。

船舶団長は「自分も早く本島の那覇の軍司令部に帰らないと、全船舶部隊の指揮がとれないから帰りたい」ということで、日露戦争の例を引きまして、バルチック艦隊が日本海に向かう時に大島の人達が、敵艦発見！という訳で舟を漕いで、無線局までたどり着いて「ロシア艦隊発見！」と言って過労で皆、そこで倒れたと。まあ、死にはしなかった。そんな例があるから、戦隊長の赤松さんへ「とにかく赤松、村長に言って、丸木舟があればそれで俺は乗って帰る」と言うんですが、さっき言いました敵の空襲で、海岸にあった船は1隻も残さず沈められていました。さて、どうするかということで、そこで私が「船舶団長、命令違反をやった皆本ですが、報告してようございますか?」と言ったら「やれ」と。「私は私の責任で、艇2隻だけ自沈させないで洞窟に引き上げております」って言ったら「おい皆本、有り難う！」って言われました（笑）。普通だったら軍命令に違反で怒られるところです。それでとにかく、これから出発するということで、250kgの爆装を全部外し、一番艇に大町団長、二番艇に着いてきた幕僚が乗ることになりました。一番艇の操縦は、私の第二小隊長だった中島一郎少尉でした。戦後、アメリカ軍の戦略爆撃調査団の資料を見ますと、沖縄に展開したアメリカ軍艦艇は1800隻なんです。東シナ海の慶良間と沖縄本島の間はとにかくもう、船が本当に多い。そこを敵中突破するということでした。日が暮れて出発しましたが、当時の私の報告では「船舶団長・大町少将、中島少尉、消息を絶った」とあります。二番艇は途中で、振動で亀裂が入って浸水しましてね。舟が沈むから、泳いでまた島に来たわけです。それが3月26日でした。

◆予想外の陸上戦、そして渡嘉敷島民の集団自決

皆本：それで、3月27日。朝6時頃から、精強・アメリカ歩兵第77師団の歩兵第24連隊が我々の島に上陸した訳です。陸上戦闘になるのに、戦隊長や特攻艇乗組員が持っている装備は拳銃と弾が6発。手榴弾、あとは軍刀でしょう。それ以外ないもんですから、陸上戦闘やるって言ったって何もできない。それに海上に出撃するのが我々の基本任務ですから、防御のための陣地なんてないんです。

私は、主力を後方に下げてくださいと申し出ました。「配属小隊30名を私の指揮下に入れてください。この渡嘉志久（渡嘉敷島の海峡側の入江の地名）で、主力が後に下がる援護のため、敵に対する抑止戦闘をやる」と戦隊長に進言しました。で、やりましたら、果たせるかな、敵が上陸しました。配属小隊が持っている軽機関銃は弾が110発位しかない。それで、日本の場合、弾倉に30発ずつ入っていました。30発撃てば、また入れ替える。詰め替えにゃいかん。ところがアメリカは、ナイロンのベルトに弾がつながっていて、引き金を引くと250発出るんです。そんな相手が上がってきたでしょ。戦車もおりました。

銃撃戦が始まり、とにかく、こりゃ大変だと。陣地がないもんですからね。地べたを這い回って敵を迎えた。召集を受けた兵隊さんなんか怯んでしまって、どうしていいか解らない。先任下士官が立ち上がって、若い召集兵に「貴様ら！　いいか、俺はノモンハン戦の生き残りだ。戦の仕方、俺が教えるから、俺に習え！」と言って立った途端、パパパンって4発か5発受けまして即死です。それから、愛媛県の農業学校の先生から召集された高塚春次郎少尉も戦死。30分くらいでもう三分の一が戦死です。戦隊主力は夜のうちから後退しているから、その援護はできただろうということで、とにかく俺について来いと言って、大雨の中、手探りであちこち行きましてね。それで3月28日、やっと主力がいる所にたどり着きました。

同じ28日の14時頃、上陸したアメリカ軍の迫撃砲の攻撃が熾烈で、一日中、北方の谷地や谷間に避難していた島民は、もう限界を感じたんでしょうね。まあ、あの状態でしたら、もうとにかく、これは生きていけんということで。あの頃は、一億総特攻という国民感情もありましたから。それで、召集を受けた防衛隊員に渡してあった手榴弾とかを使って、そこで315名の方が本当に可哀想にも集団自決して果てられました。

部隊の方は、配属小隊が持っている少数の火器で島の守備をやりましたが、アメリカ軍が伊江島攻略に向いましたので救われました。アメリカ軍は

慶良間諸島をある程度制圧したら、伊江島の飛行場を占領するという目的だったようです。伊江島で有名なのが従軍記者のアニー・パイル。彼は日本軍の銃撃で死にました。昭和63年、アメリカ空軍の在郷軍人会の招待があって、統幕議長やった竹田五郎さんが「皆本、お前は空軍じゃないけど、アメリカにも行っとったから一緒に行こうや」という訳で同行しました。そしたら、ハワイの陸軍墓地でアニー・パイル記者と、それからスペース・シャトルが途中で爆発、殉職したエリソン・オニヅカ中佐（注２）、あのお二人が、片方は十字架を刻んだ、片方は仏教の法輪を刻んで、お二方並んで墓がありました。「皆さん、此処に来て参ってくれ」と。

アメリカでシンポジウムをやって、私らはアメリカによって救われたと言ったら、向こうは笑いましてね(笑)。慶良間を巡洋艦とか駆逐艦で閉鎖しているから舟は出せない。戦闘能力も乏しい我々でしたが、77師団を伊江島に向かわせたことで救われました。その後に来たのは、ただ警戒しているくらいでした。こちらも反撃する力はありませんでした。戦隊長が「皆本、敵情をひとつ調べてくれんか」と言うので、夜間、配属小隊の生き残りの兵隊３人を連れて行きましたら、兵隊が「中隊長！　何か書類がここに落ちています」「よし！　貴様、落とさんように持ってこい」と言って、途中で洞窟に入って蝋燭をつけて見ましたらね、表紙の剥げたハイスクールの代数の本なんですよ。私は「はあー、この戦は俺の負けだ。我々が戦地に行く時は、東洋流の国士気取りで〝風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去ってまた還らず〟……。ところがこの若い兵隊さんは、ハイスクール在学中か何か知らんが、教科書を戦場に持って来ている。で、戦の合間に勉強を続けている」と思いました。

◆ニミッツ元帥からの贈り物

皆本：それと、５月の中旬頃ですか、大型駆逐艦が来ました。こちらに火砲がないから、向こうは悠々たるもんです。で、大型駆逐艦が入ってきたから、我々のところを艦砲射撃で制圧するんじゃないかと思っていましたら、流暢な日本語で「日本の皆さん、薬品ないでしょう。衛生材料も尽きたと思う。ニミッツ太平洋方面最高指揮官の命により、海岸に置いていきます。銃砲撃はいたしません」と放送するんです。それで兵隊に「よし、向こうが置いていくならば、それを取りに行こうじゃないか」と言ったら、ある下士官が「中隊長殿、中隊長殿は人が良いから、すぐそれに乗る癖がある」と言うから、私は「馬鹿野郎！　あのアナウンスは、戦う者のお互いの友情だと思う」と。そしたら、立派な箱入りの医薬品と衛生材料がありました。それを担がせて持って帰りました。村民の方も負傷している兵隊もどれだけ救われたか。これも、シンポジウムで言いましたら、大変、喜んで頂けましたね。ま、そういうことがありました。

――アメリカ軍が伊江島に転進した後、渡嘉敷島で激しい戦いは起きなかったのですか？

皆本：アメリカ軍も、部隊の一部をもって来て、途中で射撃なんかしましたが、真面目な戦闘行動は、向こうはとらなかったんです。

――そうすると、終戦まで島でじっとしていたという感じになるのですか？

皆本：はい。ただ、食料なんかがほとんどなくなりましてね。ニミッツ元帥から医薬品を貰う頃、大阪帝大の助教授をやっておられた浮田堅太郎軍医少尉が戦死して、たった一人の軍医がいなくなって困りました。その間に病気で亡くなったのもおりますが、ま、最後まで持ちこたえました。

◆終戦

皆本：我々の終戦は８月23日でした。無線機のバッテリーもあがるし、８月15日に天皇陛下のご命令で終戦になったという事はわかりませんでしたが、飛んでいるアメリカ軍の飛行機も銃撃せず、日本降伏の伝単（ビラ）を投下しました。どうもおかしいということで戦隊長と相談して、国際法に従って白旗と日本の日章旗を持って、木林明中尉がアメリカ歩兵第24連隊長・カンノリー中佐の所に行きましたら、もう終戦になっているということで、それが８月19日でしたかね。それで、８月23日に兵器とか軍刀なんかを向こうに渡しました。そしたら、カンノリー連隊長がタバコとキャンディを持たせてくれました。戦場で戦うけど、やっぱり、お互いの男の友情があるなということでした。

――その後は、アメリカ軍の捕虜に？

皆本：はい。向こうは紳士的にやってくれました。沖縄本島に収容所をアメリカが作りましてね、そこで収容所生活を送りました。戦友が戦死すると火葬できないから見えないように指を切って、ちょっと火をおこしてお骨にして、ガーゼに包んで、軍服の裏に縫い込んでね。私も４人か５人の遺骨を

持っていました。帰国の時は、それを持って復員局に提出しました。

戦いが始まる前、昭和19年10月の初めですか、海岸を巡察しとった兵隊が「中隊長殿、海軍さんらしい、片足が切れてる死体が漂着しました。どうしますか」と言うから「よし、俺が行く」というんで見ましたら、砲弾か何かで片足が切れていました。そして「舞水三四四」と。所属はどこか、海軍じゃないから判りませんが、私の部下に、久保慧観という浄土真宗本願寺派の広島のお寺の長男がいました。彼がおるから、今から火葬するから各部隊集めろ、というわけでやりましてね。その遺骨も、私が軍服に入れて復員局に持参しました。その後、しばらくして、金沢の佐藤さんというご婦人から「私の主人は水雷艇『真鶴』に乗っていましたが撃沈されて、私の主人だけ遺骨が届きました。これは、皆本中隊長さんのおかげです」と連絡があって。非常に嬉しかったですね。わぁ、良かったなと思いました。

――海上挺進隊第三戦隊では、何名くらい戦死されたのですか?

皆本：私らのところは少なかったですよ。ただ、私も手を負傷しましたね。浮田軍医に「先生、麻酔剤はあるんですか?」と聞いたら「もう、ほとんどありません」というので、「じゃあ、分かりました。困った人に使って下さい」って。で、私の負傷の手術・縫合は麻酔なしでやると（笑）。やりましたがね。負傷する時は瞬間的ですが、縫うとなると痛い。だけど、麻酔なしでやると言った男一匹、「痛い」とは死んでも言う訳にはいかん！という訳で、兵隊に「もうちょっと抑えろ」と。そしたら、若山という衛生曹長が「中隊長殿、麻酔なしで手術した方が、治りが早いです」と言ってくれました。復員しました時も、負傷者の手続きをすれば、傷痍軍人の手当があるけど、これくらいの事でもらう立場じゃないと。とにかく、沖縄戦であれだけ苦労しておるから、曲がりませんでね、左手。後遺症が残ってますからね。はい。

――終戦まで、沖縄本島との連絡は全くなかったのですか?

皆本：はい、最後はそうです。ただ、3月23日ですか、どうも様子がおかしいから、戦隊長に相談して軍司令部に打電したんです。そしたら「甲号戦備に準じて行動すべし」と。甲乙の甲というのは「いよいよ作戦開始」の意味です。だから、私の認識では「甲号発令」じゃなくて、「甲号戦備に準じて行動せよ」が最後の戦になってしまったと。はい。

――折角の「㋹マルレ」が自沈させられたことは、やはり残念でしたか?

皆本：これはやむを得ないですよ、あの状況ではね。あれだけ駆逐艦が遊弋して、海峡を封鎖しておれば出られないですよね。こちらも巡洋艦や駆逐艦が護衛しておれば別ですけど。出て行ったら、全部すぐに・・・。こちらは、ベニヤ板製でしょう。火砲はない。これはもう、すぐにやられると・・・。

――「㋹マルレ」は生還することが前提でしたが、実戦では体当たりするという気持ちでしたか?

皆本：はい。とてもですね、こちらが余程、シチュエーションが良い場合は別だけど、あの戦場でアメリカが、あれだけの艦艇でやってる場合にはとても生きて還る事は不可能ですね。

――特攻だと始めから覚悟されて?

皆本：ま、やっぱりですね。やっぱり特攻なんですね。

◆特攻の背景

――特攻作戦が、あの戦争で始まって、その後、終戦まで続けられた背景というのは何だったとお考えですか?

皆本：一つは沖縄戦の特色ですね。大体日本は「国土戦」という経験がないんです。私の生まれた熊本の菊池は、熊本に近いから、私の生まれた家の土蔵に官軍の弾薬箱を預かっていました。で、西南の役で薩軍が熊本城に攻めてくると、農家の人は、危ないから竹山に米俵を積んでその中で避難したという。それ以外は外征作戦だけでしょ。それで、ヨーロッパを見ますとね。ヨーロッパはたとえば、イギリスはあまりないが、フランスとかドイツとかイタリアとか、あの辺はもう国境を接しているし、国土戦の経験が豊富なんです。ところが、日本でそれが全くなくって、元寇で日本に攻めて来ましたね。この時に攻められたくらいでしょう。全く国土戦の経験がなかったっていうこと。もう一つの特徴は、沖縄戦は陸軍と海軍との戦いであると。陸軍同士の戦は、日清・日露以来、満洲とか中国などで経験を踏んでいるけど、海軍と陸軍の戦いというのは全く様式が違う。その認識が無かった。

それから日米の戦力差。アメリカが日本に来てまとめた戦略爆撃調査団報告書というのがあります。日本は負けて、もう全部オープンにせざるを得ないから全部調べ上げて、実によくまとめてあります。これを見ますと、日本とアメリカの戦力比が違いまして、特に沖縄戦の海軍力比較を見ますと、日本で沖縄戦に参加したのは戦艦「大和」、それから巡洋艦「矢矧」、それか

らあと駆逐艦8隻。アメリカは戦艦15隻、航空母艦が特設空母を入れて18隻。巡洋艦が26隻、駆逐艦が２６５隻、それから潜水艦が１３０隻です。さっきも言いましたが、豊後水道の入り口で潜水艦が網を張っていました。その他に、最新鋭の艦載機が９００機。で、沖縄に出撃した日本の陸海軍特攻機が２３９３機。昭和20年1月の日米保有の海軍機を見ますと、日本が６６５９機、アメリカは何と4万８９３機で、その上、向こうの方が性能が抜群に良い。集積弾薬が、日本は一会戦分で１万５０００トン。アメリカは２０１万６０００トンです。それで陸軍兵力は、日本は第九師団を転用したから2個師団、約10万ですね。アメリカは海兵隊を入れて上陸したのが32万。こういう状況になっとります。

それから沖縄戦の場合、戦略的意義が陸海軍で一致していなかったんです。当初、第三二軍は航空基地の設定を主任務とし、それでいいと判断した。戦いはフィリピンとか他でやる。沖縄までは来ないだろうという捷二号作戦とした。捷一号というのがフィリピン方面。捷二号が沖縄の連絡圏域。捷三号が北海道を除いた日本本土。捷四号が北東、千島・樺太付近。一号から四号の捷号作戦とし、そのうち昭和19年7月に、大本営陸軍部が本土決戦、大本営海軍部が天号航空作戦と決し、第三二軍は戦略持久とした。さっき言いましたように、飛行基地あたりを警備しておればいいというような発想でやっていた。

さっき言いました日米戦力で、海軍戦力を見ますとね。昭和16年2月、大東亜戦争が始まります前、日本が持っている海軍機が３１１６機、アメリカが３６００機です。まだ戦が始まってないこの頃はほとんど同じ位ですね。昭和17年1月、ミッドウェー作戦の頃になると、日本が60に対してアメリカが１００という比率です。昭和20年１月には、先程触れました16対１００の違いがありました。そして、日本海軍の艦艇の増減は、昭和19年、新規就役が45万トン、損耗が１００万トンです。昭和20年に内地にいた海軍兵力は戦艦が3隻で、ほとんどが燃料不足です。それから航空母艦が4隻。巡洋艦が１隻。いずれも燃料欠乏。また、生産力が違った。昭和20年、空襲を考慮外としても、前年の昭和19年に比べると50%に落ちている。生産力が落ちたのは、爆撃の直接効果が29%。爆撃の間接効果、すなわち欠勤・傷害で長久に渡る混乱が39%。一般経済状況、燃料不足、器材の老朽化、食料不足で32%。そういうところの違いがありました。

食料も問題でしたね。調べますと、昭和16年は日本人一人当たりのカロリー摂取が２０００ｋｃａｌ、アメリカ３４００ｋｃａｌ。昭和19年は日本が１９００ｋｃａｌ、アメリカは同じ３４００ｋｃａｌ。昭和20年、日本は１６８０ｋｃａｌ、アメリカ３４００ｋｃａｌ。アメリカ人に言わせると、１６８０ｋｃａｌは、入院患者が摂取するカロリーしかなかったと。これについて、思い出深いことがあります。戦後、アメリカに留学して、ワシントンの近くのフォートベルボアーにおりました。日本大使館に陸海空の駐在武官がおりますが、陸自の田中光祐一佐の所に、よくお邪魔していました。田中さんは「俺の親父も、実は大佐時代にアメリカの駐在武官をやった」と、浴衣掛けで一杯、チビリチビリやりながら話してくれました。そして、「どうして東條さんとか偉い人が、アメリカを見なかったか」と。ドイツとかイタリアとかフランスだけ見て、あっちだけしか見ていないことに問題があるということです。彼のお父上は終戦時、東部軍管区司令官であった田中静壱大将閣下。近衛師団の不祥事があったから責任をとって自決されました。

アメリカの東海岸からサンフランシスコまで直線距離で６４００㎞。そこに、世界で一番大きな会社グレイハウンドバスで、あれは時速60マイル（約１００㎞）でハイウェイを走っています。留学が終わって帰ります時に、陸軍省に頼んで、それで行くように認可をとったら1万㎞です。6月中旬頃、穀倉地帯のカンザス州、ミズーリ州あたりから両脇、小麦畑とトウモロコシの畑です。60マイルで走っていると東京から下関までの間、ずっと小麦畑とトウモロコシ。中には油田で汲み上げているのがある。ははぁ～、これはやっぱり何ですね。田中静壱大将が言われたとおりです。成る程、やっぱりアメリカという国を見てないということです。それで、さっき言いました生産力の問題は、石油でも鉄鉱石も他所から持ってこないとないでしょ。アメリカの生産拠点に日本の爆撃機は1機も飛んで行けないのに、こちらは工場が爆撃でやられる。そういう計算をしてないという点に問題が集約しておるという気がしました。

それから、さっき言った航空特攻ですね。非常にご立派な行動を部隊の方がやられましたが、アメリカの海軍大佐が言ったように、やはり性能が違うと。これは戦いにならない。だから、沖縄本島に攻撃に行かれた３２００機

の内に、私は本当に敵艦に突入した特攻機は、アメリカ側に言わせると僅少であったとのことです。洋上で果てられた方が多いと。そういう計画を立てて行かざるを得なかったという点ですね。そういう関係で、戦力を補填するために、私はやむを得ず海上・水中特攻っていうのが捻出された気がしとります。

特攻作戦で第二艦隊の伊藤整一閣下、海軍兵学校39期、秀才トップが艦と運命を共にされましたね。攻撃の陣頭に立って行っています。特攻作戦っていうのは、最高指揮官も出るべきだったと思います。私は陸自幹部学校の教育します時に、竹下正彦校長に「陸上の戦闘の教育ですけど、海軍のことも教育していいですか?」と言ったら「やれ」という事でやったのが、ミッドウェー作戦でした。ミッドウェイ作戦に参加した第一航空戦隊、航空母艦「赤城」「加賀」。この司令官が海兵36期の南雲忠一中将。後に海軍大将になりました。幕僚長が海兵41期の草鹿龍之介少将。第二航空戦隊が空母「蒼龍」と「飛龍」。「赤城」「加賀」に比べるとトン数がうんと小さい空母でした。司令官が海兵40期の山口多聞少将。

最初は艦隊作戦をやるために、魚雷とか艦艇攻撃の準備をしておったが、これを陸戦に切り替えて爆弾投下の用意をしていたら、アメリカの航空機の攻撃を受けた。そして4隻ともあそこで撃沈されたんです。それで、山口多聞閣下以下、艦と運命を共にするということで戦死されました。ところが、第一航空戦隊の南雲中将と草鹿少将は、ロープを伝って駆逐艦に移乗して生き残りました。で、これを私は、幹部学校の教育で「君らに考えてもらいたいが、君ら、指揮官としてやる場合にいずれをとるべきか。私はこちらが良い・悪いは言わん。君らの判断に任せる」と言いました。竹下正彦校長は「それでいいんだ」という事でしたが。

やっぱり、その頃からですね。日本海軍の攻撃を、これをもう少し考えるべきだったという気がします。それからミッドウェー作戦後の海戦も、新聞社などは「勝った。勝った」と報道していましたが、ほとんどやられておりました。だから、そういう状態であった時に、国土戦に近い沖縄においても、他にやるべき方法・手段がとれないという事で特攻作戦に入ったと思います。今、考えてみますとね、果たしてそれで良かったのかどうかという気がしております。特攻作戦に持ち込んだということは最高統帥あたりは、もうちょっと考えるべきだったという気がしております。

――皆本さんも特攻艇の指揮官でいらっしゃいました。皆本さんご自身にとって特攻とは何だったのでしょう?

皆本：攻撃の当事者としては、命のまにまに勇猛果敢に健闘すべきであると。ただ、最高統帥とかなんかの場合、それが果たして妥当であったかということは、戦後、幹部学校の教育に携わったので、それをちょっと付言しておきました。

――戦争中は特攻が当たり前のような感じでしたか?

皆本：そうですね。あの頃は「一億特攻」ですからね。

◆海外から見た特攻

――特攻について、今でもいろいろと語られていますが、皆本さんから見ると間違った意見も多いと思います。戦争を知らない世代の日本人や海外の人たちに特攻を、どのように伝えたいとお考えでしょうか?

皆本：特攻という行為に非常に感銘を得たという人がいることは事実です。例えば、アメリカの歴史家で伝記作家のスティーヴン・アンブローズ(Stephen Edward Ambrose) 博士と会う機会がありました。アンブローズ博士は、皆さんご承知のノルマンディー作戦を題材にした映画『プライベート・ライアン』の軍事アドバイザーをされた方です。本当はスピルバーグ監督と会う予定でしたが、どうしても都合がつかないということで、アンブローズ博士が私に会いたいと。平成13年3月19日、アンブローズ博士が来まして、新宿のセンチュリーハイアット・ホテルで3時間、話をしました。いろいろ話しておりましたら「日本の特攻作戦についてどう思うか?」と聞くので、「あなたは会津若松の白虎隊を知っているか?」と言ったら、ちょっと解らなかった。それで、非常に英語に堪能な女性が、一生懸命に説明したら「わかった」というわけで握手をしましてね。非常に日本の、それは大事な事だと。私は特攻隊に行く人はそれだったという気がしております。

それから、先ほども申し上げたアメリカ・フレデリクスバーグで行われた「太平洋戦争・沖縄シンポジウム」でのことです。終わって帰る時にビル・ボールズ退役空軍大将が近寄って来まして、涙を浮かべながら「皆本が戦った沖縄の島で、３１５名の老若男女の人が島を守るべく果てていかれた。私が生まれたのはサン・アントニオだ」……サン・アントニオはテキサス州の南部にある人口１３０万人くらいの都

市です。有名な「アラモの砦」の舞台です。１８３６年、テキサス住民がメキシコと独立戦争をやりました。そして、アラモの砦を守っていた全員が城を枕に討ち死にしました。で、ボールズ退役空軍大将は「皆本、私はサン・アントニオ生まれだ。だから、アラモの砦で果てた先輩の伝統を私は継続していきたい」と。そして「沖縄の島で果てられた方々と、サン・アントニオでアラモの砦で果てられた人は全く同じだ。命を賭けて郷土を守る。こういう事こそ、世界平和を本当に担えると思う。ありがとう」と涙をボロボロ流して……私は、非常に感銘を受けました。

――戦後も沖縄に行きましたか？

皆本：はい。慰霊祭にしょっちゅう行っておりましてね。それで、平成17年12月15日、キャピタル東京ホテルで、イギリスのサー・マックス・ハッシングス博士に会いました。この人は「ナイト」の称号を持つ有名な学者です。ハッシングス博士は沖縄戦、水上特攻の体験を聞きたいということで会ったんですがね。会う前に靖國神社に行きまして、英文の資料を集めました。それで靖國神社の話をしたら、博士が「すでに私も靖國神社に参って来て、英文資料を持っている」と。私は、瀬島龍三さんが浄土真宗本願寺派の全国の門徒総代をやられていた関係もあって、地域の門徒総代をやり、東京教区の教区会議員でした。それで博士に、御本山から「浄土真宗」と「親鸞」という英文の厚い本を持って来て差し上げましたら、喜んで受け取ってくれました。そして、別れる時に、掛けてあったコートを持って来て羽織らせて頂いたら、敬礼をしてくれましてね。

だから、やっぱり、日本の学者の先生方も、命を賭けて守るという行為を善意で解釈してやって戴きたいと。大江健三郎とか、あんな連中なんかに汚染されているみたいな気がします。平成18年11月27日に、ダニエル・キングさんという方が「沖縄戦の体験を聞きたい」ということで来ました。彼は若い時、10年間日本に住んでいたから、「今日は日本語でいいよ」と言われて話しましたが（笑）。こういう方々と接しておりますが、当時の日本の「いざという時に戦った」。これは非常に評価して頂いておると、私は芯から思っております。

◆沖縄集団自決冤罪訴訟

皆本：終戦50年の時ですかね。渡嘉敷島で慰霊祭がありますから行ったら、ＮＨＫの那覇支局の人がスタッフ３人を連れて取材に来ました。彼に会う前に、沖縄から私の自宅に電話が来ましたが、電話ではやっぱり、間違ってとられたり、説明が不足するので、前の日に那覇のホテルに泊まるから、資料を作って説明したら一所懸命、勉強していました。で、当日、スタッフを連れてきて撮影をやってくれました。

島の小学校の講堂で、村主催の歓迎会の大祝宴がありました。向こうのおばさん連中が着物を着て沖縄の踊り、それから同行した私の家内なんかも一緒に踊る。それを撮影しましてね。知らなかったのですが、その晩、ローカル放送で流して、翌日、全国ネットで放送されました。沖縄で戦った軍人と島の人が一体になってやっているということでね。で、彼とは何回か東京で会っておりますが。だから、ＮＨＫには色々、問題なんかあるけど、そういう素晴らしい人もおるという事で感じております。

それから、さっき言ったように、復員した時、遺骨をガーゼに包んで持って帰り、全国を回りました。鹿児島県の田舎に行って、駅に降りたら、お父さん・お母さんはじめ、皆、紋付を着て夏の暑いのに出迎えて頂きました。それから、船舶団長の大町少将を護送した中島一郎少尉が埼玉県の入間出身なんですよ。彼は出撃する時、持ち物を全部、舟艇のハッチに積みました。何もないから遺骨の代わりに、彼が訓練に励んだ海岸のサンゴ礁の綺麗な石を持ち帰って。それで、ご両親に手紙を出しましたら「ありがとうございます。頂きます」と言われた。

当時の国鉄は乗り継ぎ、乗り継ぎでしょ。弟に「一緒に来い」と言って、まず広島で乗り継いで。3回かな、乗り継いで行きましたらね、次の列車が出るのを待っとったら、車掌さんが来て敬礼をするんですね。で、「どうぞ、ご案内します」……おかしなこと言うなと思ったら二等車に案内するんです。今のグリーン車。で、「ここにお掛けください」って言うから、「ちょっとお待ち下さい。私は全国を、こうやって遺骨を頂いて、ずっとお届けして回るから、旅費も節約して行きますから二等車は無理です」って言ったら、「いや、どうぞ」と言うんです。で、4回か5回乗り換え、乗り換えで行きましたが、私と弟は、検札を全部免除してもらいました。涙が出ましてね。国鉄の偉い方に礼状を書きました。「戦に負けたといえど国鉄精神！　これは規則違反かもしれんが、そのご厚情は生涯忘れ得ません。」

それから鳥取に行った時は米を持っ

て行きました。米なしでは旅館も泊めない時代だったんです。その米を警官が見て「何だ」と。「米だ」と答えたら「何！闇米か！」と言う。「ちょっと待ちなさいよ。私たちはそういうんじゃない。遺骨を持って私の部下の所に行く」……それで、彼が報告したら職場の警部補が服装を着替えて「私がご案内します」というわけ。戦に負けたと言いながら、やっぱり日本の素晴らしさは続いていると感じました。

　それで、中島一郎君のところにご遺骨を持参して行きましたら、たいへん喜ばれて、「皆本さん、私は埼玉県の狭山茶の連合会長やってるが、お礼に、熊本へ種茶の実を送るから植えてください」とありがたい思し召しをいただきました。熊本の菊池で、私の弟や従兄弟のところで製茶をやっとりますがね。で、平成17年に「特定非営利活動法人　埼玉県国民保護協力会」を立ち上げました。いざという時、テロとかなんかが発生した場合、第一線で戦うのは自衛隊・警察・消防だろう。それ以外の非戦闘の老若男女の方々を救うのは誰がやるんだ。これを我々はやろうじゃないかということで作りましてね。今、５００人以上の会員がおります。私も高齢だから後輩に譲りました。その挨拶状を上田知事（埼玉県）に書きましたら、上田知事から丁重な手書きの礼状が来ましてね。

――戦争が終わった後も、渡嘉敷島のことでいろいろな人とのつながりが出来たのですね。

皆本：曽野綾子さんも、沖縄の集団自決の真実を長年にわたり執筆されて、援助されて深謝申し上げています。家内も私も誕生日の時に僅かずつの金を送っています。あの人はアフリカ難民の救済もやっておられますから。

――戦隊長だった赤松嘉次さんとは、戦後もずっとお付き合いを？

皆本：はい。病気で亡くなりましたが、精神的な苦痛があったんでしょうね……。沖縄集団自決冤罪訴訟（注３）で感じたことがあるんです。裁判のために、大阪から私の家に弁護士が来て打ち合わせなどをやったんですが、第１号の証人喚問に出てくれと言われたから、法廷なんか経験ないし、あんなところに行ったら目が眩むような気がするって断ったんです。でも「皆本さん、出てくれ」と頼まれて出ました。40分間は主尋問で、こっちは弁護士との打ち合わせ通り。それに続き、40分間の反対尋問になりました。向こうに３人いて、３人のうち２人は親父さんと息子さんが弁護士。で、いろいろ質問された中に「皆本証人のところは、３１５名が集団自決されたが、皆本証人の奥さんはどうしておられましたか？」というのがあった。何を聞いているか私には理解がいかん。ははあ、と思ったから「じゃあ、申し上げます。あなた方は司法試験に合格して弁護士になっておられるが、もう少し兵役制度とか軍隊っていうことを勉強されてからのぞんでいただきたい」と言いました。よっぽど「馬鹿！」と言いたかったが法廷ですから。

　郷友連盟などで講演するんですが、どうも、戦前の法律で行動しているのに戦後の法律で裁くような弁護士・裁判官がおる。平安時代の事案を今の法律で裁くような馬鹿な裁判官とか弁護士がおるからいかん。一番大事なのは兵役制度だ。世界のこれだけの文化・国家で兵役制度がないのは日本だけだ。徴兵制度じゃなくて兵役制度は作らにゃいかん。兵役制度がないと誰も無責任になって、喧嘩した場合に「自分だけは助かる」というような考えが流行したら日本の国はどうなるかということを、盛んに言っています。

　それから、私の親しい方が８月６日の広島の慰霊祭にみえましてね。共同通信でワシントン支局長をやっていた松尾文夫さん。松尾さんが書いた本に『銃を持つ民主主義―「アメリカという国」のなりたち』（小学館）というのがある。松尾さんは終戦50年の時にドレスデンの和解という事を書いたりしておりました。東ドイツのドレスデン。１９４５年２月、ドレスデンは無差別爆撃を受けて、非戦闘員が３万５千人死んだ。軍人、軍属が戦死するのは、これは任務上やむをえん。ですが、非戦闘員もそれだけ死んだから慰霊祭をやったら、イギリスからは女王陛下の代理でケント公爵、アメリカから参謀総長が列席しました。それで、松尾さんは日本で、なぜ、広島・長崎でやらないかと。一番来てもらいたいのはアメリカの大統領だということ。私らもそう思います。オバマ大統領が日本に来て、広島・長崎に参ってもらいたいと思います。東京大空襲では、帝都を低空から焼夷弾爆撃をし、隅田川をはさむ下町一帯が一夜で灰塵となりました。

――昭和20年３月10日の……

皆本：はい。ルメイ少将がＢ29を指揮して、軍隊のいない下町を攻撃したでしょ。そして広島、長崎。それで日本はどうしたかっていうと、佐藤栄作総理は空軍大将になったルメイに勲一等旭日章を授与しています。航空自衛隊創設の貢献・功労者ということで勲一等旭日章でしょ。だから、松尾さんと

いつも話しているんです。「何たることだ、日本は！　ちゃんと世界に公言する必要がある」と。アメリカの作家ジェラルド・アスター氏が「降伏促進のために原爆を落としたと思うか？」と言うので、「ノー！」と言って、これは20世紀の人類の破滅だということを書きましたが。アメリカの大統領か参謀総長あたりが来て詫って、その後、日本の総理がパールハーバーに行くべきだと私は思います。

◆武士道精神を重んじたニミッツ元帥

――右の胸に着けていらっしゃるバッジは何ですか？

皆本：これはですね、ニミッツ元帥の基金バッジです。さっき言いましたように、あの人は沖縄にはいなかったんですね。太平洋方面、全軍の指揮官だった。それで、どういうものか、私等の島に医薬品や衛生材料を置いていってくれたからたいへん救われましてね。ニミッツは海軍の士官候補生の時に遠洋航海で日本に来た。で、宮中にお呼ばれしてお茶会に出ました。その時に来たのが東郷平八郎元帥でした。それでニミッツ少尉候補生は東郷元帥に直接声をかけて。それでニミッツは東郷元帥の武士道精神に傾倒しまして、東郷元帥の国葬の時には「オーガスタ」という戦艦の艦長でした。東郷さんが舞鶴の鎮守府司令長官時代におられた官舎をモデルにした建物をニミッツ記念館に造りました。庭にある「一心池」、これも舞鶴と同じ形で、そして泳いでる魚はみんな緋鯉ですよ。日本の鯉です。その横に植えてあるのは孟宗竹。アメリカにない。日本海軍の先輩方とアメリカの人が尽力して完成したものです。

私がニミッツさんに感動したのは、お父さんが早く亡くなられて、おじいちゃんに厳しく鍛えられています。どうかすると引っ叩かれたと。で、日本の武士道精神で俺はやるということで育ってきたと。だから日本の武士道をよく知っておられます。それで最後は母校の海軍兵学校で、卒業する学生のパレードの観閲官を頼まれましたが、「そういうのには出たくない」と辞退しました。他の同期生のご夫妻なんかと一緒にレセプションに出ておられますが。それで、墓地はアーリントン墓地に用意しますと言ったら「ノー」と言って、一般の兵隊さんが納まっている墓地に入っていかれました。素晴らしいと思いますね。日本では、何か売名的にやったり、地位を尊重してくれというようなことが先に出ますから。

私はいつも思うんですがね。日本が日露戦争に勝った時には日英同盟があった。その頃のイギリスには武士道精神があった。やっぱり、日本が生きていくためには武士道精神のある人と手を繋がにゃいかん。だから、マッカーサー元帥、あの人は私のいた工兵出身の先輩になるけれど、私はマッカーサー元帥より、ニミッツ提督の方が武士道精神のある人だと思います。こういう人と早く手を繋いでおけば、日本はあんな窮地に陥らなくてすんだんじゃないかと。やはり武士道精神こそ、私は一番大事なことだという感じがしております。

――皆本さんが考える「武士道精神」とは、どのようなものなのでしょうか？

皆本：例えば、牛島満閣下は、江戸時代の儒学者・佐藤一斎の書いた「言志四録」を若い時から一所懸命勉強していました。だから、他の人と動きがまったく違いました。恩賜の軍刀を頂かれて陸大を卒業されて、進んで母校の鹿児島一中の配属将校をやられました。普通だったら、配属将校は退役する前の人しか行かないんです。その後、都城の歩兵第二三連隊の連隊附中佐でおられたら、師団長が、もったいないから参謀本部か何かの参謀にしたいと言ったら、大尉・少佐時代に参謀本部勤務の経歴がないと難しいということで下関要塞司令部の参謀に行かれました。それから後、陸軍省に行かれた時に、陸軍次官から質問があったら「その事に関しては部下をして報告させます」って言ったら、その次官閣下が「馬鹿野郎！」と怒鳴ったといいます。で、帰って来られて「やあ、私より君達のほうが詳しいから詳しい人に報告させる」というような事で、そうやってこられました。で、二・二六事件の直後に歩兵第一連隊長になりました。第一連隊は二・二六事件の蹶起将校の主体でした。最初、他の人を第一連隊長に予定していましたが、ある人が「いや、あれだけの事件を起こした第一連隊だ。だから、やっぱり牛島を連隊長にしてくれ」と言ったそうです。で、牛島さん、やりましたね。第三二軍の軍司令官を決めるときも、同じような理由で牛島さんになったと思います。

他にも、沖縄師範学校長の野田貞雄さんは、昭和19年暮れか昭和20年の初めに文部省で会議がありまして、会議が終わったら「先生、もう沖縄に帰れる便がありませんので、他の要職にします」と偉い人に言われたら、野田校長はうんともすんとも言わず立ち去って、市ヶ谷にあった陸軍省に行きまし

た。「生徒が待っている。私は帰らなくちゃいかんので」と言って、陸軍の爆撃機で那覇に戻りました。そして、戦が始まります頃から家に帰らんで、師範学校の生徒と一緒に起居を共にされて、最後に師範学校生が摩文仁の方に下がって行きます時に、それを見送って焼け跡の校舎で自決して果てられました。

　私はいつも思いますが、明治5年に「邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」という日本の教育の伝統的な精神。明治6年に武士道を根拠に作り上げた帝国陸海軍の軍隊。これがやはり、沖縄において開花したと思います。これを絶やしちゃいかんと。

　私が市ヶ谷で幹部学校の教育をやっていました時に、すぐ前に戦史室がありました。戦史室長が西浦進先生でした。西浦さんは、服部卓四郎・堀場一雄とともに陸士34期の三羽烏と称されましたが、その筆頭が西浦さんです。西浦さんの書いておられる中で感銘したのが「上級者の不勉強」。陸軍の場合、中佐・大佐になってからの勉強が足らんと。で、観念論だけで動いておると。歩兵操典を作ったが、これは戦場とか部隊経験のない者が起草しておると。こういう点で勉強が足りなかったのが、日本を追い込んだということを西浦先生が書いておられます。西浦先生から毎日、指導を受けました中で「おい、皆本君。帝国陸軍は視力1・0以上ないと士官学校に採用しなかった。視力0・8や0・7の人は士官学校に入れなくて陸軍経理学校に行った。経理学校に行った人と士官学校に来た人の頭脳を比べると、経理学校に行ったのがはるかに上だった。これは、たいへんな損失をやってる。返す返すも残念だ」ということがありました。私も防衛庁におる時、防衛大学校の採用の身体検査で、視力はいくつだ？と聞いたら1・0だという。昔を踏襲していているのにこれではいかん！と。西浦先生から教わっていたから0・8まで下げようと。部下を使って、運輸省で民間ジェット・パイロットを調べさせたら、0・6まで下げていましたよ。コンタクト・レンズを使っていますからね。

　で、海と空の課長たちを集めて言ったら「皆本さん！　あなた、眼鏡かけた戦闘機のパイロットを、見たことあるか？」……海上の課長は「艦上に立って潮風を受けると、眼鏡が乾いて見えなくなる」と。だから当然ダメだ、ということで内局に行ったら、教育課長、人事第一課長、人事第二課長、みんな眼鏡をしてるでしょ（笑）。この人たちと一緒に変えてやろうと決意してすすめましたよ。航空が「とにかく視力を落としたら、パイロットに差支えがある」と言ったら教育課長が……後に事務次官をやって防衛大学校長もやった夏目晴雄さんが「何だ！　防衛大学校はパイロット養成学校か！　そうしないために俺は苦労して航空学生制度を設けたんだ！」と。で、私が多数決でいきましょうと言ったら4対2ですよ。私が目の視力改正の発案者。内局の人3人と安堵した。それで嬉しかったのは、昭和52年3月15日、京都大学から防衛大学校長になられた有名な猪木正道先生から素晴らしいトロフィーを頂きましてね。その晩は浦賀でご馳走になりました。

　また、西浦進先生から聞いたのは「昔の明治時代は幅があったよ。陸軍大学校に合格したら、支援兵種の工兵と砲兵は3カ月遅れで入校して良かった。その間、歩兵とか騎兵の人なんかは普通学の他にそういうことも勉強させた」と。その後は十把一からげでしょ。やはり、西浦先生が言われるように勉強が足りなかった。そのままやってきたところに、作戦運用要諦に問題があった。だから時間があれば、靖國偕行文庫とか皆行社に置いてある西浦進先生の本を読んでほしいですね。

◆若い人たちへ贈る言葉

——はい。読ませて戴きたいと思います。その他に若い人に何か伝えたいことがあれば。

皆本：特攻隊経験者として感じましたのは、まず、執行者の立場ですね。そして、目的と可能性を冷静に検討し、自己の勢いを自制すべきであると。何か、勢いに任せてやるという事は、上に立つ人は絶対やっちゃいかんと。もう、これをしみじみと感じました。

　それから、チャーチル首相の就任の時の下院での第一声、「私が捧げることができるのは血と苦労と涙と汗だけである」。ブッシュ大統領は就任の演説で「私は、あなた達が観衆や従僕でなく、市民であることを求めたい」。エール大学のスタンバーグ博士は「秀才知より成功知へ。無力な秀才知から活力ある成功知能へ」。そして、「民主主義とは守ってもらうものでなく、守るものだ」と言っています。これは、さっきちょっと触れました松尾文夫さんの『銃を持つ民主主義』にある言葉で非常に感銘を受けました。私は、歴史なき理論は空虚で、理論なき歴史感は盲目であると考えています。部隊の

先頭に立っていく当事者はさっき申し上げました通りと考えます。

60年ぶりにアメリカ歩兵第77師団のプライベート・ファースト・クラス（陸軍一等兵）の方に会って別れる時に、「必要あれば、私は年をとっていても、自転車に乗ってでも竹槍を持って行くんだ」ということを言いましたら、その場にいたテレビ局と新聞社がそういう風に纏めて報道してくれました。やはりですね、人にやらせん、自分がやらにゃいかんな、という感じがしています。

おかげさまで私は30年近く、環境関係の会社で大事にして頂きましたが、創業者の会長が「皆本さん、新入社員に何か教えてくれますか」と言うから、「諸君、入社おめでとう。君たちに一言、言いたいのは、会社に来て挨拶するのは社長は後でいい。トイレの掃除をしているおばさんに頭を下げて、ありがとうございますと言え。それができるようになったら会社の役に立つ」と簡単にやりました。というのは、トイレの掃除をしている人なんかは、ご主人がいないとか、難儀しながら食っていくために一所懸命頑張っている。そういう人ほど大事にすることが大切だと。で、私もバスなんかで乗りますとね、降りるときに「どうもご苦労さんです」と言ってね。やっぱり、それが大切だという感じがしております。

それからもう一つ。代表的民主主義国家の日本には、やはり、兵役制度……徴兵制じゃなくて兵役制度がないと……やはり皆が均等に国防の意識、その負担を感じないという気がしています。今度、何でしょ。インド洋の給油を引き揚げるなんてことを言っている。そんなもんじゃないな、っていうことです。

――今日は貴重なお話をありがとうございました。

（……了……）

※注１・最後の連合艦隊司令長官・小沢治三郎

アメリカ軍が慶良間・沖縄本島に上陸した頃、小沢中将は軍令部次長だった。沖縄戦末期の昭和20年５月29日、連合艦隊司令長官（海軍総隊司令長官と海上護衛司令長官を兼任）に就任。終戦までその任にあった。

※注２・エリソン・オニヅカ中佐

アメリカ空軍の軍人。最終階級は空軍大佐。日系アメリカ人最初のアメリカ航空宇宙局（ＮＡＳＡ）の宇宙飛行士。１９８６年１月28日、スペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故で殉職。

※注３・沖縄集団自決冤罪訴訟

大江健三郎著『沖縄ノート』（岩波書店）の中で、沖縄戦末期、軍の命令によって座間味島、渡嘉敷島の住民が集団自決を強いられたという記述があり、これを事実無根であるとして、元海上挺進第一戦隊長・梅沢裕氏と第三戦隊長・赤松嘉次氏の弟にあたる秀一氏が原告となって、大江氏および出版元の岩波書店に名誉毀損による損害賠償、出版差し止め、謝罪広告の掲載を求めて起こした裁判。第一審、第二審とも名誉毀損の成立を否定し、原告の請求を棄却した。原告側は最高裁に上告したが、２０１１年４月11日、最高裁第一小法廷は上告を棄却。原告側の敗訴が確定した。

皆本　義博（海上挺進第三戦隊第三中隊長）軍歴

1922年（大正11年）	熊本県生。
1941年（昭和16年）４月	陸軍予科士官学校入校。
1942年（昭和17年）10月	陸軍士官学校入校（陸士57期）。
1944年（昭和19年）４月	陸軍士官学校卒業。
1944年（昭和19年）７月１日	陸軍少尉任官。
1944年（昭和19年）９月	海上挺進第三戦隊第三中隊長。
1944年（昭和19年）９月下旬	沖縄・慶良間諸島の渡嘉敷島に到着。
1945年（昭和20年）３月26日	米軍の慶良間侵攻により、㋹マルレの自沈命令が出される。
1945年（昭和20年）３月27日	米軍が渡嘉敷島に上陸開始。
1945年（昭和20年）３月28日	渡嘉敷島民315名が集団自決。
1945年（昭和20年）８月23日	渡嘉敷島で武装解除。

劇団夜想会公演『俺は、君のためにこそ死ににいく』の公演を終えて

倉形　桃代

当顕彰会会報『特攻』第87号で紹介した劇団夜想会の公演「俺は、君のためにこそ死ににいく」は、連日大盛況のうちに幕を下ろした。余震が続く中、本番中に大きな揺れが起きるかもしれないという心配があったが、英霊のご加護を賜ったのか、一度も余震に遭うことはなかった。

公演が始まる前、毎回野伏翔監督が舞台に出て来られ、余震の状況により公演の中断・中止がある旨、ご挨拶をされた。被災地の方々へのお見舞いと、昼夜を徹して行われた救助活動に当たっている方々への労いの言葉を聞いた観客の中には、これから始まる66年前の物語に、現在大きな国難に直面している日本の状況を重ねて観た方も多かったと思う。演じる役者の方々も、それぞれの想いを抱いて舞台に立った。その一端を、紹介したいと思う。

●『今　願うこと』　岡安淳子

（星組・鳥濱礼子／トメの次女役）

この作品に出会ったのは、今から3年前。九段下にある靖國神社の遊就館前広場に特設された野外舞台での奉納劇に出演したことに始まります。千秋楽の日は荒天となり、雨が滝のように流れ、雷が鳴り、観客には雨具が配られた中での公演でしたが、誰一人、途中で席を立つ人はいませんでした。私自身、劇が終わっても涙が溢れて仕方がなかったことを、今でも鮮明に覚えています。

そして今から2年前、私が一番心に残った役を監督から頂いて、再び舞台に立つことになりました。

時は昭和19年10月12日、鹿児島県知覧。皆様は特攻隊を知っていますか？それは飛行機の胴体に、250キロ爆弾を積んで、片道だけの燃料で基地を飛び立ち、アメリカの艦隊目掛けて体当たりで突っ込む。まだ夢や希望に満ちた17歳から22歳位の若者が。

出撃をするドキュメンタリー映像を目の当たりにした時、私は恐ろしく感じ唖然としてしまい、涙すら出てきませんでした。

この舞台は、知覧にできた飛行場から飛び立っていった特攻隊員と、彼等から『お母さん』と呼ばれていた富屋食堂の女将・鳥濱トメさんの実話を基にしたお話です。私が与えられた役は、トメさんの次女・礼子さん。

彼等は何故、自分の命を懸けてまで国を守ろうとしたのかを知るべく、当時飛行場があった知覧に足を運びました。知覧特攻平和会館には、沢山の少年達が、自分を生んでくれた父・母に感謝し、家族への思いを記した遺書や手紙が置かれていました。目に涙をためながら、一枚一枚必死になって読みました。何枚も何枚も・・・。

トメさんが営んでいた軍の指定食堂があった場所にも足を運びました。そこは今『ホタル館』という名に変わり、少年達がトメさんに託した形見や、検閲されていない手紙がありました。トメさんの長女・美阿子さんの息子さん・明久さんにお話を聞かせて頂きました。明久さんは言いました。少年達の本当の心は、生きて家族と一緒に暮らしたい。死ぬのが怖いんだと。でも少年達はトメさんに言ったそうです。「おばちゃんや大切な家族・皆に幸せに暮らして欲しいんだ。僕が頑張るから長生きしてね」と。

東京では、礼子さんの息子さん・赤羽潤さんともお会いして、沢山のお話を聞かせて頂きました。靖國神社の遊就館にも何度も行き、特攻隊員の本当の想いが少しづつ、少しづつ体に入って来るのを感じました。沢山の涙・熱い想いを胸に精一杯演じさせて頂き、無事に幕を閉じることができました。

再びこの舞台に立つことになり、不安よりも、また「伝えることが出来るのだ」という喜びで胸が一杯でした。思い入れのある私の大切な大切な役・鳥濱礼子さんを、監督はまた演じる機会を与えて下さいました。2年前の熱い想いが、体中に溢れてくるのを感じました。以前と同様、靖國神社や遊就館に何度も足を運び、礼子さんの息子さん・潤さんにも改めてお話を聞かせて頂きました。いつも特攻隊員の前で、笑顔を絶やさなかった礼子さん。この舞台の中で、太陽の様な存在なのかもしれません。愛する人達のために死にに行く特攻隊員を、母トメさんと姉美阿子さんと共に支え、触れ合い、知覧高等女学生としてご奉仕なさった礼子さん。とても強い女性だったと思います。

3月初めに顔合わせを終え、台本の読み合わせをして、次の週から稽古が始まるという、その時・・・3月11日、関東東北沖地震が起きました。東北では、津波で多くの人・家が流され、一瞬にして沢山の命が失われました。

66年前、特攻隊員が命を懸けて護りぬいた私達の国・日本に恐怖と不安が満ちる中、今も毎日のように余震が続いています。こんな時、何も助けになれない自分の無力さに腹が立ちました。稽古も、役者は全員揃いませんで

した。皆、それぞれ自問自答を繰り返しながら、今できることを全力で精一杯やる。戦争時代に生きた、強く逞しい人達の想いを観に来てくださるお客様一人ひとりの心に届くよう、使命感を持って努めよう！ひとり・ふたりと役者が稽古場に集まり、千秋楽・最後の最後まで、誰ひとり諦める事なく、全力で駆け抜けることができました。強く願った想いは、一つになり、沢山のお客様に全身全霊を籠めて届けることができました。観に来て下さったお客様、本当に有難うございました。心からの感謝の気持ちを贈ります。

今現在、関東東北沖地震により、沢山の方々が毎日涙をこらえながらも必死に生きています。原発の恐怖に耐えながらも、命懸けで作業をされている方々。正直、言葉が見付かりません。感謝いたします。

食物もろくになく、明日生きていけるか分からなかったあの時代。どんな時も笑顔で、互いに支えあい思いあった当時の方々の想いから、私は沢山のことを学びました。観に来て下さったお客様も、今現在の状況を重ね合わせ、涙を流された方も沢山いらっしゃいました。故郷を愛し、相手を思い遣り、命を懸けて戦った特攻隊員。戦時中に支えあった当時の人達の純真で温かい心。日本人の誇りだと思います。

一人の力は微力だけど、皆で力を合わせれば必ず乗り越えられる。どんな時も希望を捨てず、皆で支えあって生きていきたい。私達日本人なら必ず出来ると信じています。それが未来への、自分への約束・心からの願いです。どうか皆さんも、特攻隊員の方々の想いを忘れないで下さい。私自身、これからもずっとずっと語り継いでいきたいと思います。

沢山の人達への感謝と平和への祈りを籠めて・・・。

●『特攻隊員を演じて』　中田洋介

（星組・特攻隊員／久野周作軍曹役）

僕が舞台を始めて10年余り。今回の作品程、舞台上で役に入り込めた事はありませんでした。

今回、僕の中で決めたテーマがありました。「芝居をしない」という事です。舞台は虚構の世界です。「作りモノ」の中で進んでいくストーリー。でも今回の作品は、あえて「芝居をする」のではなく、ドキュメンタリーのように真実の中に生きる事を大事にしました。常に本気で生きて、ぶつかって、自分の行動に嘘があってはいけないと心に誓いました。

陸軍軍人としての「久野軍曹」という役と本気で向き合うきっかけとなったのが、本読みの後に行われた基本教練でした。動きや心構えを教えて頂いた時、僕の中に「特攻隊員」として本気で生き抜こうという気持が生まれました。そして「遺書を残す」という初めての体験をして、自分自身の覚悟も強くなっていきました。「自分は何の為に死ぬのか、誰の為に特攻をしに行くのか」が明確になり、より強く作品の中で生きる事が出来る気がしました。

僕は個人的に役作りとして、当時の音や匂いを感じられるように、ハーモニカを吹く事を決め、様々な童謡や軍歌を毎日練習する事によって、手や耳や目など五感で役に入って行ける様にしました。演出の野伏監督が、作品の中に僕の案を採り入れて下さったので、ハーモニカの出番がない時でも、いつもポケットの中に入れていました。ハーモニカは遺品として残さずに、最後の特攻まで連れて行く事にしました。

初日を迎えて、役名の「久野周作」を演じているのではなく、一人の特攻隊員として、舞台上で存在する事が出来ました。不思議な感覚ですが、自分はあくまで戦争を知らない世代の日本に育ち、自我もハッキリしているのですが、舞台上で仲間達を見ていると、自分がこれから特攻をするという気持ちに何の迷いも持たず、最後の瞬間までいられました。特攻隊を送ってくれたトメさんや、女学生の歌声や温かさに自然と涙が流れ、出陣式では、仲間と交わす一言一言が嬉しくて大切で人生の最後に約束した「靖國神社で会おう」の一言が心の奥底まで響きました。

今はただ、この舞台を通じて戦争について少し踏み込んで調べて知った、僅か66年前の日本で戦った人達、日本を守った人達が本当に素晴らしく、心優しく強い人達だったんだと知ることが出来た事。そしてその後、何十年もかけて今の平和な日本を築き上げて下さった日本人の皆様に感謝していくと共に、この史実を新しい世代の日本人に伝えていきたいと思いました。

戦友達と『同期の桜』を唄う久野軍曹（写真中央）

知覧・特攻の母鳥濱トメの演劇「俺は、君のためにこそ死ににいく」を観劇して

会員　赤羽　潤

　鹿児島県知覧町。当時の飛行場跡地に、昭和30年、特攻観音堂が建立されました。トメは1年365日、夏の暑い日も冬の寒い日も毎日、特攻観音堂に通い手を合わせておりました。参拝が終わると特攻観音堂の階段にちょこっと座り、お参りに来られる方に当時の特攻隊員の話をしていました。

最初の知覧特攻平和観音堂で祈りを捧げる鳥濱トメさん

　石原慎太郎さんは「知覧の特攻観音堂に語り部・鳥濱トメさんが居る」という話を知り、トメに特攻の話を聞くために知覧まで来ました。慎太郎さんは当時は作家でした。トメはマスコミ関係者を嫌っていました。戦後に、トメが記者に話した事と全く逆の事を書いて記事にされてしまったことがありました。戦後間もない頃なので仕方ないのかもしれませんが、それ以降、トメはマスコミ関係者に話をしなくなりました。トメとしては作家も一緒な訳で、慎太郎さんにも「私はそういう人に話はしないのですよ」と言って追い返していました。しかし慎太郎さんは何度もトメの所を訪れ、話を聞かせて下さいとお願いをしました。トメも除々に心を開き「じゃあそこに座んなさい、話を聞かせてあげるから」と話をする気持ちになったようです。

　慎太郎さんは、やっと話が聞けると思い、最初はあぐらをかいてトメの話を聞いていたそうです。しかし話が半ばを過ぎた頃には正座をし、手にはハンカチを握り締め、目からは涙を流してトメの話を聞いていたそうです。

「慎太郎さんは、死んで行ったあの子達と同じ目をしている」

　トメも人間ですからいつかは死にます。自分が死んだ後、この慎太郎さんなら私の代わりに語り部をやってくれるのではと思い、多くの特攻隊員の話を聞かせたそうです。

　慎太郎さんは語り部ではありませんが、それよりもすごいです。

　最初は「俺は、君のためにこそ死ににいく」を映画にした、そして今回は演劇として多くの方々にトメの目線で語り伝えてくれました。トメが慎太郎さんに託した「語り継いで欲しい」と言う願いは、映画や舞台を通して果たされたのではないかと思っております。

　3月11日に起きた東日本大震災で被害を受けた東電福島第一原発に冷却用の水を放水した東京消防庁の決死隊の皆様に、石原慎太郎東京都知事が「皆さんの家族や奥さんにすまないと思う。ああ、もう言葉に出来ません。本当に有り難うございました」と涙を隠さず深々とお礼をした。その涙はきっとトメの前で流した涙と同じであったろうと、私は思います。

　今回「俺は、君のためにこそ死ににいく」の軍事訓練を行って下さったのが、倉形ご夫妻（寛・桃代）であります。トメが非常に可愛がっていた方々です。

　昭和56年に桃代さんがトメに会いに知覧までいらっしゃいました。まだその頃の知覧は田舎町で、通りの路地に入ると道はジャリ道、辺り一面が薩摩芋や知覧茶の畑に覆われて観光客も今のように来られる町ではありませんでした。

　トメが特攻観音堂のお参りを終え杖をつきながら帰って来ます。桃代さんの側に座り「お菓子食べるかい?」と、奥の茶箪笥からお菓子を取り出し、桃代さんとお菓子を食べながら「この知覧は、特攻隊が飛び立った町なのよ」と当時の特攻の話を語り始めます。

「朝鮮出身の光山さん（光山文博少尉／第51振武隊悠久隊／昭和20年5月11日戦死）は私が本当に可愛がった子なのよ。出撃の前日に光山さんはねえ、小母ちゃん僕は朝鮮人です。最後に自分の国の歌を歌ってもいいですかと言い、アリランを歌ってくれたの。私も美阿子も礼子も一緒にアリランを歌い泣きました。光山さんの頬には涙が伝って、それを隠そうと自分の帽子を目深にかぶって歌い続けました」トメは涙を流しながら桃代さんに話を聞かせたそうです。

　知覧から飛び立ち散華された方々は439名。戦後に御遺族の方々がトメを訪ねて来ましたが、ただ一人、光山少尉の御遺族は訪ねて来ませんでした。

その事をトメから聞いた桃代さんは「トメ小母さん、光山少尉の御遺族は私が必ず探します」と約束をしてくださったそうです。その日から桃代さんの御遺族を探す日々が始まりました。光山少尉の出撃した日の天候や通っていた京都の薬学専門学校の資料を調べたり、無事生還された方々に呼び掛けました。するとトメと桃代さんが会った日からちょうど一年後のその日に、桃代さんのところに光山少尉の御遺族が見付かったとの連絡が届いたのです。

トメに電話を掛けて、光山少尉の御遺族が見付かった事を伝えると、トメは電話の向こうで喜びの涙を流しながら言いました。「桃代さん、ありがとう、ありがとう・・・」と。

私事ですが、もしも光山少尉の御遺族が見付からなかったらトメは悔いが残っていたことでしょう。

桃代さんは結婚をして子供を出産した後も、旦那様と子供を連れてトメに会いに来て下さいました。トメと倉形ご夫妻とは切っても切れない縁です。

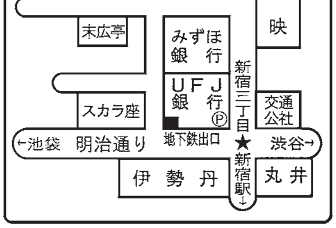
桃代さんの旦那様は航空自衛隊に勤務しており、私はぜひ鳥濱トメの劇である「俺は、君のためにこそ死ににいく」の軍事訓練を倉形ご夫妻に行ってもらいたい、トメもそう願っていると思い依頼をしました。

「俺は、君のためにこそ死ににいく」はトメの目線から描いた劇であります。出演する役者さんの中には、知覧まで行かれた方もおり、私と同じ鳥濱トメの孫である鳥濱明久から「ホタル館・富屋食堂」で話を聞きました。私は「薩摩おごじょ」（東京都新宿区新宿三丁目）にて鳥濱トメ・美阿子・礼子から語り継がれた特攻の話を、役者の皆さんに話しました。皆、涙を流しながら私の話を聞いて下さいました。特攻の劇を演じるに当たり、今回は中身の詰まった役者さん達が演じてくださいました。特攻の劇は1回だけでは意味がありません、いつまでも続けることに意味があります。それがトメ、美阿子、礼子、御英霊、そして私の願いでもあります。

（知覧・特攻の母・鳥濱トメの孫・赤羽　潤）

右より　店主・赤羽　潤さんご夫妻、倉形桃代さん

〒160－0022　新宿区新宿3－10－3
TEL　03（3354）9394　末広亭前
営業時間　PM 5：00～AM12：00
定休日　日曜・祝日



「戦史検定」を受けてみませんか

理事　笹　幸恵

今年は真珠湾攻撃から70年。既に戦争を知らない世代が大多数を占めるようになり、取り分け20～40歳代の若年層は、戦争について学ぶ機会もないまま今に至っています。これは、戦後日本が平和であったことの証かもしれませんが、果たしてこれで良いのでしょうか。

これからの日本の未来を描くとき、過去の歴史は私達に教訓と指針を与えてくれるはずです。また、国際社会においても、自国の歴史を知っていることは重要でしょう。どんなに英語が堪能でも、自国の歴史文化への愛情がなければ真の国際人にはなり得ません。いえ、それ以前に、現在の繁栄の礎となった父祖たちへの感謝と追悼の気持ちを持つ、これはごく当たり前のことではないでしょうか。

しかしながら、今なお若い世代の戦争アレルギーは厳然として残っています。教育が悪いと言うのは簡単だけれど、何とかして若い世代に先の戦争について正しい知識を得てもらいたい。そう考えて、昨年から実施しているのが「戦史検定」です。

母体は戦史検定協会ですが、その内訳は「ＪＹＭＡ日本青年遺骨収集団」と、私が主宰する「近現代史研究会(Panda会)」の有志が集まったもので、会員が手弁当でこれを行っています。ここで、誌面をお借りして、検定の内容について少し説明させていただきたいと思います。

◆検定実施の目的

検定の目的は大きく分けて二つあります。一つは、前述のとおり、検定を通して戦後世代に正しい知識を得てもらうこと。もう一つは、海外にある慰霊碑の保全です。時間の経過とともに海外の慰霊碑、顕彰碑は忘れ去られ、風化しつつあります。本検定では、事務関係の費用を除くすべての収益を、海外慰霊碑の保全・修復の費用に充てていきます。

◆検定の概要

試験日／平成23年11月20日
試験会場／日本青年館（東京都新宿区霞ケ丘町７１１）
試験方式／五者択一のマークシート方式
出題数／初　級　五〇問（60分）
中上級　一〇〇問（90分）
応募資格／どなたでも受験可
受験料／初　級　三八〇〇円
中上級　五五〇〇円

※初級受験者に対しては、試験前日、希望者にのみ靖國会館で、受験対策セミナーを実施します。

◆昨年の実績

平成22年は、第1回として初級のみ試験を実施しました。費用の関係で大規模のＰＲはできませんでしたが、申込者総数は２９２名と、多くの方から申し込みをいただきました（受験対策セミナーを受講した方は１０７名）。

また、選択肢アンケートを実施し、戦史検定を受けた理由について聞いたところ、次のような結果になりました。

・検定の趣旨に賛同した（38％）
・知識向上のため（27％）
・慰霊碑保全に興味があった（16％）
・遺骨収集に関心があった（14％）
・その他（5％）

このほか、自由記入のアンケートでは、様々な年代からの意見があった。

・自分の歴史知識を試したかったから（多数）
・正しい歴史の知識を学び、後世に伝えるため（70代男性）
・学校で習う歴史教育は偏りがあるので、中立的な立場から見た試験を受けてみたかった（50代男性）
・微力ながら協力したい（60代男性）
・歴史学習に対する意欲保持と向上のため（40代男性）

なお、第1回の初級試験には、約8割の受験者が合格しています。

戦史を含めた歴史は議論の対象であり、検定だなんてとんでもないと思う方もいるかもしれません。しかしながら、歴史に対する議論は、一部の専門家の特権であるはずはなく、更に言えば、一般の若者の無知・無関心は、この国の未来を信じて戦った先人たちに心を寄せることすらない現実を意味しています。私達は、検定という事業を通して、この現実を変えていきたいと考えています。

本検定の趣旨にご賛同くださる方、実力を試してみたい方、是非とも今年の戦史検定を受けてみてください。

詳しくは、同封のパンフレットをご覧ください。

【検定に関するお問い合わせ】

○戦史検定協会
電話０３‐６２６８‐９９３９
（受付時間・平日10時～17時）
ＵＲＬ
http://www.senshikentei.org/

検定の詳細やお申し込みはWEBからでも可能です。ご協賛金として１口１０００円のご篤志も受け付けています。

新刊図書紹介

○寺田　晶・著／致知出版社

『特攻―一つの時代を駆け抜けたある青年の記録―』

素人の私がこの本を上梓することができたのは、神仏のお引き合わせだったのではと考えることがあります。

7年前に串木野のお寺が主催されたお遍路で、湯川れい子氏にお目にかかり、令兄湯野川守正氏をご紹介頂いたことから始まりました。

湯野川氏の話してくださる生き生きとした歴史は目映いばかりでした。特攻を志願されたということで、異次元の聖人を仰ぐような発言をすると強く窘められ、殊更ご自分の失敗談を強調されます。日々平凡に暮らし、一旦緩急あれば義勇公に奉じるということは当時の青年であれば当たり前のことだったと言われるのです。

「海軍士官は自分のことを喋るものではない、自己宣伝型は一番嫌われる。」を身上としていらっしゃいましたが、全く戦争を知らない世代へ「事実をありのままに残し、判断は後世に委ねる」ために「長生きをした者の義務として」と語ってくださいました。

今回の震災後に総理大臣の「国難に対して命がけで頑張る」という言葉の軽さが物議をかもし出しました。一人の青年指揮官の生き方を通して、この国には、国難に際して黙って命を捧げられた方々が陸海軍を問わず沢山いらしたのだということを、再認識して頂けたらと思います。

《湯野川守正氏　略歴》

大正10年長崎県佐世保市生まれ。海軍兵学校71期卒業。太平洋戦争時、人間爆弾と呼ばれた「桜花」特攻隊の分隊長を務める。戦後、航空自衛隊入隊。要撃管制官として自衛隊バッジシステムの建設に取り組む。三沢基地司令・航空実験団司令を歴任。昭和51年退官後、日立製作所に勤務。営業本部顧問を経て60年に退職。現在89歳。

《寺田　晶》

平成16年、湯野川氏と出会って以来、一千時間を越えるインタビューを行い、そこで明らかになった事実を後世に伝えるべく本作の執筆にあたる。

お知らせ

1　役員の交代

平成23年6月7日に開催された理事会において、平成16年から今日まで、瀬島龍三氏の後の第三代会長（理事長）の職を担ってこられた山本卓眞氏と、長年理事の職を務めてこられた菅原道熙氏が、それぞれ辞任されることとなりましたので、同理事会の決議により、山本卓眞氏の後任の理事長に杉山蕃理事を、名誉会長に山本卓眞氏を、顧問に菅原道熙氏をそれぞれ選出し、7月1日付けでそれぞれ就任されました。

なお、7月1日現在の当顕彰会の役員等は次のとおりです。

名誉会長	山本　卓眞
顧　問	菅原　道熙
理事長	杉山　蕃
専務理事	藤田　幸生
業務理事	栗原　宏
理　事	大久保　隆
理　事	深山　明敏
理　事	廣嶋　文武
理　事	臼田　智子
理　事	笹　幸恵
監　事	伊集院雅英
監　事	志賀　昭夫

2　第60回特攻平和観音年次法要

例年のとおり、来る9月23日（金曜日・秋分の日）14時から、世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、駒繋神社との神仏習合により斎行されます。

詳細に関しましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、皆様お誘い合わせの上、多数ご参列くださいますようご案内申し上げます。

3　フィリピン特攻隊慰霊祭への参加について

例年10月25日に、フィリピン・マバラカット市において催行されます、特攻隊慰霊祭（現地名・世界平和祈念式典）には、今年も当顕彰会から代表者が参列いたします。

昨年も会員を含めて数名の方が個人的に参加しておられますが、「百聞は一見に如かず」で、都合の付く方は是非、現地慰霊祭に参加されることをお薦めいたします。

当顕彰会の代表と同行を希望される方は、日程等の詳細について、当顕彰会事務局まで、なるべく早目にお問い合わせください。

○お知らせ

「建立二周年・特攻勇士慰霊祭」

大阪護國神社では、昨年に引き続き「建立二周年・特攻勇士慰霊祭」が行われます。これは、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会が推進している、全国の護国神社に「特攻勇士之像」を建立する事業の八体目として、近畿偕行会等のご尽力により当護國神社に建立されたものです。

国のため、特攻で散華された英霊の慰霊・顕彰を行い、その崇高な精神を後世に長く伝えることを目的としています。

特に近傍の会員の皆様のご参列をお願い申し上げます。また、会員以外の方もご自由に参加できます。多くの賛同者を得ることが目的の永続性に繋がることと思います。

日　時　平成23年10月23日(日)
11時~13時30分
(受付開始10時30分)

場　所　大阪護國神社「特攻勇士之像」前
(大阪市住之江区南加賀1－1－77・地下鉄四つ橋線住ノ江公園1番出口)

問い合わせ等連絡先
特攻勇士顕彰会
事務局長小野寺正芳
〒664－0846伊丹市伊丹1－13－4
(TEL&FAX072－782－2156)

○お知らせ

「千　玄室氏による特別講演」

日　時　平成23年10月18日(火)
13時30分~15時

場　所　公益財団法人　水交会
(東京都渋谷区神宮前1－5－3
東郷記念館内)

※　聴講希望者は、水交会に事前申し込みが必要です。

電　話　03－3402－1491

講　師　第十五代表千家家元
特攻隊慰霊顕彰会会員
元特攻隊員

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成23年4月1日~6月30日)
(単位千円)

一〇〇　中台不動産株式会社
一〇　細川　實　　一〇　折下　寛法
一〇　特攻殉国の碑保存会
七　丹羽　等　　五　高田　定司
五　藤井　日正　　五　安野　憲治
五　菅原　道熙　　五　杉山　徹宗
五　阿久澤英紀　　二　佐藤　一志
二　竹尾　正利　　二　黒島宇吉郎
二　久保　雅史　　二　西村　友雄

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿(敬称略)

(平成23年4月1日~6月30日)

茨城県　神永　徳重
埼玉県　福嶋　栄次　高橋　明子
千葉県　木村　博　山脇　智美
　久田　智志
　千葉県護國神社宮司竹中　啓悟
東京都　仁井　健治　橋本大二郎
　赤池　英和　原　桂子
　山中　邦生　見崎　達雄
　石垣貴千代　大西　優
神奈川県　中崎亜莉沙　中崎　莉奈
福井県　土本　由紀
愛知県　下村　直資　木村　正樹
京都府　樋口　淳平
大阪府　田中　恭治
福岡県　佐多　和仁　廣島　正蔵
鹿児島　菊野　和郎
ドイツ　ヨシコ　モリトー
(Mainz Germany)(Yoshiko Molitor)

◆　◆　◆

会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

栃木県　塩田勝一郎　(23・5・6)
埼玉県　西牧　照次
　馬郡　道生
千葉県　生沢　久
　能智　昌一　(23・3・6)
　梨子本　寛　(23・4・24)
東京都　秋元　一仁　(23・3・19)
　片桐　和嘉　(23・2・18)
　原田　敏雄　(23・3・29)
神奈川県　衣笠　勤二　(23・　・　)
　白石　英雄　(22・12・20)
　富原　郁夫　(22・5・13)
　村井　信方　(22・12・6)
愛知県　白木　萬輔　(22・4・　)
三重県　三宅　浅男　(23・4・16)
京都府　長尾　久雄　(22・1・2)
島根県　金崎　正美　(23・4・18)
広島県　高田　正之　(22・12・16)
福岡県　奥平　正人
　新名　啓祐　(21・10・21)

暑中お見舞い申し上げます

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

名誉会長 山本卓眞
顧問 菅原道熙
理事長 杉山蕃
専務理事 藤田幸生
業務理事 栗原宏
事務局長 羽渕徹也

公益財団法人 偕行社

会長 山本卓眞
理事長 志摩篤
副理事長 塩田章
副理事長 福田一彌
副理事長 深山明敏
専務理事 白石一郎
事務局長 菊地勝夫

公益財団法人 水交会

会長 林崎千明
理事長 夏川和也
副理事長 [illegible]岩壮吉
専務理事 藤田幸生
事務局長 信兼旭男

公益財団法人 海原会

理事長 横溝潔
副理事長 阿保文敏
専務理事 津島裕

航空自衛隊退職者団体 つばさ会

会長 竹河内捷次
副会長 杉山弘
副会長 山本修三
副会長 小田邦博
副会長 藤川壽夫
専務理事 山本隆之
副専務理事 小鹿勝見

当会会員ご入会のご案内

当会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○協会の沿革
昭和27年5月設立
平成5年11月財団法人認可
平成22年12月公益財団法人認定
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
三代会長　山本　卓眞　氏
現理事長　杉山　　蕃　氏

○協会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・講演会等の開催
・機関誌等の発刊その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒105-0014　東京都港区芝2-5-19　TAビル4階
公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当会事務局宛としてください。

記

〒105-0014　東京都港区芝2-5-19　TAビル4階
(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
事務局
電　話03-5730-1016
FAX03-5730-1017